

プロフィール

今回、協会のHPがリニューアルすることになり、もしかしたら僕の『生涯記』をどこかに保存出来たらと思いきのまま10年以上ほったらかしにしていた記録を読み直し修正するところがあったら直してみたいと取り掛かった。ちなみに今日は2020.2.20日であります。ぼくの人生80年か90年か分かりませんが未来人(孫以降の親族が慶二さんとはどんな人だったのだろうか?)がわかるように本人が自ら書き残しておきたいと思い創りました。

1939年11月26日 中国北京市に生まれる 父は同盟通信社の新聞記

鹿児島市立大竜小学校 (昭和21年4月～27年3月)

鹿児島市立長田中学校 (昭和27年4月～30年3月)

鹿児島市立玉龍高等学校(昭和30年4月～33年3月)

立教大学・文学部(日本文学科) 33年4月～38年3月) 4年生の時から

キヨシ美容室(当時日本一の有名美容師・石渡 潔の浅草橋店37年4月～39年

3月)、真野高等美容学校(夜間部)に入学1年半通学しながら 昼は代々木上原・

ロザン又美容室の檀上成子氏に師事。

鹿児島市・美千代美容室その後、ラ・ヴィ・・・と美容師生活40年、鹿児島初の男性美容師として活躍。市内NO1店の司令塔としてハサミをにぎる。

1960年に兄達と行った中国旅行をきっかけに生まれ育った大陸への帰郷想念が強まっていく。やがて「大陸ぶらり旅」にのめり込んでいく。期限付きの旅では飽き足らず、店をほって日本語教師として、鹿児島との友好都市『長沙』の日本語学校に赴任(といっても半年)。天文館の活性化活動のなかでカプラの海江田順三郎氏と知遇。共に市日中友好協会の活動をひっぱる。鹿大はじめ在鹿の中国人留学生の世話人として市民と中国人留学生の交流に励む。

2010・10・1 鹿児島市日中友好協会の企画部長・理事長として中国との民間交流事業に取り組む。

物心ついてから小学校低学年(3～4年生)頃までと、10代を二つに分け三つの時代の自分史をひも解いて見よう。いつかは...と思っていたことが愈々始まる、そ

第一章 (誕生から小・高校卒業までの回想)

大石けいじ(Kクン)の物語風履歴書 2017. 1改訂

十五年ほど前から書き始めたこの自分史(当稿)を第1部として、このあと2014年(平成26年)10月に刊行した母校玉竜高校の同期生で作っている八期会の(卒後55周年の)記念誌に投稿した『クールストラッティン』(東京での大学生生活を中心にした当稿の続編にあたる回顧ドキュメント)とまとめ書き残しておきたい。構成は当時の言動は「ぼくかKくん」の1人称で、解説・回顧は今の僕からの文章になります。

【ぼくの記憶に残るはじめの頃のこと】1942年頃(2歳から4歳)

(はじめに)

この頃、無性に、過去を振り返ってみたい気持ちになります。

そのうち、気力がなくなり、過去を思い出すのさえ億劫になる時が必ず来るに違いない、そんな確証に近い予感がするからです。今ならまだ思い出せる、その思い出を記録しておきたい。出来ることなら、思い出すだけじゃなく当時の空気や体感温度まで感じとってみたいと思うのです。

そのことは、とてもきつい、努力の要る仕事のように思われます。もう既に風化してしまった、喪失の部分も沢山あるからです。旧友達と会話が弾む時、自分だけ昔話に参加できず、記憶の剥奪された部分の多さに驚かされます。



中2(13)のころ母(35歳)と上町の家の屋上にて写す。

んな胸のトキメキさえ感じています。

登場する人々は写真も固有名詞もまさにノンフィクションですが、僕と時代を共有したことでご容赦願えれば幸いです。

(本文)

はつきりとした記憶の始まりは、中国の北京から天津を経由して塘沽港(天津外港)へとひた走る引揚げ列車の中の光景からである。

..... はるか彼方に地平線の見える大陸の荒野を汽車は走っていた。

30両編成ぐらいの長い貨物列車(青空)だった。夜陰に紛れて逃げるようにヤンチヨ(人力車)に揺られ駅に着いてからの記憶は定かでない。

幼児期を過ごした北京の家の思い出も喪失に限りなく近い。中庭に大きな棗の木があったこと、外に来る行商のアメ細工売りの作る動物を見るのが楽しみだったことぐらひ。

ひるさと日本へ帰れることにホッとしながらも、片方では、過去も未来すらも、すべてを失ってしまった今の自分たちと、焼け野が原になってしまっているかも知れない自分たちの故郷を想う人びと。

そんな、いろいろな人々の、それぞれの思いを詰めて、列車は天津港を目指していた。

満天の星空など眺める余裕もなく、夜になると夜露をしのぐ為、硬いテントの幌を車両の上に被せた。人も石炭も同じだった。

時折、遠くで銃のような音がしたり、動物の遠吠えなども聞こえた。

ギィーツと音がして、列車が突然、止まることかしばしばあった。

..... 突然声がして、人の降りる気配がする。

ザワザワと音がして、止まった汽車に物売りに来たのでだろうか、物売りが来たから列車が止まったのか、止まったから物売りが来たのか、もともと、止まらすべき駅みたいな所だったのか、僕は覚えてはいない。

覚えているのは、鶏の蒸したのを近くの大人の人が物売りから買ったのだろう。

..... 「オイッ!坊や、食べないか?」

と僕に、手で裂いたもも肉の一部を渡してくれた。僕はそれを、兄妹3人で、塩をつけて食べた。

その時の蒸したかかわの味は、今でも忘れることは出来ない。

かかわと言えば、どんな鶏料理よりも、裸のまま蒸して、何も付いていない、そのままの肉に塩を付けて食べるのが一番好きである。

全く、青い空と白い雲以外、何も見えない東シナ海の海原を船は佐世保港を目指していた。母に「危ないから上に、行ってはいけないよ」と言われていた。そのとき僕の年齢は5歳。

上陸用舟艇(LST)のデッキから僕は、海以外になんにも見えない、景色を何時間も眺めているのが大好きだった。

何を考え、何を思っていたのだろう。おそらくなんにも考えてはいなかったに違いない。

でも、あの風景は、今でも、僕の脳裏からけっして離れることはない。

60年たった今でも、たとえどんなロケーションでも海はほくの目を引きつける。テレビ画面に映し出される港の光景、船釣りのシーンも人より、魚より、海そのものを眺める方が好きである。

大人になってから小学校の同級生(なぜか女の子が多い)たちから「大石くんって、小学校のころ大人になったら船乗りになるんだって言ってたよね」とよく言われる。

台風や、水害で避難勧告が出て、近くの学校の体育館などに避難している様子をテレビで見ると、僕は、あの時の上陸用舟艇の船倉を思い出す。

いまでいう台風災害時の学校の講堂の集団避難所の間がびっしり詰まった場所と思えばよい。

..... 軒?と言いつのか?分からないけど、離れていた家族の中に、ボクと同じくらいの子供がいて、とても可愛かった。時々、その子と眼が合うと恥ずかしかった。

本当は嬉しかったのだろう。僕の年は5歳くらいだったろう。今覚えているかきりでは、異性を意識した初めだったかもしれない。

孫娘（未宇ちゃん）をみると、まだ3歳だけど、すでに保育園の仲間だ。「* *君が好き」と固有名詞が出てくるので当時の6歳は決して早すぎはしないだろう。

佐世保の収容所のこともおぼろげである。DDTという殺虫剤を頭のとっぺんから足までまっ白に降りかけられた記憶は残っている。

ネットでタンクローから佐世保港に着いたLST利用の昭和20年引揚者の手記を読んでもみるとこうなっているようだ。（下は南風先駅）

— 佐世保の浦頭港に入った引揚者は、南東の針尾島（現在のハウステンボス付近）にあった引揚援護局で各種の手続きを済ませ、2、3泊した後、南風先駅（はえのさき）から日本各地の故郷へ帰っていった。管理者の話では、終戦までは軍艦などが接岸されていた佐世保港は米軍に接收されたため引揚者は当時検疫所があった小さな浦頭港にひきあげてきたのだそうです。140万人の人がこの小さな港に引き揚げてきたそうです。上写真は阿久根のおじいちゃんとおばあちゃんとぼく。下写真は母カスミと2歳年上の兄・健一。

共に場所は未定。写真は残念なことに殆どない。



この後の記憶は阿久根の海浜（はまんどろ）と言っていた。で、砂に潜った白いカニをイリコ（煮干）でおびき寄せて捕まえて遊んだり、川でダンマエヒを捕りをしたり・・・家の近くの土手には大きなへびがよくいた。僕は

怖かったけど、近所のワンパク小僧は平気で尻尾を掴んで振り回していた。

祖父母の家の庭には、小さなわき池があって、朝、顔はその池で洗った。水溜りのようなその池にはイモリもゲンゴロウもいた。

赤い色をした岩カニが石の間から何匹も出たり入ったりしていた。ミススマシも泳いでいた。



僕はこの澄んだ小さな池が好きだった。池の中にはぼくのゆめがいっぱい詰まっていた。後年、娘の孫たちが公園の隅っこでありの行列や、時にはタンゴ虫をみつけて手のひらに載せて遊ぶのを見るとはるか昔の分とかさねて懐かしい思いになる。



こうして書き起こしてみると、まだまだ、いろいろな事を覚えてるものがある。

自分の人生の中でたとえ一年か一年半の期間だったかも知れないけど、小学校に入る前、阿久根の田園で過ごした日々は、とても、貴重な、実り多い時期だったように思う。

内地にいた子供たちも疎開した田舎で過ごしたそれぞれの思い出も楽しいことだけが残っているのではないだろうか。少し話をさかのぼってみることにする。

北京に住んでいたころ、二つ上の兄は北京の日本人の小学校の二年生？だったのだろう、国民小学校というのか、二つ下の妹は、何をして遊んでいたのか、本人に聞いても分からないだろう、幼稚園なんかはなかったと思う。

実は後年母に聞いた話だと、ぼくが生まれて一歳か2歳のころ、父の転勤で今の韓国のソウル（当時は京城と言った）に住んでいたことがあるらしい。もちろん全く記憶はないが。

北京の記憶は実はちぎれちぎれで残っている。大きな門のある一軒家だったこと、庭の真ん中に大きな木があって、棗（なつめ）の木だったという。

（下の写真はネットで見つけた僕の想像に近い家）

父がよく出張から帰るとお土産（たべもの）を買って帰ること、朝、門の前によく中国人のうんこがあったこと、母がぼやいていたこと、近くに大きな城門があった石垣ののぼって兄と遊んだ記憶、後年、そこが万里の長城と思いをしていたこと、実はそこは、紫禁城の城門だったこと（実は確証はない？）その他、子供だった僕はいろんなことを、何にも知らなかったし、これから引き揚げていく阿久根

というおじいちゃんが住んでいる田舎が日本のどこにあるのか、いや日本という国が何処にあるのかも知らなかった。

実際のところ、その頃は、どこどこが戦争をして、戦争が終わって、日本という(自分の)国が負けたことすら、知っていたのだろうか?北京の家にピストル(多分父のもの)があつてシボルバーから金色の弾丸を父に見せてもらったのを覚えていた。ともかく僕の幼児期は可愛がつくれた親戚のおじさんおばさんとか、そして近所の人々、という今ごろの4、5歳の子供が体験するであろう環境というものが何もなかった。

もしかしたら親子3人、隔離されていたわけでもなからうから、実際はよく顔を合わす日本人家族や、中国人の近所さんなどの付き合いや交流もあったのかもしれない。ただ、多かれ少なかれ引揚げて来た子供らの記憶や環境はこれに近かったに違いない。

でも、2歳上の兄は学校に行っている知っていたのだろう。この差は大きい。



実は父は私たちと一緒に引き揚げてきたのは幸運だったのだと、大きくなってから聞かされた。

職業が報道関係なので軍の機関と繋がりがあり国民政府軍と毛沢東の中国共産党との確執のはざまでいろいろ戦争犯罪人の逮捕が始まり、父も事情聴取で引っ張られたと、「お父さんはわたしたちと一緒に帰れないかも知れない」と母が言ったことがあります。

確か、今思い出すとこれから北京駅に向かって出発する日の朝、ヤンチヨ(人力車・写真上)に乗って行くとき父は乗って行かなかった記憶があります。(両親が健在のころ、訊いてみればよかった、その他のことも)

今逆算してみるとその頃の父の年齢は44歳くらい、母は31歳ということになる。(ちなみに長女の和香が生まれた時の年齢関係は父(実)・68歳、母(カスミ)・55歳、僕が28歳で妻の通代が26歳でした)

一年間ほど阿久根の祖父母の家に厄介になって(実はこの時期がぼくにとっては今という幼稚園大きい組世代の体験する入学前の楽しい思い出の時代といえる)

1946(昭和21年)4月

大竜小学校へ入学

昭和21年(1946)の四月1日僕は家から15分くらいの大龍小学校へ胸ふくらませて入学した。

その頃、僕の家は上町市場の前で文房具屋をしていた。その前ちよつと電気屋もしていた気がする。父は新聞記者だったので商売は不慣れだったようだ。文房具屋とは紙とペンが商売道具だった父にはふさわしい商売だったのかも知れない。どの時点で酒屋に転業したのかよく覚えていない。酒とたばこは専売品で許可がないとどこでも売れない。昔の同業記者だった白坂さん(甌島出身)が西日本新聞の記者で父の友人だった関係で許可がおりたらしい。



ぼくの小学校の頃は文房具屋だったと思う。大竜小学校までの距離は15、6分というところだった。本当は10分位で登校出来る距離だったけど、五分の差は寄り道だった。

登校途中に、あちこちに爆弾の落ちた跡に出来た水溜りのような池が沢山あった。そこに飛んでくる、シューボーイと呼んでいた黄緑色のトンボを登校、下校時に追いかけて、学校の周りの溝の乾いた土の中にいるオケラを捕まえたり、教室に行くまで時間がかかった。

ラジオから「鐘の鳴る丘」が初めて放送された年である。

「……緑の丘の赤い屋根、……トンガリ帽子の時計台……鐘が・な・り・ま・す・キン・コン・カーン……メヌメエ 子やぎも泣いてます……。……」学校には、未だ、まともな机もイスもなく、折りたたみの簡易イスを手にとって登校した。勿論、ランドセルを負った記憶は無い。

今、当時の集合写真を見ると、それぞれ思い思いの格好をしていて季節すら分からない。

帽子は皆持っていたのだろうか？半分は裸足だった。

ノートや鉛筆など未だ余りない時代だった。

クラスメートの中には、不自由してる生徒も多くいた。

僕は、うちの店に売ってる消しゴムや鉛筆をそんな生徒によく上げた。

そんな訳で、僕の周囲はけっこう賑やかだった。(三角の辺が横顔になっているコーリン鉛筆が三菱より安かった)

マンガを描くのが好きで鞍馬天狗や紫頭巾は得意だった。

「少年活劇文庫」「少年画報」「少年クラブ」「少年」は愛読書だった。教科書より熱心に読んだ。倉金章介の「あんみつ姫」馬場のぼる「ボストくん」などの漫画から 山川惣治の「少年王者」小松崎 茂「宇宙科学もの」などペン画が好きだった。

店に売っていたのペンでよくペン画をかいて投書した。

3〜4年生の頃までは漫画ばかり描いていた。東京の光文社に投稿して一回だけ「少年」に掲載された。といっても「お友達欄」だけだ。

4年生までの教室での記憶は余りない。強いて言えば、学級壁新聞など作った記憶ぐらいだ。5, 6年になると、ワルが多くなってきたせいか、先生に怒られた記憶が増えてきた。学校から帰ると大体二つのことが待っていた。



一つ目は紙芝居が上町市場の角にやって来る。

「黄金バット」と「……千匹狸」が連続もので、見過ごす訳にはいかなかった。

たまにワルをして残されて遅くなったたりして、いつもの場所が終わっていると、次の路地まで走って見に行った。水あめを二本の箸で回転させながら紙芝居に夢中だった。イカの足を醤油で焼いたのも美味しかった。3分の一は只見だった。

紙芝居が終わると次は「そろばん学校」が待っていた。

旧専売局跡に「赤塚ソロバン学校」はあった。上級者は大隈そろばんという今流に言えばブランドものをもっていた。

なにやら、粉みたいなものをバタバタふりかけ、滑りを調整しているのを横目で見ながら「ヨシ、今に三級になったら僕も買ってもらう。」と頑張ったけど果たせなかった。

実は、三級の試験には伝票計算というのがあって、左手で伝票の端を繰りながら玉を弾かなければならず。僕は左利きの為ソロバンを左で弾いていた。つまり、右手で伝票が繰れないのである。でも大隈そろばんは欲しかった。曾根さんという背の高い教師が一回だけ貸してくれた。計算はしないで、人差し指で上段の五桁の玉を右から左へスッと走らすともいえない音がした。

重量感といい、玉切れといい 品物で初めて欲しいと思ったのが「大隈そろばん」だった。

夏になると休みは祇園の州でうなぎをとって多賀山でターザンごっこをして遊んだ。

多賀山では竹鉄砲を作って打ち合いをしたり、祇園の洲では「うんつき」という竹の先に銚をつけ 反対側の先に自転車のチューブを裂いて作ったモリをかっついて「琉球人松」から海に降り 渡りカニを捕った。僕たちは「じきじん松」と呼んでいた。

後年、美しかった一本松は松くい虫の犠牲になって碑だけが建てられた。

いでたちといえば、上はランニングに下は半ズボン、その下に「キンツリ」という海水パンツふんどしの合いの子のようなものを付けていた。足は裸足が定番だった。

稲荷川の踏切の前のアイスキャンデー屋でアイスボンボンかキャンデーをよく買った。あずきアイスは10円で他は5円か7円かだったと思う。店のおじさんが平面の冷凍庫をあけると一瞬吹き上がる冷煙を覗き込むのが好きだった。

僕たちは太陽で溶けて、所どころペースト状態になったアスファルトの上を飛び跳ねながら磯一本松（琉球人松）へ向かった。たまには大きなボラを突くこともあった。

5年生の頃はボーイスカウトが流行った。

僕は車町の金光教の建物の中にあつた団体に早速入団した。今でも覚えている言葉は「*ななえつねに*」だけである。

何の訓練をしたのか殆ど覚えていない。強いて記憶を搾り出す、縄の結び方ぐらいか、ナ、だけど、やさしいお兄さんが班長にいて、正月は松原神社にサーカスやお化け屋敷を見に連れて行ってくれた。

父が「そういう人は気をつけないと危ないですよ」と言ったのを覚えている。

やさしい人が何故危ない人なのかサッパリ分からなかった。



ボーイスカウトでいちばん記憶にあるのは帽子のことだ。何年か経って試験に合格しないと、あの格好いいカウボーイハットは被れなかった。

僕たちは縦長の封筒の横を切り開いたようなG1帽子をチヨコンと頭に載せ、先輩たちの頭にのったツバつきの帽子を羨ましく眺めていた。

映画もよく見に行った。記憶にある映画ベストスリーは1位・大平原 2位・シーホーク 3位・怪傑ソロだ。勿論主演はエロール・フリン。

学校で海人草というお腹の虫を退治する薬を飲ませる日など 学校をサボっ映画

を見に行った。

、家を出る時は「いつてきまーす！」と嘘を言って、映画館に直行した。不良少年である。当時は補導等なかったのかも知れない。

何年生の時か覚えていないけど、いつものように知らん振りをして「ただいま!.....」と家に帰ると、母が「クラスの赤瀬川さんという人が大石クンにだって連絡帖を届けに来たよ」まさか、僕が海人草が嫌いで学校をサボったなどとは母は思ってもいない筈。多分、忘れて帰ってきたと思っていたのかも知れない

「.....」 勿論、本当のことは言わなかった。

只、何と云って、誤魔化したのか全然覚えてはいない。余程落ち着いてウソ言ったのか、母の度量の方が勝っていたのか今は知る由もない。

でも、映画は本当によく見に行った。以来の人生で僕がいろいろなものに好奇心を持つ人間になった要因と言っか、原点というか、それは多分に映画館と貸し本屋への通い詰めがあつたように思う。

考えてみれば、当時、そうそうお金を持っていた筈はないし、どうやって映画館にもぐりこんでいたのだろうか? 一つ覚えているのは子供（7歳以下は確か無料だった）になりすまし、先輩の背中に負んぶされて入り口を抜けた記憶がある。

その時は成功したけど繰り返した覚えがないところを見ると危なく失敗しかつたのかも知れない。

あの頃、映画館の周囲は板塀が多く一枚ぐらい板をはがして侵入したこともあったのかも知れない。

浪花節もよく聞いたもの一つである。母が浪曲好きで一緒に大正会館などに付いて行った。

寿々木米若、木村若衛、天中軒雲月、春日井梅鶯.....その他、当時はラジオでものご自慢番組などで「壺坂靈源記」などは誰でも知っているヒット曲のようだった。

「...妻は夫をいたわり...つ、夫は妻にシタイ...ツ...ツ...ウウ...頃は六月中の頃...夏とはいえど、片田舎アアア」結構、ブームでもあったのかもしれ

っている」と「アッ！横変米じゃない？」『違つよ、これは「ビタミン米よ」そんな会話があった。

4月：日航・もく星号大島に墜落(7名死亡) ●君の名は』放送開始

5月： ●白井義男フライ級世界チャンピオンになる。相手はハワイのダド・マリノトレーナー、カーン氏も有名になる。

7月： ●羽田空港誕生 ヘルシンキオリンピック開催 国際的には徐々に独立して「保安隊」そして「警察予備隊」が出来やがて「自衛隊」へとつながるスタートの年だった。電気冷蔵庫もこの年登場する。

昭和28年

(キーツ)

死の灰・ロマンスグレー・お富さん・オーマイパ

パ・笛吹童子・紅孔雀・中村錦之助・ローマの休日・オードリー・ヘップバーン・恐怖の報酬

昭和30年(中学3年〜高校入学)

1月 ● シネマ初公開 ● トヨペットクラウン登場

7月 ● トニー谷の長男誘拐事件

と云うのは 高2の時、彼女にデートの申し込みに行った渡辺くんが、「首尾よく成功したら手を振るからな、というので」、望遠鏡で眺めていた記憶があるからだ。むろん桜島も、山形屋も見えた。

暑い夏の夜は屋上にふとんを敷いて、星を眺めながら寝たりもした。コンクリートの床が少々痛かったけど。

初めて*マダ*といえる本当のガールフレンド、マコちゃんとふるえながら唇を触れ合った場所も、そんな暑い夏の夜のこの場所だった。

有村文之くんは僕の中学時代の最大の朋友だった。学校の成績を除いたら、僕が彼に勝るものは何もなかった。

1月 ● NHKでテレビ放送開始、吉田首相衆議院でバカヤローと発言
3月スターリンの死

4月ポストンマラソンで山田敬蔵優勝 ●防衛大学誕生
9月●映画にワイドスクリーン登場

8月民間テレビ放送開始 12月 ●奄美群島日本復帰

(キーツ)

アカ電話・シエットコースター・立体映画・落下傘スタイル・真知子巻き・シエーン・禁じられた遊び・終着駅 さいざんす(トニー谷)マンボ

昭和29年

2月 ● モンローとディマジオ来日、シャープ兄弟と力動山・木村のタッグマッチ

3月 ● 第五福竜丸、ビキニ沖で被災

9月 ● 洞爺丸沈没 139名不明 11月 ● 「ジラ封切

12月 ● 吉田内閣総辞職、鳩山内閣成立

8月 ● ソニーがトランジスタラジオを発売

(キーツ)

電気釜・ポディービル・太陽族・ノイローゼ・ポロシャツ・アロハ・エデンの東、 太陽の季節・月がとっても青いから ・しあわせの歌・神武景気

自宅の屋上、といっても、とても小さなスペースだったが、見晴らしはよかった。

高校に入ってから話だけ、

南洲神社下の同級生の江平さんの邸宅がよく見えた。

特にマラソンは長田中の代表選手だった。そのころ、大流行したローラースケートなど、見てて惚れ惚れしたものだ。

高校が違っても、一番の親友だった。

鹿児島高校に行ってから体を壊し、その頃、結構多かった肺結核を患い、あちこちの療養所を転々としていた。

市立病院で手術をし、城山麓の高岡病院に入院していた頃もよく見舞いに通った。この病院には僕の高校の化学の先生で、通称、エビちゃんこと海老原先生も入院されていた。

高2の頃、僕の家の間借りしていた福留くんも結核に罹り、彼は重富の三船病院

に療養していた。南風病院にも友人が入院治療していた。

結核病院は、だからよく見舞いに通ったものだ。

後年、大人になってから医者レントゲンをとってもらったら「随分昔に貴方は肋膜炎かかに罹っていますね。今は綺麗ですけど、痕があります」と言われた事がある。

人生の悩みとか家庭の悩みとか、愛の苦悩とか、難しい言語を要す会話など、彼との間には全く、記憶にない。

実際はその頃はそれなりに深刻な話もあったが、風化して今、おもいだせないだけかも知れない。

でも、どちらかと言えばお互いシティボーイのよ
うな関係だった、悩みも笑いの内だったのだ。

中学時代の僕らのキーワードと言えば、何だろう？
いろいろあるけど、三つあげるとすると、パチンコ、
ローラースケート、外車のタクシーというところか
もしれない。

断っておくが、これは全くの私見である。自分が今
浮かんでくるあの頃ということである。

いやあ、それにしてもパチンコ屋は全盛でした。

今みたいな大型店じゃなくて、どちらかといえば、魚屋、八百屋、文具や、パチン
コや、と云った感覚に近い感じかもしれない。

まあ、小売店よりは少し規模は大きかったかもしれない。

実は、我が友・文之クンの家は中町でパチンコ店をしていた。彼の家に週に4
日は遊びに行っていたので、僕の中学時代とパチンコの、あのチンジャラジャラ音
は決して離れない。

儲かっていたのか、東京パチンコ店は西駅の郵便局の前に支店がオープンした。
留守番という名目で文之クンと一緒によく泊まりに行った。

林田タクシーまで歩いて、そこからアメリカ外車に乗って西駅まで行く。



もし、その当時引つ掛かって（陽性反応）が出てたら、僕も立派な療養生活者にな
っていたのかも知れない。

でも、そんな病院生活を通して有村クンとの思い出は、太陽のように明るい、
青春の記憶しかない。

それは、彼の性格から来てたのだろう。

シボレー、ビュイック、スチュワードベーカー、リンカーン、フォード……あの
頃は国産車より外車の方がタクシーは多かった。

代金はほとんど文之持ちだった。かなり、えらい気持ちになったものだった。

パチンコ屋の定番のような軍艦マーチは余り聴いたことはない。

お富さん(春日八郎)やそのあと流行った真室川音頭(林 伊佐雄)のメロディはか
り耳に残っている。閉店を知らず「蛍の光」と……

内 和清くん、彼も中学時代、よく遊んだ友達である。家は隣町だった。ハン
サムボーイで鹿児島商業高校に進学した。バレーの選手だった。何故か？僕たちが
ループ人は、別々な高校に進学した。

その頃はそれで寂しくなったとか考えたこともなかったが、

僕にとって、今となっては時代に区切りがついて良かったのかも知れない。

長田中時代の校庭や教室での風景は、その気になって記憶の中に潜ってみなければ
簡単には浮かんでこない。

教室での思い出と言えば、一年生の時（7組）、一
人、美人？教師がいた。

……吉満先生と呼んでいた。

柔道部の**福山浩洋くん**と同じクラスだった。昨
年、40年振りに逢った。中学時代の話になっ
たら、やはり共通の話題として美人先生の思い出
でた。

6年生のとき、モップで教室の掃除をしていた
ら、肩の辺りに異変をかんじたので目をやったら
何と！でっかいムカデが首の方へ向かってい



の値段は当時、十万円前後だった。それから年々下がっていき、高校時代は5、6万になった。

28年ごろの大卒の初任給が一万円、労働者の平均給与が一万六千円位というから、父は身の程を思うと思いついた買い物をしたことになる。

さて、これから僕が僕として目覚めていく30年代に入っていくことになる。

「このあとからはいままでの1人称「僕」は3人称の「Kくん」に変わります。何故？」

あるものを見ることある人の顔がすべてに鮮やかに映る。

脳の何処かの部位がフラッシュバックする。

文字通り（一瞬）の場合もあるが、そのまましばらくぼくとクリスマスローズが重なった（直接にはなくお父様を介したが）そうで、「この場合」光栄です。」と喜んでいいものかよわからぬが、

ここで書きたいことはホットマンさんとのやりとりにはまったく関係ないことである。

ただひとつの文章が「ントになって自分のこと」を考えてみたことである。

一何かを覗いていたら、ふと脳裏に特定の人の顔が浮かんできた。という文章についてのつまらない考察——とりわけ僕の場合はメロディとある人の顔は重なることが多い。



自前のカーステレオから流れてくる楽曲に乗ってアトラランダムに登場する懐かしい友人たちの思い出に耽るのとは別のいいことである。思い出すままに何名か名前をあげてみたくなった。

『わがはジャマイカ』—ハリーベラフォンテを聴くと小・中・高、通しの友人・市来龍作のあのころの顔と共に鹿児島駅前の音楽喫茶「エテン」が、そしてダブるように当時登場したばかりの33センチLP盤が脳裏に浮かんでくる。

この曲は1956年（昭和31年）頃から高校1年ときに登場した「デオオー、デオオー」のかけ声で始まるヒット曲『バナナボート』LPの3曲目に入っていた。ハリーベラフォンテのこのアルバム『カリブソ calypso』はビルボードアルバム

中学・高校時代にまだがる思い出（回憶）として誇り道はなに付きあつてほしい。あるものについてもいろいろあつて音楽（メロディ）の場合もあれば食べ物の場合もある。

ある場面—たとえば、風呂に入った瞬間とか、車を運転していて特定の（わけもわからぬ）曲がり角にさしかかるその一瞬、ある特定の知人の顔がパッと頭に浮かんでくることがある。

その知人との邂逅 かいこうに耽る時もある。

先日、高校3年のクリスマスメントだったホットマンさんからメールが届いた。

チャートを31週1位を続け、LPアルバム史上初のミリオンセラーになった。

実は当時は歌を覚えるのに英語の歌詞は見ないでシンガーの言葉をなぞって憶えていたのでこの曲も長い間まちがって唄っていた。

ダンザ、ウェイオブ、ナイタゲン、アンダ、サンシャイン、テリオファ、マンティトップ……正確な歌詞はこうだった。（ずいぶん違ってさ）Down the way where the night are say and the sun shine daily on the mountain top//

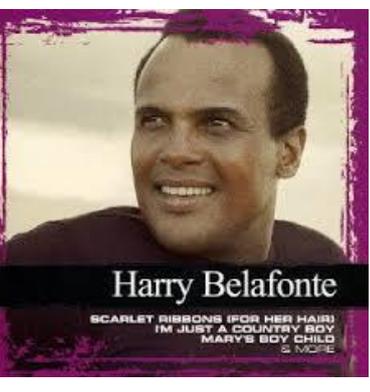
『ブルースを唄おう』—ガイミッチェルと『雨に歩けば』—ジョーリーが流れると中学時代からのぼくの悪友（とても親しかったという意味で）有村文之の口ずさむ顔があらわれる。長田中ではマラソン選手として活躍しアイドル歌手の守屋浩に似ていた。

シチュエーションとしては、決まって文之が結核を患って入院していた照国神社の横の高岡病院の病室である。

ふたりで交わした会話まで浮かんでくる。

当時、照国神社の左側の坂道にはネオンがまぶしいラブホテルが軒を連ねてあった。

いまでこそマイカーで利用される—そうだが当時はまだほとんどのカプセルが寄り添ってなぜか—わかるけど—足早に中に入っていた。



入り口で躊躇する女性の様子などが彼の病室からよく見えるらしくその様子をカメラに語る彼の顔が浮かんでくるのだ。病院の門限がなかったらぜひ観察したいと思った(にちがいない)ものだ。やはりよく有村の顔に重なるようにかれの彼女たちの顔が2、3人(ときどきまきは名前も)浮かんでくる。

皆、美人で可愛く横取りしたいくらい羨ましかった。

彼の愛したスケたち(親しい友だち同志では恋人のことを「おいがスケ」「わいがスケ」という呼び方をしたものだ、どちらかというと二人称(相手によく使った)ただこうして今、文字で書くほどはスケという言葉は当時は女性蔑視のつもりはなくむしろ誇りしげで、秘めた響きがしたものだ。

たん、多くの純真な玉龍仲間はいや、ぼくは使ったことはない」と言うかも知れないがぼくらシティボーイ(のつもり)のまわりでは、このやくざ言葉のような云い方は結構、使われていたと思う。

「はくい」という形容詞をつけて「はくいスケやっど」と言う風な使い方も流行っていた。

「はくい」はその他の名詞にも「美しい」「カッコいい」といったような使い方だったような気がする。

大平博美も小学校の5、6年から中・高・大人(東京で1年間)思い出すのはナンパばかり)までの「わが青春の軌跡」すべての期間無二の仲良しだった。

顔にダブるメロディはまず三橋美智也の『愛ちゃんはお嫁に』なのは何故なんだろうか。

唄っている場所は横浜の綱島のアパートである。(三橋美智也が売れる前に綱島温泉の火焚きの仕事をしていたとは聞いていたけど) もう一曲ぐらいあるだろうといえはあった。

アンソニーパーキンスの『月影のなぎさ』だ。ぼくも好きな曲だった。

やはりひろみの口から出てくる音楽はこれしかない。

博美は故郷宮崎に帰ってお父様の仕事の跡を継いで鉄道郵便の職につき仲間とハワイアンバンドを作っ

て楽しんでいたと聞いた。



小中高と彼は自慢の長髪を73に分け、ポケットにはいつもポマードの匂いのする龍甲の櫛を持っていた。櫛の色まで浮かんでくる。大龍5年のときには彼にはれつきとした彼女がいた。鹿児島駅前に住んでいたフクシマケイコという女性だ。彼女もまた年よりすーっとませた娘だった。

中学生になってから大平に聞いた「はくいスケ」フクシマケイコとの話はあまりにリアルで非現実的な話なのでいまでも「作り話」と思っている。ぼくを羨ましがらせる為の……

浜崎隆へんにヘアリンクしてぼくの脳裏にひっかかっている曲はと言えば何と言ってもロックンロールだろう。初期のエルヴィスサンバーが彼のボディアクションと共に魅ってくる。

「冷たくしないで」など。

本当はその直前、映画『暴力教室』の主題歌として登場したビルヘリーと彼のコメントの『ロック・アラウンド。ザ・ロック』と『シェイクラッパンロール』だった。

そのあとあの有名なエルヴィスのロック『ハートブレイクホテル』だったように思う。

すべてが隆の十八番だった。ふと思いついてスマホに保存している「My favorite song collection」から『ハートブレイクホテル』を聴いてみた。

この曲1956年にエルヴィスがサンレコードからRCAレコードに移籍して最初の曲だった。

そしてぼくが高校時代初めて自分で買ったSP盤でもあった。

本当に擦り切れるほど聴いたものだ。B面に入っていた『was the one(ただひとりの人)』も後年、もう一度聴きたい自分の曲第1位にあげるほどお気に入りの曲である。というのは大ヒットしたハートブレイクの方は以後、も何度もテレビ。

ラジオでながれていたのさほど懐かしさを感じなかったからだと思う。またハートブレイクホテルと言えば小坂一也を忘れるわけにはいかない。

アメリカで大ヒットしたその年に早くも小坂一也は自分のバンド「ワゴンマスター



ズ」を引き連れてこの曲で日本に和製ロック時代の扉を開いたといっても過言ではない。

彼の唄い方はもともとカントリーシンガーなのでともエルヴィスのような元気のいいロックのリズムには程遠い唄い方だったけどそれはそれなりに僕たちは大いに受け入れたものだった。

大学の頃の仲間が多いが兄の友達（名前は忘れた）が唄っていた裕ちゃんの「男の横」も懐かしい。

相本の従姉妹のかっちゃん（カワいい共立高校1年生）は飯田久彦の「ルイジアナママ」そして名古屋のサー坊は「東京ナイトクラブ」「マヒナスターズ」と続いでいっ。

美容師の先生時代に次々に代わる店のスタッフ（16才から23才ころまで）の顔もその時代を共有した歌手やグループがくっついていくから面白い。沼田聖子とドリムズカムトゥルー。大重と「しおさいの詩」ところで不思議なことに、60年代以降に数知れない中国人朋友たちと付合ったけど何故か名前とすぐ浮かんでくる音楽はない。



最初に書いた車を運転している時の人で何故その場所だと、どうしても解けない人の名は?????である。もう説明が長くなるので彼女のことは忘れて下さい。車が左折するとすぐ近くに隠れ家のようなホテルがあったようななかったような。1965年と言う年は以上のように文化、特にマスメディアの面で、そして大衆娯楽の面でそれまでと一線を画す実にエポックメイキングな年になった。

まさにその年、中学校から高校という、これまた少年から大人への変換期にさしかかっていたKくんは、その波にすっかり呑まれてまわっていた。

この年にあのKくんを夢中にさせる番組が登場した。

日曜日夜、9時半から10:00までの30分間、文化放送、50キロメガサイクルあの「ユア・ヒットパレード」である。

思いつくヒット曲を書き連ねてみよう。

どうぞ、思い出す人は一緒にあの時に戻って口ずさんでみよう！。

①最初に登場するのは、ペレスブロードのマンボのリズムに乗ってセレンローサはいかがでしょう。

②番目は暴力教室の挿入歌・Rock・around・the・clock

③番目、テネシアニーフォードの「シックスティントーンズ」プラターズの超低

低

④ 「テキサスの黄色いバラ」

⑤ 「デビークロケットの唄」⑥ 「shot-jit」⑦ 「裏町のお転婆娘」⑧ 黄金の

腕「グリスビーのブルース」

⑨ 「グレンミラー物語」

K的回想

Kが何歳の頃だったかよく覚えていないのだが、Kの家は父が10年程経営していた文房具屋を止めて「大丸酒店」という屋号の酒屋に変わった。

もともと父はやりたかったらしがなかなか許可（免許制）がおりなかったらしく決まった時は喜んでた。

同盟通信時代の友人に尽力を受けたと言っていた。白坂さんと言って小柄でとても姿勢の立派な男の人だった。いろいろいた父の友人の中ではKの覚えている中で一番立派な人だった。

・・・住んでいた文房具屋の隣に、当時としては珍しい鉄筋二階建ての建物が完成した。

二間足らずの間口の割りには、半地下があったり、屋上には洗濯物の干せるベランダを備えたなかなか立派なミニビルだった。

隣の文具店あとに父は何を思ったか豚骨と「おでん」をメインにした小料理屋「浅草」と、天文館まがいのショットバーを始めた。上町地区ではあとにも先にも父のこの時開業したバー「メトロ」以外にバーはない。

・・・「パリで地下鉄というみなんですよ。」

父はKたち子供たちにも大人に話すような標準語で話したことを覚えている。今から思えばその頃父は50代半ばと思うとなかなかの事業家だった。の中学2年から高校2年までの4年間はまさに「映画と音楽(A&V)」のMX漬けだった。

不朽の映画音楽もRockの名曲も、名画の数々も相次いでこの期間に生まれている。グレンミラー物語やベニーグッドマン物語などの音楽映画、それから続くモダンジャズの数々も、名曲と共に今に甦ってくる。そんな恵まれた時期に僕の青春期があった。シティボーイを自認していた僕らはその中にどっぷり浸かっていたといえる。

長田中学校時代、映画鑑賞は確か、禁止だったように憶えているけど。洋画館は今のタカフラ前に一軒、少し先の今のデイズニーグッズを売っている辺りに日東劇場(イワサキ)がピラモールの先南国タクシー前にセントラル劇場、もう一軒、文旦堂の前といってもその文旦堂が今は無いけど、まあ、分かる人だけでいいとして、たしか国際劇場という名前だったと思う。各前の割には小さな劇場で入場料も安かったと思う。日東劇場とセントラルが封切館だった。そこで、思いつくままに、少しの年代のずれは勘弁して貰うとして記憶の海へ潜れる今のうちに書き残しておきたくなった。昭和27年(1952)から28年(1953)



僕の心に残るナンバーワンは先にも書いた通り、.....「シェーン」である。

これよりの2年ほど前封切ら、ポプ・ホープの「腰抜け二挺拳銃」そして、その挿入音楽でアカデミー音楽賞をとった(ボタンとリボン)以来の僕の好みのポピュラーミュージックである。装束のガンマンとの決闘を終えアラン・ラッドが開拓者一家に別れを告げ、馬に跨り去っていく、そのうしろから引き止める少年の声が「シエーン!カムバック!...」そしてしずかに、ゆっくると遠くから聞こえてくる名曲(遙かなる山の呼び声)

雪村いづみの公演が中央公民館で翌年にあった。僕は彼女も好きだったが彼女の唄つこの歌を聴きたくて見に行った。僕の見た初めての生公演だった。この年に見に行った映画を列記すると、●真昼の決闘 ゲーリークーパー 主題歌:

ハイヌーン ●禁じられた遊び 主題歌:アン-tonカラスのチャター演奏 ●聖衣 ●恐怖の報酬 ●コルト45 ランドルフ・スコット

天文館に「テレビ喫茶」が誕生したのもこの頃だった。やがて鹿児島では初のジュークボックスがここに設置され、EPレコードを10円入れると1曲聴け、結構通った。此処も学校では禁止区域だったと思う。

EPレコードが出たついでにレコードについて寄り道してみよう。EP盤はレコードの回転数が1分間に45回転する。

今のCD盤ぐらいの大きさで、それまでの78回転のSP盤に比べると重さも大きさも随分違ったし、挿入曲数も4曲と倍入っていた。値段は1枚300円だったと思う。プレーヤーも切の替えつきに買い換ええないといけなかったので家庭ではそう簡単には持てなかった。また後にLP盤なる超優れものの登場が近づいており、今でいうオーディオ業界の第一期変革期とも云えた。何しろ、LP盤は片面での曲・25分ぐらいそのまま聴ける垂涎ものだった。当然、僕等が買えるしろものではなかった。もっともLPの登場はこのあと2年先になるのだが。僕等の高校時代はこのLPを聴かせてくれる純喫茶という名のレコード喫茶が沢山あった。またその話は後にしよう。

その頃、ラジオでS盤アワーというのがあった。その後のレ盤アワーと記憶がごちゃ混ぜになっているが、テーマ曲がマンボNo.5かエル・マンボの方がレ盤アワーだったと思う。すると、こちらはこれまた2年程時代がさがる昭和30年頃になる。鹿児島島の民放では番組が無く東京の文化放送か日本放送のバンドをキャッチして聴いていた。その日の天気によってラジオのチューニングが合わず音楽を聴く環境はとても悪かった。まあ、いつれにしてもよ



く聴いた。そして、これらの番組で僕はいつも新曲をキャッチした。トイドルテイ
も just・walking・in・the・ray も singing・the・blues も。気に入った曲が十字
屋に入っているのは何日も後だったところを見ると放送局は輸入盤をかけていたの
だろうか。

早速、音楽喫茶に行つては、そのマスターも知らない新曲を店員の娘に「?????
って曲未だ入ってませんか?」通ぶつて聞くものだった。こちらはシティボーイぶつ
ていたけど、「きびかな若造。」と思われていたのかも知れない。そしてあるとき今
までとは全く違つ、強い衝撃をうけた曲が(ロック・アラウンド・ザ・クロック)
と(シエイク・ラッツ・アンド・ロール・ワルツ)だった。テレビ喫茶から話がそ
れてしまったけど、翌、昭和29年(1954)中学3年

- グレンミラー物語 シームススチュアート インザムード
- 道 シュリエッタマシーナ シェルソミーナ
- ローマの休日 オードリイヘプバーン
- ベラクルス クーパーとブランカスターの決闘シーンやがて、次の年昭和30年(1955)中3〜高校1年、そして翌年へは今振り返れば映画&ミュージックシーンとしてはとんでもない?格好よくいえばエポックメイキング(画期的な)転換期といえる。

- ベニーグッドマン物語 スイングジャズ到来
- マンボ・ブーム ペレプラ・マンボとダンスの大流行
- エデンの東 ジェイク・ティーン
- 素直な悪女ブリジッド・バルドー フランス映画界・セクシーガール
- 王様と私 ユル・プリンナー スキンヘッド
- 友情ある説得 アンソニーパーキンス (月影のなきむし)
- 十戒 スペクタクル映画の決定版
- 歌謡曲ブーム 「おんな船頭唄」三橋美智也デビュー 『別れの一本杉』春日八郎

以上、30年を境にその前後年の音楽&映画シーンを思い出しつみました。

映画のスクリーンがシネマスコープという名の、今までの倍ぐらい横長大画面になり、最新作は宣伝ポスターに必ず画面イラストでシネマスコープのマークが付いていた。勿論、「エデンの東」もシネマスコープ超大作とうたっていた。モノクロームの小さな黄金分割画面、そして、決まりきった伝統的手法の映画作りが終焉を迎え、新しい手法がハード面、ソフト面の両面で同時に進出した。当然



のことながら監督やスターたちの世代交代は世界的な規模で行われようとしていた。日本における日活映画・中平 康監督・スター石原裕次郎の登場もフランス・バルドー・のデビューも、シームス・ティーンの登場も決して意外性の出現ではなく出るべくして出てきた必然性の賜物であったといえよう。僕たちの周囲を眺めてみても同じことが言えた。木造の建物がモルタルや鉄筋の建て替えられていった。長田中学校はまだ木造だったけど、新しい玉龍高校はモルタル建物だった。赤い屋根瓦が美しかった。・・・・・・街からヒラキの屋根は段々消えていきつつあった。29年に襲ったルース台風のあと、街のあちこちで見たヒラキの散在とポッカリアいた

あちこちの家の屋根痕は一つの時代の区切りとして貴重な僕の記憶の一つとなっている。この時期、昭和30年〜数年、僕の中学三年から高校三年の間とは、物質面の生活水準が年々目を見張るように向上しつつある時期だった。1956年の経済白書に「もはや戦後ではない」と記された年だった。

難しい話から近辺の世界に話をもどすと、シティボーイの僕らは今考えてみると実に不可思議なファン感覚を持っていたことか。ティーンが好き、パーキンスが好き、バルドーが好き、プレスリーが好き、裕次郎が大好き、

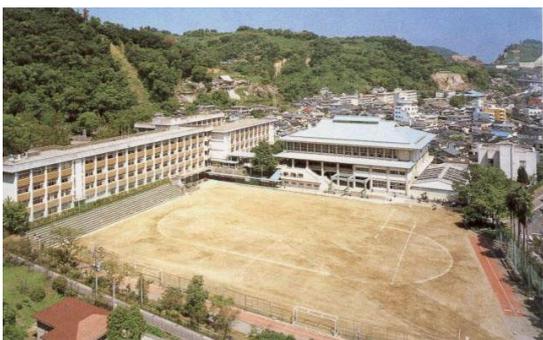
中村錦之助ファンで、三橋美智也の玄海船歌を唄いながら、小坂一也のハートブ

レークホテルやプレスリーのラブミーテンダーを口ずさむ。もう何でもかんでも来るものは拒まずのノンポリ学生だった。

それから、30年くらい、つまりかなり近い過去まではこの頃の影響を自分の体内に宿していたといえる。その方面のプロの道には進まなかったけれど、楽器にも、演奏にも、下手と分かっていながらシンガーもときも体験した。

また、大学時代はモダンジャズにはまり、一方ではクラシックに傾倒して何十枚のLPを買ったことが。また、知人に全集を借りてオーブンテープ20巻に1ヶ月がかりで録音させてもらったけど、今になっても聴き返していない。それより何十年も使わないままでいる僕のデッキが正常に回ってくれるか？分らない。オーディオ機器にもはまった、JBLスピーカーからアルテックテイク、ボースのスピーカー、コントロールアンプはマッキントッシュ、パワーはマークレビンソンとマランツ510そしてフォノモーターはマイクロのMD1000

、トーンアームはフィデリティリサーチ？カートリッジはシユアIII、デンオンDL103、MCがJVCの、MMがJVCのとか、デッキはアカイの2トフサンパチにカセットはナカミチと、もうバラバラ状態。、ひと時はプレーヤーや曲のよさはそっちのけで、録音状況の優劣差でレコード漁りをした頃があった。買ったレコードの説明書きの通りのサウンドが僕の愛機から出てくねるか？どうかを必死でチェックしたものだ。？？？今でも持っているLP盤ディスク200枚・・・そして、めったに聴かなくなりましたけど、今でもJBL4333はいい音を出してくねる。いろいろ後になって現れてきた僕の趣味の数々は、そして、それらの基礎は、この昭和30年頃のAVV(オーディオ&ヴィジュアル)の体験が色濃く反映しているに違いない、と強く僕は確信している。



1955. 4. ~ 1958. 3

昭和30年4月~33年3月 玉龍高等学校時代

Kクンの高校時代は4月1日の入学式からではなく、3月の補習授業からスタートしてしまっただ。

まだ一度も高校の授業も始まっていないのに補習という言葉からしておかしいのだが、「こりゃあ、とんでもないことになったゾ」というのが、Kの繰らぬ気持ちだった。「これではまるで、大学の予備校じゃあないか？」Kはそう思った。



奇妙なイントネーションの英語を使う安楽と言っ英語教師の補習だった。タイプ印刷された4、5枚の紙にビッシリ小さな文字で英語が書かれていた。

授業は、『読む』『読まされる』『質問』『答える』『答えられな』『叱られる。』これの、繰り返し毎日続く。帰ってから予習をしないと『答えられな』『そして又鬼の安楽に叱られる。おかげであの奇妙な発音/ミヤン(man)をが乗り移ってしまい、紳士を今でもシエントルミヤンと発音してしまっ。

これにはKも憂鬱になってしまった。すっかり安楽嫌いになってしまった。

高校入試に英語が加わった最初の学年だったKクンは、この時点で、高校の授業に夢やら、期待観など失せてしまったようだ。

・・・ 安楽の担任だけはコメンだ。

と想像していただけに、担任が湯原という相撲部の顧問のような体格をした数学の先生だったのでホッとした。「いーちゃん」と言っニックネームを先輩よりつけてもらっていたようで語源はイーストキンから由来していると聞かされた。

代々付いてる綽名を持った名物先生が何処の学校にもいるものだが、玉龍高校はまだ新しい学校のせいか、「へらへら」と呼ばれる軟体生物そっくりな動きをする先生と「エビちゃんのアメ買い問題」で有名な化学の先生の他には記憶がない。

Kにとって、この頃はまだ大学という存在は、ずーっと先の、将来のことと
思っていた。

・・・一番いい有名大学は日本大学だ。と本気で思っていたくらいだから、
ただ慶応だけは、自分の名前に慶がつくのと、その年、彗星のごとく登場した人気俳
優・石原裕次郎の出身校ということで憧れの存在ではあった。でも志望校といえる
ほどの意識はなかった。中学時代の親友たちがそれぞれ他の高校に行ってしまう小
学校の頃の朋友・大平くんが付属中から玉龍に来た。

高校は校区制だったので、範囲は広がったとはいえ、コンパスの輪が大きくなっ
たにすぎなかった。

とはいえ、自分自身のイメージを新たに、変身するいい機会ともいえだ。

実は、Kは高校受験の前に本気で兵隊になってもいいかなと思ったことがあった。

昭和三十年（長田中3年）一月九日に「少年自衛隊」の採用試験が行われた。

陸上、海上、航空の三自衛隊に310名の少年を「兵隊」として採用するもので、
Kくんは親友の内クンと船に乗って鹿屋の航空自衛隊に試験を受けに行った。鹿屋
は日本一の競争率だったとかで、おそろく50倍から100倍の競争率だったらし
い。

月に5400円給料をもらえ、四年後には下士
官（三曹）に昇進するという条件にひかれたのか
もしれない。受かったら本当に行ってもいいかな
と思っていた。

でも 幸か不幸か？見事落ちてしまった。

Kにとって、生まれて初めて大勢の他人の前で
素っ裸になり、馬の姿勢をさせられ身体検査を体
験したことが唯一の思い出になった。

一緒に受けた内くん、古市くんも落ちた。

高校三年間のKクンの交友関係を振り返ってみると、長田中時代の三年間と同じよ
うに、ガリ勉タイプはお目にかからない。イメージ変えたつもりだったのかもしれ
ないが、結局は一緒だったのだろう。今、振り返って、Kくんが一番穏やかな友



人と言えば海江田 進くんのような気がする。

穏やかという表現が意味するタイプを譬えるすべをKは知らない。それほど、彼、
進くんはKにとっては特異な友人と言えた。家族の一員のように振舞っていた時
期もあった。

何処でどう繋がったのか、まあ、Kが連れて来たのが最初には違いないけど、K
の中学時代の親友有村文之くんも海江田家の二階の遊び仲間になっていた。

高校3年生のころだったのだろうか？

一晩中、フトンの上で花札をして遊んでいた。メモ紙に勝負の結果を記録した。
全く賭けはしなかった。賭けなしで彼たちは一晩中遊んでいたのだろうか？勝負
だけを楽しんでいたとすれば余程仲が良かったのだと思う。

夜中にカーバイトを持って、磯に夕コ捕りに出かけることもあった。その頃流行
っていた小林旭の唄った「旭のズンドコ節」を高音で唄いながら、Kたちは磯街道
を海へと向かった。

朝になると4、5羽飼っている海江田家の白色レグホンがコケッココとやかま
しい声をあげる。朝コハンにかける卵が1、2個生まれているに違いない。

一写真中央・有村文之君、右端が海江田勝くん。

海江田家にはKたち居候の他に、れっきとした下宿人（男女数人の学生たち）が
いた。彼たちがおかずにする前に卵は居候に取られてしまうことが多かった。

実を言うと、この時期のことはKは実はよ
く覚えていない。夜と昼の二重の記憶がダ
ブっているように思える。陰の日常と陽の
日常といえは正しいのか？

この頃、文之くんは天文館でバーテンダ
ーをしていたような気がする。

とすれば彼は高校を中退したのだろうか？

一度、進くんも含った時にKはこの時期のモヤモヤを晴らすように思っている。

高一の時、池上クンという友人がいて、福岡に住んでおられた彼の叔父さんの所へ
遊びに連れて行ってもらったことがある。

生まれて初めて屋内スケート場でアイススケートを楽しんだ。その時転んで打った



尾てい骨の打撲は、それから10年位冬になると痛みがあった。

中華飯店にコース料理をこ馳走して貰ったのも生まれて初めての経験だった。その時座ったテーブルの位置も、出てくる料理のいくつかも記憶のフィルムにしっかり残っている。

15歳から17歳ぐらい迄はいろいろと初体験が多い。大人になってから若者や子供たちに、してあげるとは、大人にとっては それ程のことでもなくても、少年や若者にとっては、いつまでも忘れがたい、大切な思い出になることが多いのだというのを今、Kは感じている。

さて、シティボーイを自認するKクンの高校一年の頃の思い出は映画よりむしろ、音楽の方だったかもしれない。

衝撃デビューを果たした裕次郎のことは「俺は待ってるぜ」のあのエコーの効いた低音と、ダスターコートとボートネックのボロシャツに代表されるファッションの他には矢次郎に公開される裕次郎映画には余り興味を持たなかった。

それより、「ワゴンマスター」や「星を求めて」「ブルームーン」「ハートブレイクホテル」などのエルヴィスの物真似だけど、結構、存在感のあった小坂一也の方がKクンの血を騒がせた。

大平君の友人で付属から来た浜崎クンはエルヴィスの最新作「ドンビークルエル」日本名「冷たくしないで」を唄うのがとても上手かった。フィリングというか物真似というか、「上手いー」なあ、と思った。ビルヘリーの「ロックアラウンドザクロック」やプラターズのあの超低音の「16トン」も結構上手く真似て、仲間の人気者だった。

一年の時？、バスで何処かにキャンプ？に行く時、Kはバス中、マイクで初めて小坂一也の歌う「トラバリングマン」エルヴィスのブルーラーベル時代のカントリー曲を物真似して唄ったことがある。裏声を二回ほど途中で出すのだが上手いかなかった。だけど、引率の先生があとで「上手だな」とほめてくれたのでKは嬉しかった。



45年の長い年月が経た今、Kは彼と高校の同期の集いの世話役をしている。

年に数回、彼の唄を聴くことが出来て嬉しい。でも、あの頃の唄はなかなか唄ってくれないのが残念である。

＜Kクンの初恋は高2の時だったのかナァ＞

………最初の出会いを、Kはよく覚えている。ただ、年月についての記憶はあいまいである。

その夏は、陽が沈みかかる頃から磯浜に泳ぎに行くのが流行っていた。

若者が「太陽族」と呼ばれ騒がれていた頃である。

Kたちも太陽族取りで、週末になると、高校の仲間たちと磯に出かけた。

若い女の子たちが週末に来ることが多かった。

だからなのかどうかは覚えていないけど、どうせ行くなら若い女の子の多い日のほうが楽しかったのだろう。

その日も暑い真夏の太陽が陰りを見せる頃に磯に着いた。

4、5人の仲間と飛び込み台から飛び込んだり、少し沖の方に大きな沈没船があってその辺りを潜って遊んだりした。

浜砂がまだ暖かさを残しているうちにKたちは砂浜に上がって仰向けに寝た。

その日はいつになく若い女性の声が多かった。

大きな輪になった女性ばかりのサークルが、サンドバレーに興じていた。

当時、まだヒキニことよばれるセパレーツ型の水着は殆ど見かけなかったけど、カラフルな それでいて、結構、露出度の多い型の水着も出回っていてチラチラ見るのも勇氣がいるものだった。

寝転んで眺めていたKクンの目に一人の娘が飛び込んできた。

釘づけという言葉はこういふときに使うのだろうか、その典型的な光景といえた。Kは彼女を見つめていた。



時々はボール目を移したけど、それは、他人に気付かれないためのカモフラージュにすぎなかった。

いつのまにかKくん等もその輪の一員になっていた。そして、その輪の中にやがてKくんの恋人となるマコちゃんはいた。

Kくんの記憶が確かだとしたら、バレーが終わったあと、一緒に帰るグループ数名の中に二人はいた。

「……………何とか」彼女の居所を知りたい「このまま一度きりで終わりたい」

それは、Kにとって、初めてのあせりに似た思いだった。

開通までもないとも明るい鳥越トンネルを抜けると、彼女の家が近くにあることを、Kの連れが彼女と話しているのを聞いていたので、Kは少しあせっていた。

チャンスがきた。彼女と話していた友人が別の友人と話出した。

トンネルのほどでKくんは彼女に並んだ。高鳴る胸のドキドキ音がKの耳に聞こえてくるようだった。

「高校はどこなの？」最初に発したKの声はうわずっていた。

「私、高校には行ってないのよ。」彼女の右の頬に可愛いエクボができた。

「エッ！働いてるんだ、君は？」

「ウウン、洋裁学校に行ってるの。」

「僕は山形屋でバイトしてるのよ。」

「山形屋の何処で？」

「地階の喫茶店よ。」

「遊びに行っていない？」

「いいわよ、白熊、食べに来たら、奢ってあげるわ。」

「本当？ ホントに行っているの。じゃあ、明日行くのかな？」

「明日は駄目。学校なの。」

「どこの洋裁学校に行っているの？」

「知っているかな？グリーンというって、高見馬場にあるのよ。」

「聞いたことあるよ。……あきつてはっだめっ。」

「あきつては風がらならいっわよ。」

「本当」奢ってへんわぬのっ。「余裕の出で来たKはこの質問を」しまった。「と悔いた。

Kは本当はそんなことはどうでもよかった。たとえば、奢ってくれなくても逢いに行きたかったし、顔を見に行くだけでもいいと思っていたのに。

マコちゃんはKより1つ年上だったので、この時、Kくんは18、マコは19才の夏。

……………それは夕暮れ時の出来事だった。

Kは今でもはっきり憶えている。ノースリーブで三色の薄茶系の横縞が美しい。

彼女の着ていたワンピースは当時流行っていたサックドレスと言う服だった。

「おかしいでしょう？自分で作ったのよ。はずかしいワ」

Kは今でも、この鳥越トンネルを車で通り過ぎる時、ほんの一瞬だけ、この時のシーンが脳裏をよぎる。

あの日から今日までKくんは鳥越トンネルを歩いて渡ったことはない。……………山形屋の地階喫茶部は今のベルク通りの地下街への入り口付近から降りたすぐ、角にあった。

最初に座った時に来たウエイトレスのお姉さんに……………「小林さん、いらっしやいますか？」と訊ねたら、

……………「チョット待っててね。」と、なぜか、微笑んだように見えた。

あとで、マコちゃんの同僚で、福ちゃんという愛称のウエイトレスだと分かったのだけどその時は緊張していたので「この人、誰か人違いしてるのでは？」とマコのニコニコした顔に出逢うまではとても心配だった。中はとても混んでいて、確かに白熊にはありつけたけど、マコと交わした会話はとても短いものだった。それから何回か地下の喫茶店に出かけた記憶はあるが、どんな会話を交わしたのか、

最初の出会いの記憶に比べ驚くほどそれは希薄である。

それから、Kの上町の家に遊びに来たり、時にはマコの家がある稲荷町の近くまで二人で散歩したり、マコの妹のっちゃん(妹さんの方が背が高かった)のことや、友達のおちゃん(彼女は今でも顔を覚えてる)と二人で合ったことなど。

・・・いろいろと共有する時間があつたと思うけれど、この間の1年へらの記憶がどうしてもKは思い出せないでいる。

お互い、好き合っていたことも、Kの家族を含め二人の関係は周囲、といつても友人たちからは公認されていたことも確かだった。ただ、今思うとどうしても不思議なのは、あれだけ付き合っていて、マコの親や家庭が記憶の中に存在しないことである。

そればかりか、不思議なことに、二人同志の会話の記憶も残っていないことである。記憶がないということは、それだけ会話の内容がとりとめのない雑談でいかに過ぎなかつたと言つことが。

未だ自己とか、人生とか、存在とか、将来の展望とかを語るにはあまりにも幼すぎたのか、あるいは、そんな会話は男女の間では暗い、ネガティブな話題だと思っていたのかも知れなかつた。

結局はお互いに、恋人同士に限りなく近いガールフレンドとボーイフレンドの関係。

・・・その頃は、そんな感じの付き合いだのシーンもKの脳裏にしっかりと残っている。少しはかむような微笑を浮かべ彼は手を振った。あの時のえくぼをKはフト思い出した。

一年ぶりに会うマコちゃんは薄いピンクの口紅をつけていた。唇のうすい彼女だがKの記憶にあるマコちゃんはほとんど、おしろいなど付けていなかったで久しぶりの彼女がお姉さんに見えた。ベンチに座って、

二人はいろいろ話をした。

「大学、楽しい。」

「うーん、大学っていうより僕は鹿児島県の先輩たちと遊んでいる方が多いか



つたのかも知れない。

大学1年のある日、突然、マコから便りがあつた。

それは、マコから来た初めてで最後の手紙だった。1959年(昭和34年)の・・・6月6日(金曜日)に東京に出て来ます。

横須賀の伯母のところに着る予定です。東京へは道が分からないのでもし暇があつたら、横須賀まで来ませんか？

7日は伯母に送ってもらい日比谷の芸術座というところでコンテストがあるんです。終わったらすぐ帰ることになっているから、6日しか逢えないです。

付き合つて初めての見るマコの文字だった。官用はがきに用件だけ書いてあつた。貧乏学生をしていたKは金がなく、翌朝、キセルで横須賀まで逢いに行った。高田寺の間借り部屋から中央線で東京駅まで、それから京浜東北に乗り換え横須賀に向かつた。

横浜を過ぎるあたりからガランとなつた電車の中の自分の姿を今もよく覚えてる・・・。「車掌が来たらどうしよう。」

そんなことをKは考えていた。一応、その時は払えるだけのお金は持っていたのだろう。久しぶりに会うマコちゃんのことより車掌への返答を考えていた。悲しいことにKはそのことははっきり覚えてる。

・・・マコは横須賀駅のホームで待っていた。それらね。「

「じゃ、鹿児島にいるのと同じじゃないの？」
「それでもないよ、環境っていうか、状況が違うから。」
「ねえ、もしかして明日さ、グランプリでもとつたら、女優になるの？」
「まさか？近所の写真屋のおじさんが勝手に応募したの。」

そういえば、マコに買った何枚かの写真はプロマイドまがいのとても綺麗なのがあつた。写真屋さんが撮ってくれていたのだと分かつた。もっともマコに買ったそんな何枚かの写真は友人たちにとられてしまいKの手元には今、一枚も残っていない。

「明日、見に行くよ、マコの出るコンテスト。」

「恥ずかしいな、だって、水着審査なのよ。」

「どつなの自信のほうは。」

「ゼンゼン。セリフもあるんですけど。」

「だって、福岡の九州予選を受かってきたんでしょ。」

Kはこの時期、昼は池袋にある大学の新しく出来た学友たちと学園生活の真似事をしたり、午後からは新宿にたむろする鹿児島出身の先輩や兄の仲間たち、とロカビリーやうたこえ喫茶を遊びまわり、歌舞伎町のコマ劇場へ通じる大通りの右手にあった糸居五郎のディスクジョッキーで有名な、ニュープリンスがお気に入りのスポットだった。

コマの近くにある大きなアイススケート場でナンパの真似事を体験したのもこの時期だったし、顔見知りの先輩たちの中には、バーのキャッチのアルバイトをしている人も何人かいたように思う。決して主役ではなかったけれど、Kにとってはこの新しい環境はとても華やかで、魅力的なものだった。

そんな時期に再会したマコとの心のギャップは大きかったのかもしれない。余り長い時間ベンチに座るでもなく、Kは東京行ききの電車に乗った。

.....また明日逢えるんだし。

手を振ってるマコから目が離れるのも早かった。むしろ、Kにとっては、帰りの車掌の検札のほうが心配だった。「その時は寝過ごしたことにしよう。」

.....二代目お姐ちゃんトリオコンテスト会場。

大きな看板が芸術座の玄関に下がっていた。

中に入ると右端に置かれたテーブルに五人の人物が座っていた。

よく映画で観ている顔があった。

左から重山規子、団玲子、中島そのみ、夏木陽介、瀬木俊一だとすぐ分かった。

.....九州代表*****さん」と

マコの名前を呼ばれた時は、さすがにKの心臓はわが事のように高鳴ったのを憶えている。

マコが審査員の質問に、なんて答えたのか、よくおぼえていない。朝はやく劇場

横で話を交わした女の子は最後の出場者だった。華やかなステージの上ではマコちゃんもバスガールをしていると言った女の子もKにはいまひとつ地味に感じた。

Kが予感した通り、最後のグランプリに、二人の名前は呼ばれなかった。

あとの記憶で憶えていることは、終わって出て来た彼女がKに告げた次のことは、

「夏木陽介さんに質問されたときネ、Kさんと話してるんじゃないか、と間違うくらいよく似てて、びっくりしたわ。」

.....あまり残念そうな様子でもなかったのでホッとした。

このあと、二人の間でどんな会話をしたのか、むしろそのあと、二人でどこか銀座でも歩いたなどという記憶はない。

あの時、横須賀の伯母さんが付いて来ていて、Kのことは内緒だったのかもしれない。では、隠れるようにKと逢ったのだろうか.....「なぜ？」

当時の二人の置かれた状況を今、思いおこすと「何故?」「なぜ」の疑問ばかりが浮かんでくる。

.....二人の心の推移を計ることは今となっては出来ないけれど、それはあまりも幽がゆい。と.....いまはそう思えてならない。

.....1999年6月8日の会場前の会話を最後にマコとの音信は途絶えた。

次に会ったのは15年の歳月が経ったころだった。

美容師をしていたKの前に現れたあの女性はマコだったのだろうか?

あの頃のマコと同じように何か寂しそうで、そわそわした雰囲気は変わらなかった。鏡の前に座ったその人とKは何を語ったのだろうか。

一瞬の出来事のように、それは、あたかも、おぼろげな夢の中の出来事のように、忘却の彼方に消えてしまっている。

彼女は昔からそうだった。会話の中に主張がまるでなかった。いつも「そうなの。」とか

「そうよね。」とか、肯定の返事しか返してこない。だから余り記憶に残っていない。

彼女との会話で何故か、しっかし残っている会話がある。

ーバンドの出現により日本のミュージックシーンは一気にスパークして一種の社会現象化した。

ウエスタンカーニバルの第一回目の開催をKは東京で迎えた。

初めての東京「有楽町であいまいしょう」が流行っていた。

1958年3月、Kくんは高校の卒業式に出た記憶はない。

Kは受験を名目に、2月早々に独りで上京していた。

東京駅でKを迎えてくれたのは岩元 学先輩だった。とてもやさしく、お洒落で格好よく、Kの一番話しやすい、頼れる先輩だった。

38時間前に鹿児島駅を出た寝台急行霧島は品川駅を通り過ぎた。

・・・数分後に、東京駅に待っているマー坊の笑顔が浮かんだ。

有楽町駅を急行・霧島が通過したとき

・・・「僕は東京に来たんだ。」

とKは思った。東京で知っている地名の一つだった。少し前、低音の魅力で売出した元ジャズシンガーのフランク永井が唄って大ヒットした

・・・「有楽町で逢いましょう」が重なった。

スはクリーム色の、亀甲屋で買った、お気に入りのダスターコートを着て東京駅のホームに降りた。

・・・それから、中央線に乗り換え新宿に向かった。

「神田」「お茶の水」「後楽園」・・・これらの駅を通り過ぎる度に、活字や映画で理解していた東京がいま現実にあるのだ。と奇妙な気持ちだった。

人は人それぞれの感性があるので、何も考えることなく今(という時間トキ)を過ぎる人もあれば、Kみたいにトキに想いを入れ込む者もいる。

立ったまま通り過ぎる駅をKはその時、どんな感慨で眺めていたのだろうか。

その日はそのまま新宿・歌舞伎町に連れて行かれた。兄の下宿先が埼玉県の成増だったので



・・・「K坊、今日はもう遅いから新宿に泊まろう。」

「今からスケートすべりに行って、飯でも食うが・・・」

マー坊はKの大きな旅行かばんを自分で持って 「迷子になんよ!」というと夕方前の歌舞伎町をコマの方はぐんぐん歩いていった。

その晩どこに泊まったかは覚えてないけど、かなりショックな初めての東京初日だったことだけはよく覚えている。958年の春に第一回のウエスタンカーニバルは日劇で開かれた。

Kは銀座のテネシーには行かなかったけど新宿のACBは結構よく行った。

小坂一也はスチールに原田 実、ギターに寺本圭一、かまやつひろしも参加していた。あと、池袋に「ドラム」

があった。これらの喫茶店のことを何故か「ジャズ喫茶」とよんでいた。

第一回目のウエスタン・カーニバルの主役はロカビリー三人男とよばれた

平尾昌章(昭和16年生まれ)とオールスターズワゴン

58年1「リトルダーリン」でデビュー翌2月、第一回のウエスタンカーニバル出演 7月にオリジナル「星は何でも知っている」が大ヒット。

山下敬二郎(昭和14年生)とジェットコースターズ 柳家金語楼の息子。

ヒット曲「バルコニーに座って」・ ミッキーカーチス(昭和13年)とクレージーウエスト 「月影のなぎさ」でデビュー



三人ともニールセダカの「恋の片道切符」ポールアンカの「ダイアナ」「君は我が運命」「クレーシーラブ」

を日本語訳で競演して若者にブレイク。

彼らの年齢はKと同じか、一つ下か上だった。

翌年の第二回目は井上ひろし・水原弘・守屋 浩の三人ひろしが人気を博した。

三人の中に「かまやつひろし」を加える人がいるがそうなると四人ひろしになってしまう。



その年（1958）の夏にはKは鹿児島県の口カビリー歌手もどきを演じていた。

あの頃のしばらくは、間違いなく現実ではあったのだが、今、思い出すと、実に、

Kのこれまでの人生の中では、異質な体験の半年といえる。

なんでも経験したい。・・・と考えるKの人生哲学からすれば、うなずけないこともない、と今は思えるのだけだ。

帰鹿した家の二階（つまり、スガ半年前まで受験勉強をしていた部屋）から何やら生のスチールギターの音がアンプを通して聞こえてくるではないか？

階段を上ると一人のやせてクラシックなメガネをかけた男がウエスタンの名曲「サンアントニオ・ローズ」を弾いていた。初めて目の前で見たスチールギターも珍しかったけど、弾いている男の雰囲気あまりに楽器と不似合だったことこのほうがびっくりした。男の風貌は痩せて色白でイメージからすれば作家、芥川龍之介といった感じだった。

鹿児島大学・医学部3年・細川？？さんとの初めての出会いである。

あとで知ったのだが二階の二部屋は父が二人の大学生に部屋を貸したんだそうだ。

そして、もう一部屋をスガ使って、その隣の部屋、一応、洋間ということになって

いる板の間の部屋が、その後、スガの名づけたカントリー&ハワイアンバンド「**サ**

ーウエスト」の練習室となった。

スガの細川さんは、もともとがハワイアン中心のレパートリーが主だったので、ウクレレを長野さん、リードギターを経済大学の福留さん、後、スガボーカルと

ードチェンジを余りしない、つまり、C、Fの程度のコードですむサイドギターを担当してステージが上がっていた。

私たちの最初のステージは西鹿児島駅の近く、今のダイエーのあたりにあった

イイチビル4階建ての2階のレストラン喫茶だった。1日おきの午後5時から7時

〜8時まで、1ヶ月というのが、細川さんの請けてきた条件だった。

ワンステージは大体一時間少して、それを2回こなすことになっていた。

メンバーは5人から6人、それだけ乗るとステージが一杯になってしまう、狭いステージだった。

初日は緊張した。細川さんと二人で見つけてきた茶の縦じまの長袖の綿シャツをユニフォームにした。ステージのオープニング曲を何にしようかと話しあったが細川

さんの一言で「サンアントニオ・ローズ」に決まった。

細川さんはハワイアンのメカニアオカウボにしたかったらしいが、それは皆が

反対したので決まらなかった。ということで、表向きは小坂和也とワゴンエースの

コピーといった感じだった。

初日はさすがに胸がドキドキした。

テーマ曲「サンアン・・・」が流れ出した。あの物静かで、決して慌てる事も、あ

がることも無縁そうな細川さんが、3フレーズ目のキーポジションを半音間違えてしまった。皆、一瞬ハッとしたが、細川さんはちょっと身体を沈めただけで首から上は、いつもと変わらぬ様子で弾き続けた。

レパートリーの大半はそれでもハワイアン曲が占めていた。ワンステージにその頃の曲は3〜5曲くらいだった。その3倍くらいしか持ち歌がなかった。

その知っている曲はあったけれどバンドとリハーサルをしてないので仕方が無かった。ほとんどがプレスリールナンバーかヒットパレードの人気ナンバーばかりだった。唄った記憶のあるタイトルを思い出してみると、

「ビバパル
「ママギター」「思い出の指輪」「リトルダーリン」
「北風」「ユー チーティン ハート」「カウライジャ」
「ユーアーマイサンシャイン」「ハウンドドッグ」「ラ
ブミーテンドー」「オーマイダーリン クレメンタイン」
「星は何でも知っている」「ダイヤモンド」「ユーアーマイ デストニー」「恋の片道
切符」「オーキャロル」……若干のミスもあるかもしれないけど、こんな感じだろうか？

一番、みんなでリハーサルを重ねたのが「リトル・ダーリン」だった。Kの担当はクラバスとメインボーカルだったが、コーラス部分と演奏との噛み合わせがむづかしくステージでこの曲になるといつもドキドキした。聴いているお客さんの受けは意に反してとても好評で意外にも、リクエストはいつもトップだった。後半のステージは大体、前半のリクエストを中心に曲構成をした。

お客さんはだんだん日を重ねることに多くなってきた。若い高校生も聞きにくるようになり、ファンらしき層も登場して、メンバーも張り合いが出てきた。

Kの持ち歌をステージにあげる順序は次のようだった。まず、十字屋で元曲を買ってくる。

EP盤をポータブル電蓄で聴き、少しずつ原語をカタカナに直して覚えていく、決して正式の英語では覚えず唄っている歌手の唄い方



をコピーする。従って、意味は全く分からない場合が多い。スローナンバーはよくわかるけど。

細川さんが次にレコードを聴いてスチールでメロディをコピーする。次に僕の音に合わせてコードを決めていく。細川サウンドに編曲されたプレスリールの新曲「思い出の指輪」がこうして出来あがっていく、と言ったあんばいである。一番苦労して憶えた歌はエディ・コ克蘭の「ママギター」だった。

「ママギター、ママギター、ハイ、ママギター」と、最初はゆっくり唄いだすけどサビになると、とんでもないことになる。

「ママギター、ママギター、ママギター」と、最初はゆっくり唄いだすけどサビになると、とんでもないことになる。

プレーヤーに33回転モード切替が付いていたらなら、嬉しい、つまりゆっくり回して書き留めることも出来たのに、それも無いほろプレーヤーだった。

その苦労の記憶こそが、この時代の現実を証明してくれている。

……そのうち、Kにも個人ファンらしき存在が現れてきた。毎回リクエストの文字と曲名が同じでメンバー（皆、ぼくより年上）にからかわれるようになった。ちよつとラブレターのような文面のリクエストカードも見かけるようになり、ステージで唄いながら、それらしき人のいるテーブルを探すこともあった。

後で聞いたら私立女子高でKたちの「サニーウエスト」が噂になっていたらしい。その頃、鹿児島にはKたちのバンド以外に、それらしき若いバンドがなかった。

ライブバンドといえは森永会館か、あとはエンパイヤ、オペラハウスもしくはダンスホールに少しあった程度で、それもバンドそのものを見てもらうといった感じではなかった。そういった意味では、Kたちのアマチュアバンド「サニーウエスト」は鹿児島の若者バンドの先駆者と言えたのかも知れない。

「サニーウエスト」の次の演奏会場は天文館の森永会館ステージに移った。今のジースリー通りの中ほどにある森永パチンコのあとである。

ここは一回目の西駅ダイイチ会館よりずっと大きかった。しかし、雰囲気から、ロックは合わなかった。客層がおとなしく、それこそ、細川さんのマヒナムードが

びったりで、Kも不本意ながらハワイアンナンバー中心に、ウクレレが主体になっていった。

親友の有村が文化通りのクラブ「グランドキャニオン」でパーテンをしていたの

第二章 東京生活(大学&美容見習い時代)

クール・ストロフティン(改訂版) 大石けいじ

—ぼくの「東京今昔物語」—

2016.8.5歳編集開始。

今日は2014年2月10日(日)八期記念誌の編集をしながら書いている。

高校の同期卒業の仲間(といっても全卒業生)で構成している《玉電八期会》が卒業50周年を記念して記念誌を作ることになった。そしてぼくがその総編集長を任された。ぼくが言い出しっぱたから仕方ない。

「大石、お前(ワイ)も何か書けば?」とやんわりと会の幹事をしている南郷くんに言われ書き始めた。

わたしたちは昭和33(1958)年に鹿児島市立玉電高等学校を卒業した。

高校を卒業するまでの記憶と、八期の仲間たちと楽しく過ごしてきたこの20年の軌跡はしっかりと僕の脳裏に甦ってくるのだけど、俗に生業時代なまわざいと言われる、稼かせぎながら人並みの生活を家族と共に歩いて来た「現役時代」の足跡がなぜかおぼろげなのである。

まわりの風景をみることもなく、ただがむしゃらに生きてきたからだろうか。イヤ、ただ単に振り返ろうと言う気にならないだけかもしれない。それとも、痴呆初期症状に多いと言われる「近い過去は思い出しにくい」のだろうか、実はぼくの生業時代(男性美容師としての)の始まりは大学卒業の4年生とダブっている。大学2年の頃にふした機会を知りと合った白百合女子大学の2歳下の女性がいた。

実家が鹿児島で美容室を経営していて、彼女の母親(後年、ぼくの義母になる美

で、Kは演奏の後は有村のところによく立ち寄った。

千代美容室の有村敏子院長先生)が美容の勉強で上京するたび、その頃、いつも暇だった僕はあちこち彼女のお母さんの訪問先へのお供(道案内)をするうちに気に入られたのか、(もしかしたらもうすでに僕たちが一緒になると思っていたのかよく分からなかったけど顔を合わせるたび)

「これからは男性美容師の時代がくるわよ。大石さんは合っているかも」と熱烈なボールを投げてきた。そのうちにはすこしづつ「散髪屋」VS「パーマ屋」に対するぼくの認識も変わっていった。

決定的にその気になったのは大学3年のはじめころ、水道橋のある会館であった、当時台頭してきた男性美容師の中でもナンバーワンと言われた(らしい)石渡 潔氏のヘア講習会を彼女の母に観に連れて行かれたときである。

そしていろいろあって、結局は市川市に本店のあるキヨシ美容室の弟子になっていたのである。実際はまだ立教の学生だったのでバイトのような形で浅草橋にあったキヨシ美容室の浅草橋支店に見習い修業が始まったのである。

その頃のことはいくつかから語る大学4年の頃とダブるので後で書くことにするが報酬は確か500円(5千円ではない)。大学2年の頃からしていたアルバイト、テレビのエキストラの報酬が1回出演すると千円程度だったことを思うととんでもなく安い報酬だったことを覚えている。

何しろ、その当時、僕の住んでいた高円寺から浅草橋まで中央線と総武線を乗り換えて通勤するだけで1日百円かかったのだから。もっとも面接の際に「給料は要りません」と言ったことを覚えている。それと、こつこつ修業の仕事の報酬は普通



の10分の1くらいが相場だった。おまけに超有名店とまっている。月謝を払っても石渡に勤めたかったのだろう。

さて、話が入り組んできたので整理する意味で何年か時代をさかのぼることにする。

ちょうどいい機会なので花の都・東京を舞台にした昭和30年代のドキュメンタリー物でも書いて見ようと思つた。

昭和33年からはじまる僕の東京時代は、のちにマスコミなどで「昭和の黄金時代」と言われ、日本が高度成長へとひた走るまさにその時代とびったり重なっていた。

大学に入りいちばん最初に入部したのが「シナリオ研究会」通称「シナ研」というテレビ、映画のシナリオを学ぶ部員十五名ほどのこじんまりとした部だった。

1958年（昭和33年）テレビ東京で放映された「わたしは貝になりたい」は大変な評判になり、脚本を書いた橋本忍までが主演のフランキー堺と肩を並べたほどだった。もっとも自分がシナ研だからそう思ったのかも知れない。フランスのヌーベルバーグ（新しい波）が海を渡って日本の映画界にもブームを巻き起こした。

ジャンポールベルモンド主演の「勝手にしやがれ」（写真次）や二枚目俳優フラン・ドロンの演じる「太陽がいっぱい」などが華やかに銀幕を沸かした時代である。当然、日本もその影響を受けた。

大島渚監督の「青春残酷物語」「日本の夜と霧」や吉田喜重監督の「ろくでなし」などが日本のヌーベルバーグ派と呼ばれもてはやされた。僕もシナ研でいろいろなシナリオの書き方の勉強をした。普通の作文とは書き方が違う。舞台やシアターを意識しなければならぬから文章の間に情景、サウンドが加わる。解釈は監督の分野であるが「ト書き」によって演出家の分野まである程度踏み入れなければならぬから大変である。でもそれが楽しいのがシナリオなのである。

「いまあみやがれ」という創作シナリオ（もどき）という方が正しいかも知れない）を書いた。ぼくの書いたシナリオの処女作である。今でも大事に原稿を持っている。

書いている時はまだ芽の出ないいっぱしの脚本家気分だったが、あとで読み返して見たら実につまらない作品だった。懸賞募集に応募でもしたら赤恥ものだった

ろう。

シナ研の行事で大学先輩の野際陽子さん（長島茂雄氏と同期）を訪ね彼女がキャスターをしていた代々木のNHKを案内してもらったことがあった。今でもテレビに出ていた彼女をみるとあの時の光景が目に見えかへくる。――現実に戻るが――

しばらく草案という構想みたいなものを頭の中で練りまわしていたが、やはり創作ものを書くのはやめにした。

何故かと言うと今回の記念誌は読者が八期の仲間ばかりなので創作ものを書くこと誤解を招きかねない。本の趣旨が『想い出』だからだ。とりわけ「三欲モノ」は危険がいっぱいである。

何かのテレビのインタビュで、ある有名作家が「下半身は別人格」と語っていたけど実際はそう簡単にはいかない。数年前（2002年？）のこと、中国長沙市でボランティアとして日本語教師を1年ほどしていたことがある。学校の休みを利用して中国南西部の各地（中国古代史に書かれている史跡を）を歩きその滞在記を自分のネット上で掲載した。その時にも妻との間でひと悶着があった。

本人はパソコンをいじらないので安心していたら娘が覗いていた。ストーリーを面白くしようと考え架空の愛人、小燕（シャオエン）を登場させた

「会話や描写に実感がこもっています。うそや空想でこんなことは書けないでしょう。白状しなさい」と娘のメールを経由して詰め寄せられたことがある。女の感は馬鹿にしてはいけなが行ってみたいとわからないのも事実である。

中国では、旅の同伴の際は部屋を1部屋借りて男女2人で宿泊しても料金は同じである。同伴女性に向かって（免フエー節約しませんか？と言うと）旅行にくだしい学生なら「可以」返事がくる。

信頼されていないといけないが。歳の差50もあるのとお互い変なことあまり



考えない。

逆「「否」と答えられた方が男として見られたことになりその方がうれしいのかな。」

妻からみたら若い姑娘（クーニャン）と同居を想像すると嫉妬心をかりたてられるのかもしれないが。

なにしろ、現地旅行はとても安いから一人も二人も負担にならない。負担になるとしたら同伴に土産や何かをせびられるときであるがこれは同伴が恋人でないこと成り立たないから色気を出さないうつに気を付けていけばよい。

折角ならいかつい男の子よりは若くてかわいい女生徒との同伴が望ましい。あまり詳しく書きたくはないけど、男女の機微は難しいものだ、嘘は誤魔化せない。

まあそういうわけで、「こは気負わずに、さほど話まってもいない大脳皮質の抽斗の中から、面白そうなものをつまぎ合わせながら、フィクションも織り交ぜて」嘘っぽいお上品な回顧録「に仕立ててみようかとパソコンの画面と対峙している。

先日、高校時代に同じクラスにいた瑞代さんと電話での話しのついでにそのような会話になったことがある。

彼女いわく「書いていいのよ、この年齢になって青春ロマンなんて却っておかしいわよ。どうせ書くならきマンポルノよ」とボンと背中を押ししてくれた。

最近脳科学も進歩してきた。以前は新しい記憶は海馬を通して脳内に送られると言われていたけど、実際は扁桃体という海馬の横にある器官からヒトの情感は脳内に送られることが分かってきた。ひとつ気になったのはこの扁桃体も年をとって感情がルーズになってくると、その動きがにぶくなるらしい。記憶をつかさどる海馬に働きかけなくなるのだという。そうすると海馬から脳に送られる記憶がなくなる記憶消失になりかねない。

でもさらによく調べてみると扁桃体を鍛える方法がいくつかあることがわかってきた。

その1は、感情を「吐き出す」ことだそう。つまり怒り・悲しみ・喜び・驚きなどの感情は貯めないうつにすいことが肝心だと言っている。

第2は「鏡に向かって疑似笑い」をすること。笑い顔に扁桃体が騙されてしまい海馬を刺激するんだと言っている。

でもぼくがいちばん気に入ったのは第3の「自然を眺め、季節の移ろいをしっかりと肌で感じること」だ。

つまり、「うつらうつらいいの。のんびり野原に寝そべって、遠くへ流れてゆく白い雲をぼんやりとではなくしっかりと」

れが大事（何も考えず集中して眺めること、これこそが脳に活性を与える最もいい方法なんだそう。高齢になればなるほど毎日、このような扁桃体を鍛える「過ごし方が大切らしい。

そして、大脳皮質に送られ長期保存されている記憶のなかでも特に激しく扁桃体を刺激したものに限り、年を経ても『思い出』として呼び戻すことが出来るのだそうである。

耳の上の内側にある「センサー」ほどのアーモンドの形をした器官である扁桃体を「強く」「しっかりと」刺激させるために高齢者であるわれわれは大いに好奇心を動かさなければならぬのである。

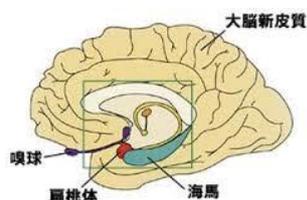
お気に入りの異性「たとえば近所のコンビニのレジ娘とかーに抱かれたい、（イヤ抱きたい）そう願う気持ちや恋が

たきに対する嫉妬の情感（残念ながらとうとうかぼくら世代の男性はとくに忘れてきている）などなど、そのような世間ではスケベ爺いと蔑まれるような（うすうす情感こそが）扁桃体を大いに刺激して、脳を活発に反応してくれる（宝玉）まさにそうなのである。八十過ぎてくると同年で見た目の年の差が愕然とひらく。

目で若い娘を追っている人の方が確実に若い。セックスを進行形で考えている人（俗に色ジジイ）の方がそうでない人に較べると健康的には若いと言える。（医学が実証している）のんびりと寝そべってテレビを見ているようでは扁桃体として簡単には反応しないことを知るべきである。

余談だけど、最近、朝のトイレ時に排尿の具合がどうもおかしい。出す時も、出た後も（アを入れていいのか迷うけど）そこが痛いのである。

周りも早く泌尿科に見てもらった方がよいのではと言っている、その割に診察方法については皆、申し合わせたように口をもぐもぐと、はっきり言わないので「これは何か



あるのでは「と思いつつも」前立腺ガンは手遅れになるとやばい」「と脅され意を決して病院に行った。

診察ベッドで下半身脱がされて横向きに寝かされた。

妙齢の女医さんに突然お尻から手を突っ込まれた。(違つよ、それは器具です)と言つ人もいたがどう考えてもあねは細つでの感じだった。しかし、ことはそれだけでは終わらなかつた。

次には仰向けに裸のまま寝かされ今度は若いギャルのような研修医がそこをやさしく握り細いチューブのようなものを先から入れるのだが、それがなかなか入らな

い。
結局かなりの時間(と思つた)そこをまさぐられてしまった。真風から風俗店じ

やあるまいしと思いきや、やつとチューブがぐんぐん中に入つて行つた。
やさしいギャル看護師の「もう少しガマンしてくださいネー」の甘い言葉に恥ずかしさと痛かゆさが加わつて、不覚にも、僕のもの勝手に反応していく。彼女の柔らかい手に包まれて久しぶりに勘違いしたのだろうか。

「お若いわね」と言われたらどうなつていただろうーそうはさすがに言われなかつたけどーかわりに

「もし、むずむずしておしっこを出したくなつたら思いきり一気に出してくださいね」と彼女は言う。こんな状態でおしっこを(ナマコ)じゃあるまいし(・・)「エイッ、もうどうでもなれー」(そう思つた瞬間だった)とうとう我慢出来ずにその時がきた・・その間の沈黙の時間はとてもとても長く感じた。

若い美人研修医の白衣の胸の合わせの隙間から中村屋のアンマンのようなむちむちした大きな胸が目の前にあらわれた(「時よ！止まれ」とは思わなかつたけど一瞬、ぼくの目は志村の目になってなつてなつていたと思う。さぞかし扁桃体が大喜びしたに違いない。

「アラッ！すごい！全部、出ちゃいましたヨ。お若いのね。こんな方はめずらしいですよ」うううううう。。

どんなリアクションがこの場合妥当なのか、考える間もなく僕は「アリガトウ」と答えてしまった。何でそんな変な応え方をしたのか後悔したけど後の祭りだった。

ーそうですか？ー位が常識回答だったけど、きっと彼女のむき出しのアンマンに焦つたのかも知れない。いや、あのアリガトウはぼくの扁桃体からの代弁だったのかも知れない。

余談にしては少し長い描写になってしまったけど扁桃体への刺激は最高度だった筈である。

後日談だけど、ある友人にその話をしたら「ぼくも同じことをされたけど、ぼくの場合は、小さな三男坊が恐怖でチシツ／＼上がつて逆に恥ずかしかつた。」とす／＼うらやまし気に「小さな声で語ってくれた。

その後何ヶ月か置きに病院には薬を貰いに行くけどこの検査だけは二度と受けたくない。(本当はぼくはシャイなんです) **「」まで添削済みです。**

さてぼくの2014年は今のところ特記するほどの感動や歓喜もなければ、奈落の底に落ち込む程の心身の異常もない。幸いかナと思つ反面、もしかしたら僕の扁桃体は目下お休み中かも知れない？そう思つて心配でもある。

なにしろ本人が思つていなくても後期高齢者の資格は明日に迫っている。
聞くところによると次の運転免許の更新の時は「痴呆検査」(正しくは認知症検査)が新しく加わるのだと言う。

僕(書いているぼく)からみたら3人称的夢の中の人物(は人波で混雑している池袋東口の西武百貨店前で信号が青になるのを待っていた)。

大都会の暮れなすむ雑踏のなかで、目の前の景色を「コマの静止画としてぼーっと眺めていると、日常から解き離されたほっとした感情というより、いまここに独りであるという孤独感のようなものから湧き出る得体のしれない不安にかられる。

10年ほども前に独りで中国大陸を旅してまわったときにはこんな思いにはかられなかつたと思う。未知や未来のなかにひとり立っているのと過去の「コマの中」にたらずんでいる不可解さ。目の前を通り過ぎるタクシーやバスの窓から放たれる見知らぬ人々との一瞬の視線の絡み合いさえぼくの平常心をゆさぶる。

過ぎ去つたら50数年という時の長さに僕はふと眩暈を感じながら交差点を渡る。
僕の脳内記憶は「時空」という名の階段を駆け足で下つていった。そしてそこで5

3年前にタイムスリップしている自分に重なる。

僕の通っていた大学は池袋の西口にあった。

そのころ東口の方には西武百貨店と丸物デパートが肩を組むようにして建っていた。離れて眺めると池袋駅を挟んでその巨大なコンクリートの壁はまるで東西ドイツを遮断していたあのベルリンの壁を連想させた。

一方の西口駅前はどうと、こちらはまだ戦後の区画整理の最中だった。

駅ビルとしてあった東横百貨店以外に、ビルらしきものはまったく建っていないかった。

3階建かせいぜい5階建の雑居ビルが雑然と道路を挟んで建っている程度だった。駅前には「のとまん」と言って「加治木まんじゅう」をひと回り小さくしたようなふかし饅頭で有名な「のと屋」があり、店先は朝からまっしろな湯気がもうもつとたちこめていた。

そしてすぐ横には今はまったく跡形もないが当時はこの道とは別に大学への近道があった。遅刻しそうな時はよくその通りを利用した。そこは幅2mもない通路を挟んで歯並びの悪いカバの歯のようにひしめくようにちっけな店が並んでいた。

歓楽街によくあるスタンド看板も置けないほどの狭い路地なので軒先にプラスチックの看板をつけ原色の赤や青色地に黒や白抜きで「奈落」とか「エデンの園」とか如何にもいわくありげな店名が書いてあった。

一度店に入ったら身ぐるみ脱がされ路地に放り出されると善良な飲み助たちに恐がられた暴力バー通りである。

一昨年(平成24年)の夏、大学時代の親友の相本から書中見舞いのはがきが届いた。

海中写真撮影が趣味の彼のはがきは毎年、南海の珊瑚礁に群れる熱帯魚の写真で埋められたユニークなものだったが今度のはがきには外側の白枠が少し広くとってあり、そこには「来春、50周年クラス会を計画しているからぜひ出てこないか」とボールペンで小さく添え書きがしてあった。

横の方にはもっと小さな字で参加予定者らしき名前も記されていた。

書いてある名前から当時の級友たちの顔が浮かんでほきたけどそれは動きや声の間こえる三次元(立体)の世界ではなかった。僕をクラス会に導いたのは何だったのだろう。

4年間を一緒に学び、語り合った今思えばきらきらしていたあの青春時代を、一緒にかけぬけた仲間たちとの久し振りの対面だったのかそれとも、50年前の垢ぬけのしない、でも変に居心地の良かった池袋西口の街の薫りに惹かれたのかも知れない。

20名ほど集まったクラス仲間との久し振りの対面は僕にとって、瞬時に「あの頃」に戻る程の感動的な出会いではなかった。回憶は語り合つうちに甦るものなのかも知れない。

当然のように最初の会話には戸惑いがあった。近い過去に共通の話題が無いのも理由のひとつだったけど、決してそのことで気まずい思いはなかった。それは50年前に共通の時と空間を共有したというノスタルジックな空気がその場を包みこんでいたせいかも知れない。

構内レストランでの会食も終わると幹事のお泉の立てたプログラムなのだろう、まるで孫世代のような可愛い立教ギャルの案内でキャンパス内の散策をした。

最後は全員で(多分我々世代なら絶対するだろう大学のシンボル)時計台をバックに集合写真を撮った。

日もすっかり傾きやがてキャンパスが大きな木々の影ですっぽりと覆われる頃、この次の(喜寿の日)の再会を誓いながら一何名かとは全く会話をすることもなく150年振りのF組の集いはわずから5時間足らずの再会で終わりを告げた。

それでも半数の10名程が幹事の仕組んだ2次会に行くことになった。考えてみればあの頃も親しくしていたのはこんな数だったと思う。むしろ本当に逢いたい、語りたい友は(高校もそうだけど)つくづくこの世にはいない。



なつかしい二又交番前を渡り小さな路地を入ると、怪しげな看板が置かれている地下への店の看板がありそこにはマダムシルクという文字が書いてあった。

階段を下り、ドアを空けると(昭和の池袋の夜)の香りの漂うクラブが現れた。使い古された黒いソファに座り壁を眺めると、いくつかの絵画作品が目にとまる。中にはエロチックなものも。なぜかわからないけど、この店には言葉では表せない何かがあった。「古い海賊船のなかのくつろぎのキャビンに腰を下ろした」そんな感じだ。



二人くらい名前の思い出せない友人がいたけど、あとはさすがに思い出す顔ばかりだった。交わす会話はごく自然に当時呼び合っていたニックネームに変わっていた。

「もう十年後は約束できないネ。でも、もし十年後元気でしたら、『せめて十年で良いから後戻りして人生をやり直したい』と思うんじゃない。だって還暦に戻りたいと思うだろう?」と幹事のお泉ちゃん(元有名ホテル支配人)がアルコールで目を潤ませながら熱く語り続ける。素敵なバリトンでプロのコーラスグループを目指している、とあのころ噂されていた。

「今、ほくらは10年先の未来から戻って来たんだ、そう思うとこれからの1年1年をもっと大切に過ごせるはずだよ。20年前からはもう帰れないんだからナ」。そして「あの頃」のように激しい議論が交錯する。またたく間に2時間ほどが過ぎた。

「ちょっと腹減らないか」とクロと呼んでいた名古屋の元新聞記者の提案でぼくたちはマダムシルクを後にした。(下写真の左がクロ) しばらく西口駅の方に歩いた。

駅前のメトロポリタンホテルでパスタと珈琲を飲みながらまた延々と昔ばなしに花が咲く。

2次会ですでに酔いの回っていたオミス(と呼んでいた小柄な女性)が「カラオケに行こう」としつこく言い続けるのを無視して3次会も余韻を引きずったままちょっとお開きとなった。

東武デパートを抜けて東口の通路に出た時には僕の他には女性が2人だけになっていた。集まりの終わりはどこも一緒なのだろうか、高校の同窓会も、商店街の仲間との会食も、終わりはだいたいそっけないものだ。

そのうちの一人が「わたし、地下鉄で帰るからKくんは由子が送ってね」と言う。とまるでふたりして申し合わせていたようにサッと消えるように去ってしまった。

「あれアレッ」という間のトランプゲームの最後に残ったジョーカーこそ、実は今日のクラス会で僕がいちばん気になっていた女性だった。

彼女とはクラス会で初めて目が合ったときから、ふたりの視線がぶつかる度になんだか引く掛かりがあった。こんな人、同じクラスにいたっけ?どんなに記憶をたどっても名前もアクションも思い浮かばなかった。失礼な言い方だけど女性のほとんどはそれなりに歳を重ねて顔を見つめているとだんだん昔の顔とだぶってくる。(男)

も似たようなものだけど、けれど目の前の彼女は昔の顔が浮かんでこないのである。でも、ほとんどお喋りしない彼女と、同じような聞き役の僕とは気になりながらもキャンバスを歩くときもお互い話すこともなかった。

それなのに目が合う度になにか戸惑いがあり、ぶつかり合うお互いの視線の真ん中で目に見えない何かはげしく絡む。初恋の相手19歳だったマコと初めて会った磯海水浴場の砂バレーの様子が目に浮かんだ。

東口の西武デパートの出口に出てきたとき突然一信号の変わり目を待っていたように――

「わたしは向いの通りから都バスで帰るから一緒に渡りましょう」
田舎から出てきた僕をエスコートするように、今日はじめて、その彼女が僕に語

しかけた。その声はなにか僕をどこか遠い過去へいざなうようなとてもなつかしい声だった。

そのとき僕は自分が2013年の現在にいることを思いきり足で蹴飛ばしてしまっただ。そしたら意外なことばが勝手にーいや反射的にー僕の口から出てしまっていた。

「エッ、もっ帰っちゃっの、急がなければどこかでお茶でも飲んでいきません？」
同級生に語りかけるには、少し改まったことばに自分でも照れたけれど、さりげない振りをして彼女に話しかけた。それは五十年前とすこしも変わらないーいや顔がちよっと引き撃ったようなスリリングなナンパの瞬間の再現だった。

5月の天気は気まぐれ、とだれか言ったか知らないけれど、ポツポツと降りだした雨を避けるように二人は人波を縫うようにロータリーを渡った。こころもち身体を寄せて来た由子はほくの顔を覗くようにして言った。

「いいわよ、どうせ家に帰っても私は独りだから、なんならこのまますーっと一緒にいてもいいのよ」

茶目つけたっぶりできて何か意味ありげな彼女のミスティアスなことばとしくさほくの扁頭体がすきすきと刺激される。50年の時空が往ったり還ったり。池袋の夜の匂いは懐かしい53年前の青春時代そのものの匂いだった。

「二人でジャズでも聴きに行きたいな、そんな喫茶店って今頃あるのかな（おたく）知らない？」（注：あのころは「知らない」と言ったかも）あの頃僕たちがかっこつけてよく使った二人称の呼称（おたく）が一瞬口から出そうになった。頭の中では『霧が流れてくむせぶよな波止場、思い出させてよくまたあ泣ける』とダスターコートの際を立てたタフガイ裕ちゃん（石原裕次郎）の姿が自分とダブった。

霧のような細い雨から彼女を庇うようにさりげなくほくは右腕を由子の肩にのせる。

一瞬、彼女の肩がびくりと震えた。ーもしかししたら僕の腕が震えていたのかも知れないーそして、彼女から出た次のことばがほくをさらに混乱させた。

「由子は今日のクラス会を半年前から楽しみにしていたのよ。今度のクラス会にKくんが参加するって泉クンに聞いたときからよ。半分はこわかったけどね。私のことと言っつよあの時のこと憶えているかナーと思ってー何度も目で合図したんだ

けど反応無しだったものネ、Kくん。何も思い出してくれないのかと思うと寂しかったワ。『あなただれかだよね？』ってぐらいは言ってくれないかかって・・・わたし待ってたのに。」ー沈黙ーシナリオ風？）

振り向くと由子の顔がすぐ近くにあった。悩ましげな化粧の香りが僕の顔の周りを浮漂よっていた。

その香りは普段Kが接する若い中国人留学生やもっと身近な妻や娘が使っているお化粧の香りとも違っていた、それはちよっぴり危険な都会の香りのようだった。否、恰好付けないでいうとそれはオンナの匂いだった。誰にも言わない自分のこころの中にだけ感じている、好意を抱く女性に接したときに想う心のあせりと真逆なこころの反応があった。

ー日めくりの卓上カレンダーがバタバタと一瞬、風に吹かれたように（聞きなれたビバップの音符になって）ふたりのーあの頃ーに向かって飛び出していった。

またひとつの記憶がはっきりと甦ってきた。それは由子のそれとラインで繋がった。

実は二人は必修だった近松（西鶴だったかも知れない）『演習』の同じゼミ仲間だった。学校の近くにおいしいランチを食べさせる喫茶店があり、授業が終わると風飯食べに仲間が自然と集まった。店の名をヤタローと言った。

大型のJBLのスピーカーからは軽食堂には場違いの音量でジャズが流れていた。そこは音響にうるさいジャズマニアの若者たちの溜まり場でもあった。

ある日、その頃ハードバップの名手でジャズファンに絶大の人気があったソニークラークの新盤「クールストラッティン」のLPを僕が持っていると言ったら「聴きたいワ、その曲大好きなのよ、ねえ、Kクンの部屋に聴きに行ってもいい？」と甘ったるい声で由子にせがまれたことがあった。

その頃は大学の裏のアパートに一人で住んでいた。まだ同じ大学の学友よりは1年先輩の兄や兄の鹿兒島の時代の友達（先輩）たちと弦んでいたころの話である。



この翌年ごろか同時進行で相本や齋藤真ちゃん等と茶店回り（軟派を兼ねて）や相本宅での麻雀泊まりに耽つてゐた。

この話は多分昭和34年の話だと思つ。由子はその時一人で来たのか、他の仲間も一緒だったのかはよく覚えていない。口に出して言ったことはなかったけれど井由子（マトイユウコ）はF組仲間のなかではぼくが一番のお気に入り女性だった。理由は？と言われるとすまぐ答えられないのだけど、声、響き、もちろんチャームिंगな笑顔を筆頭に彼女のすべてが好きだった。

自宅は代々木上原とか言っていたが僕は山の手と下町ぐらゐの棲みわけしか知らなかった。

由子のイメージは「お嬢様」とより日本橋あたりの問屋の「下町の娘さん」の雰囲気だった。和歌山の清水白桃のような発育の良い胸のふくらみをいつも白いタートルのニットで隠すようにしていた―目立たない、それでいてお洒落な―着こなしながら僕のお好みだった。

・・・・・・Kの部屋（アパートの名前はツッドハウス）・・・・・・

ポール・チェンバースの弾くようなベースの低音域が手前に出るように僕はボリュームあげた。アートファーマーのトランペットとソニークラークのピアノとの軽快な掛け合いをつま先でリズムをとりながらふたりは一枚のディスクを繰り返して何回も聴いた。

オートチェンジャー付のプレーヤーは便利だったけど、ときどきアームがディスクから滑り落ちることがあった。

いつもは上手くレコードの端にカートリッジを載せることが出来るのにこの時だけはなぜか指が震えて何度やっても上手くいかなかった。

粉のネスカフェを飲みながら、ふたりはかなり長い時間を過ごした。いったい僕たちはなにの話をしていたのだろうか、会話の内容はもちろん憶えてはいない。それでも嬉しそうに音楽を聴いている由子の腕のうぶ毛がリズムに乗って僕の腕にかすかに触れ合う度に僕の心臓は早打ちした。そこらの街でナンパした女の子ならこ

んな場合もつと簡単に肩を抱き寄せているのに、この時の由子の肩は僕の手からとても遠くにあった。

五十年の時を経て、いまここに、あのときの彼女がいる。目の前にいる由子は「年輪を重ねてきた由子」ではなくあの頃のままの由子なのだ。

僕よりきつといろいろなことを覚えてるに違いない由子とあの頃に戻って話しをして見たい。でも由子はなぜミスリリアスな言葉―今ひとりでだから―とつぶやいたのだろう、少し強くなった兩足と、雑踏のなかで、聞き取れにくかったけれど、ことばの意外さが僕を混乱させた。不覚にもとっさの返事が喉が枯れて出て来ない。なぜ独りなのか？もしかしてずっと独身だったとか。いや、ご主人に先立たれた方が普通だろう。こんな時に何か気の利いたセリフが出て来ないものか。

この意外な独白を同級生のジョークとして軽く受け止めるべきか僕は焦った。だから真面目に答えるにはとても勇気のいることだった。

遡っていた気の遠くなるような五十年前の日めぐりカレンダーを瞬時にいまに戻した僕の葛藤が始まる、ゆっくりとそして激しく。

振り向くと今夜の宿（京王ブレッツインホテル）の看板の灯りは遠く後ろにけぶって見えた。

「もっともつと土砂降りになったらいいのに」そんな思いが頭をかすめた。

霧雨でかすんだ池袋の街をふたりはあてもなく歩いた。通り名もわからないネオン街に入ってしまった時だった、ちいさなスナックの灯りがまた一つの記憶を呼び起こした。僕は由子の肩を強く抱いたまま店の名も分からないままスナックの扉を押しした。

その年は―昭和35年春・池袋の宵―

僕とサア坊は金も無いのに背伸びして、「二又交番の近くのバー」きつつきメトロ「によく足を運んだ。7人も掛けたら満員になるほどのちいさな店だったけれど中はいつも客で混み合っていた。

カウンターにかけると僕は安いトリハイ（50円）。酒に弱いサア坊はジンを少なめのトムコリンスがお気に入りだった。

支払いは岐阜の織物屋の御曹司だったサア坊のおごりで彼に何の代償をしていた

かは憶えていない。4人掛けの狭い(灯りのない)ボックスが一つ、チークヤマンボくらいなら踊れそうなどとも狭い空間があった。

若いバーテンの他に2人のホステスがいた。

名前は朱美と加奈子、若い方のホステス加奈子を目当ての客が多かった。

加奈子は時々甘えるとか京都弁(本人は京都出身と言ってたけど嘘っぽかった)を喋った。まだ有線放送などない時代なのでBGMはディスクプレイヤーからプリメインアンプを通したスピーカーから流れていた。

「きつつきメトロ」はいろいろな曲をお客の希望というよりスタッフの好みで勝手に掛けていた。

MJQの「ジャンゴ」が流れたあとにマヒナの「夜霧のエアーターミナル」が続くと言った感じた。

サア坊のお気に入りはナットKコールの「モナリザ」(歌もなかなかのものだった)僕はM・ジャクソンとJ・コルトレーンの「バグス&トレイン」が好きでよく聴いていた。行くと何曲目かにさりげなく加奈子が掛けてくれた。

サア坊とはいろんな話をした筈だけど何もおぼえていない。話し合っているふたりの光景だけは今でもはっきり浮かんでくる。もっとも今甦って来るシーンが実像である確信はないのだが。

そんなある夜、忘れられない失態劇は起きた。

やーさん(当時は愚連隊と呼んでいた。何故だか

分らないけど、ぐれた奴らと言っ意味?)に追いかけられたのだ。「メトロ」の若いホステス加奈子が原因だった。魔がさしたのかちょっとかいを出してしまった、と言っても風間のテートに誘っただけだったけれど。

―自称二十歳の京都のお嬢さん、加奈子とはそのテートの日、池袋駅の西口で待ち合わせた。―そのころ流行りの黒色の落下傘スカートに乳首が透けて見えるような薄桃色のブラウス。真っ赤な水玉のスカートをヘアバンド代わり頭に巻いていた。背は余り高くないけど細くて形のよい白い脚に真っ赤なハイヒール姿はまるでフィギュア人形を見ているようだった。



駅の構内で彼女が僕を見てにっこり微笑まなかったらあやうく見過ごすところだった。

あまり目立ち過ぎるので一緒にいるのが恥ずかかったけれど僕たちは西武電車に乗って豊島園へ向かった。

ポートやシエッタコースターに乗り、ソフトクリームとポップコーンをほおぼりながらゲームを遊んだ。

池袋の夜の蝶はいつしか風に加奈子お嬢さんに変身していた。僕は子供のようになりきらした加奈子の瞳に惹きこまれていった。

それは何かのゲームの最中に突然だった、急に加奈子が後ろから両腕で抱きついてきて僕の背中にくちびるを付けるとその熱い息をこぼに換えてつぶやいた

「Kくん、きょうはありがとうだね。東京に来て初めて楽しい日だったワ」

加奈子のちいさな熱い声の粒が僕の背中にびっしりとこびりついた。加奈子のくちびるの感触がいつまでも僕の背中であらわれていた。

ふたりは電車の吊皮をつかんだまま並んで立っていた。電車が揺れる度に加奈子の頭が僕の肩にもたれ、僕はそっと加奈子の肩を抱いた。

―その晩に、事件は起きた―良いことと悪いことは交互に起こるのだろうか？

その頃僕は北池袋の個人宅の離れのアパートに住んでいた。女の声が玄関の方から聞こえた。

加奈子の声に聞こえた。続いて男の声、あきらかに恫鳴めいた声だ。にせ京娘のヒモがてっきり自分を脅しに来たと思った。

玄関で大家さんとともに感じているように感じた瞬間には僕の脳は思考を飛び越え身体に瞬間的に反応していた。

深夜の住宅街を闇を抜ける忍者のように裸足で駆け続けた。どこを目指して走るでもなく、曲がり角に来たら右に次の角は左にと無我夢中で僕は駆けた。目的はただ遠くにといい気持ちだけだった。

時々耳を澄ませるけど聞えるのは自分の心臓の鼓動だけだった。アパートに戻るまでの1時間以上、深夜の街を彷徨っていた。

まるで僕は夢遊状態にあったのだろうか、この晩に起きた出来事はもしかしたら

幻想が夢だったのかも知れない。なぜならフロログの激しさに較べこの事件のエピソード（結末）は記憶からすっかり消えてしまっているのだから。

脳は嫌な思いは消してしまっただろうか。脳にファイルされているのは加奈子と豊島園に行ったこと、そしてその晩、必死で逃げ回ったことだけである。

ひとつ気になる記憶の忘れものがある。

それはリズムカルなフリースが逃げるKの足音に合わせて耳に残っていることだ。



その後バー「きつつきメトロ」に行った記憶もない。でもいまでもマヒナの裏声コーラスをバックに松尾和子の唄う「誰よりも君を愛す」が流れてくるとあの日の加奈子の熱い吐息で僕の背中がうずいてくる。

脳は扁桃体を通して五感だけをファイルに仕舞うのかも知れない。

東京ではあちこち引越しを繰り返したので今となっては何時どこに住んでいたかもはっきり思い出せない。東横線の綱島には小学校からの友人の博美としばらく一緒に住んでいた。悪の博美はわけあって鹿児島に帰ってしまったが彼との思い出は昭和20年代に遡るのでここでは書かない。彼こそ僕に男性ならぬ男精の楽しみを伝授してくれた恩人である。

昔、「慶一の履歴書」を綴っていた時「はらしていいか?」と手紙に書いたら「ぶたりだけの秘密にしてお互いあの世に持って行くうよ」と宮崎の消印の封書が届いた。引越しを続ける。

やがて中央線沿線の高円寺に落ち着くまでは大学近辺の東長崎や板橋、北池袋など、お金がない時は学校まで歩いてでも行けるところに住んでいた。

もっとも、山手線は当時10円で乗れたからその10円をけちったのだろうか。僕が最初に住んだのは埼玉の成増で若夫婦の個人宅だった。

東長崎のアパートに移ったときははがきに自分の住所を書くときにS方から・庄に変わってなんとなくいい気分になったものだ。

家賃はいくらだったか、食材がいくらだったか残念ながら思い出せない。親からの送金が幾らぐらいたったのかこないちばん大事なことも脳内に保存されていないのは何故だろう。如何せん生活費を削る為には食費の節約が絶対条件だった。

1956年はインスタントフームが起きた年だった。日清食品のチキンラーメンやネスカフェなどが有名で駅の近くには〇〇ストアと名の付くスーパーが主婦達に人気があったけど僕がよく買いに行くところは商店街の中のお肉屋さんや野菜屋だった。この二つの店はなぜか隣同士にあった。

「ロッケ(5円)、メンチ(8円)じゃがいものサラダ(7円)などが主な惣菜だったけど金欠病になるとマヨネーズ(ちいさなプラ袋に入った)を缺で角を切ったご飯に絞りに出して食べた。

あさりや鯖の缶ズメに海苔の佃煮などが主なおかずだった。2歳年上の兄の作る「きんびらこぼつ」は秀作だった。

お腹を満たす為によくこより糸で結んだソーメンの束を買ってきて、大きな鍋に味噌汁と混ぜて特製の味噌汁ソーメンを作ってごはんにませて食べた。

北池袋のアパートにいる頃は台所が共同で、そこには錆びた裸のガスコンロが3台置いてあり若い〇〇(といっても近くの事務員か店員)が多く住んでいて夕食時になるとかなり混み合った。

味噌汁ソーメンを作る時は特に用心しなければならなかった。沸騰すると鍋蓋が宙に舞うからだ。

何度もそういうことがありアパートの同居人のなかでも僕のお気に入りの東北美人〇〇さんが「Kさん、おなべが吹いていますよ。」と部屋の外からいつも呼びかけられた。

鍋からふきこぼれたソーメンを見られるのが恥ずかしかった僕はわけのわからぬ弁解めいた事をつぶやきながら、顔を赤くして台所に走ったものだ。

そのうちナンパ癖が出て美人〇〇をとうとう「ソーメンご飯試食会」にわが部屋に誘い込んだ。

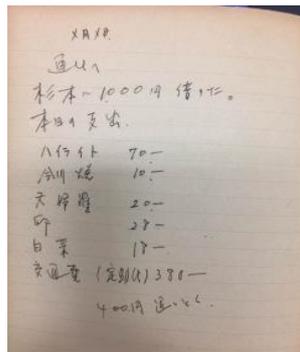
ほく的に言つと美人の方からリーチされたか「一緒に食べる?」「こちそうしてくれる?」とお互いの気持ち体が合体したのだと思う。

リアルな描写は控えたいが扁桃体は鳴りやまなかった。

今でも冷しソーメンが食べ残ると味噌汁と混ぜたソーメン汁をご飯にかけて「猫まんま」を食べたいと思う。隔世遺伝でもあるまいが小学校3年の孫がマヨネーズをご飯にかけるのが好きで母親やババにきつく叱られる。女親たちのいない時、そっと「マヨ」は美味いよね」と孫に咬いたら女親たちにじろりと睨まれた。思い出ついでに回想を続けてみる。

—あの頃のKのアパート生活を思い出して見る—

生活費を削る為には食費の節約が絶対条件だった。かきあげ、コロッケは200円、メンチ300円、白菜180円、卵280円、などが主な惣菜だったけど



金欠病になると小さな袋に入ったマヨネーズを鋏で角を切って熱いご飯に絞り出して食べた。

お腹を満たす為に糸で結んだソーメンの束を大きな鍋に放り込み味噌汁と混ぜてごはんにかけて食べた。

今でも冷しソーメンが食べ残ると味噌汁ソーメンご飯にかけて食べたいと思う。学生時代の引越は学生援護会の軽トラックで充分だった。それでも「ちょっとしたもの」を持っていた。ひとつは秋葉原で買ったビクターのステレオ。2台のスピーカーを挟んで真ん中にピックアップ型のプレイヤーが鎮座した横長の一体型ステレオである。MJQやアートブレーキーのディスクを中古レコード店で見つけてきてはよく聴いていた。

もう一つの財産は丸井で買ったフランスベッドだ。折りたたむとソファ2台になる当時としては最新の品だった。でも四畳半一間にステレオを置いてフランスベッドを置くという構図はどう考えても無理が何度目かの引越しの際に処分してしまった。

そして、後に残ったのは月に1度の(実際は居留守を使うので度々の訪問になる)

丸井の集金人の恐怖の来訪だった。アパートのドアの外で「丸井でーす！」と叫ぶ声がすると物音を立てずに居留守を使う。

月賦屋の執拗なる連呼とKとの長い我慢比べの息詰まるような戦いが延々と続いた。

高円寺の質屋にもよく通った。丸井で買ったばかりのジャケットを持って行ったこともある。父に買ってもらったクラリネットは10分の1くらいの値段でどうとう流してしまった。斎藤真ちゃんもよくアパートに遊びに来た。そして、彼の上着もその晩のおかず代に化けた。今思えばひどいものだ。

真ちゃんのニヒルな微笑が浮かんでくる。悲壮感はまったくなかった。換えるものがなくなると相本の家が待っていた。麻雀を理由に飢えをしのぎに出かけた。飢えのぎと言えば家庭教師も似たようなものだった。新大橋の共立のお嬢さんの家庭教師は途中で出る夕食のみが記憶にある。

さー坊、真ちゃん・そして相本(相ちゃん)は大学時代の永遠の友人たちである。小学時代の大平くん、中学時代の有村文之クンを加えると僕の生涯の友はこの5人と言える。

—平成25年5月— ぼくと由子は霧にむせぶ池袋の街をあてもなく歩いていた。

時折ふっと肌をかすめる風が由子の長い髪をなびかせる。もう雨はすっかりあがっていた。

由子の肌から伝ってくる甘すっぱい香りに酔いながら僕は由子の手を柔らかく包むように歩いた。由子の帰る池袋東口の都バスのバス停の方へ向かって歩く。

だんだんぼくの今夜の泊る京王フレッシンが近づいてくる。

ホテルの白いビルが視界に入るとぼくの動悸は心なしに早くなってきた。

黙って駅まで送ろうかーそれともー言うことは決まってるんだけど、なかなか口から出ない。もしかしたら由子も同じことを考えているかも知れない、フトそういう気がした。そう思うとますます・・・いつもそつなのだ僕は。ーと、そのとき突然、思い出したように(まるでぼくの心の中を見透かしているかのようだ)由子が言った。



「くん、ちょっとわたしの携帯に電話してくれなさい」

「えっ、どうして隣にいるの？」ぼくの電話番号を登録？なんで歩いているとまじか。

僕はスマートフォンをポケットからとり出して彼女の言うナンバーを何度か打ち直しながらブレイト上を叩く。

ちょっとした間があってあの軽快な、聞き覚えのあるメロディが、由子のシヨルダバッグの中でちいさく鳴り続く。

クールストラッティンの軽快なイントロの繰り返しがふたりのところを紡ぐ細糸のようにいつまでも鳴り続いた。加奈子のひもから逃げて深夜の板橋の住宅街を必死で走りまわったときの情景が、

そしてその時間こえた旋律になぜか似ていた。

メモリアル・東京 (TOKYO) 1960～1963・(昭和35年から38年)・

迷える仔羊達と同様にほくもいろいろなバイトを経験した。

きれいな方では共立学園高等部に通うお金持ちのお嬢さんの家庭教師からきりの方では銀座のゼネコンのビルの空調工事(早い話が土方のような仕事)の夜間作業員。

屋台のおでん屋に、路上のいちご売り(神奈川の田舎の農家から仕入れて小田急沿線の駅前で販売)などいろいろ思いだしたらきりがない。

もっともおでん屋やいちご売りはすぐ上の兄の手伝いだけ。いちばん長く続いている面白かったのは2年ぐらい続いた芸能プロダクションのエキストラのアルバイトだった。(これも兄のつしろを付いてのアルバイト)ラッキープロと言う小さな派遣会社で社長自らエキストラをやっていた。

バイト料が800円と他に較べると高かったけどそれより魅力だったのは夜中に弁当が出ることだった。

テレビ東京、日本テレビ、NEC(今のテレビ朝日)とどこでも出かけた。その頃はビデオ撮りが普及し始めたばかりだったので撮影は深夜が多かった。

ドライリハーサルから始まってカメラハスとして本番と、夕方からTV局に入り夜中

の3時頃に終るのが普通だった。

深夜の東京の街を有名な俳優さん達とタクシーに相乗りで帰ることも多かった。

普通の通行人から兵隊、犯人、クラブのボーイ、など時代劇以外の扮装(役ではない)は何でもした。

NHKの朝ドラ(娘と私)や事件記者、特別機動捜査隊、夢で逢いましょうなどである。

特に思い出に残っているのは当時の人気番組だった「ママと良江とひで坊」という今で言うバラエティ番組。

ママとは新派の初代水谷八重子、ひで坊とはその頃いちばん人気のあったジャズバンド「白木秀雄クインテット」のイケメンドラマーで水谷良江と新婚ほやほやだった。この番組には度々、いろんな役で出してもらった。

水谷良江は昭和14年生まれの同じ年だった。

楽屋で化粧をしながらいろいろ話したが相手から見ると一人のエキストラに過ぎなかったので名前も覚えていないだろう。

白木秀雄は裕次郎の代表作「嵐を呼ぶ男」の裕次郎扮するドラマーのオフレコをした。ほどなく二人は別れたがひで坊こと白木秀雄の最後は悲惨だった。報道によると麻薬におぼれアパートの一室で腐乱死体で発見された(らしい)。

初めての美容との接点は『キヨシ美容室』(市川本店)だった。 昭和38年2月

この後、一年半の美容学校(夜間)通いと並行して、風間は都内の美容室での見習い修行に明け暮れた。

なぜぼくがペンを生かす仕事(記者やシナリオライターなど)をやめて大学まで出ながら美容(パーマ屋)師なんかになろうとしたのか、これはだれでも不思議に思うことだと思う。

事実、鹿児島島の美容室で男性美容師として活躍するようになっても鹿児島島のテレビ局の番組に出る度にアナウンサーから出るインタビュの最初の質問はこうだっ



た。

「そもそも、大石さんが美容師になったきっかけは何だったのですか？」

今でこそ男性美容師は当たり前前の時代だけとその当時は、とりわけ地方では全く珍しい存在だった。いつも答えに窮したことを思い出す。質問者が納得するような回答になっていないと言っつより答えているほうが上手く言っていないからなのだ。

簡単な答えなのだ。

美容室を経営している通代のお母さんが僕をみそめて、「娘と一緒にさせて、男性美容師にさせて店を継いでもらおう」そう、直観したのではと思う。そしてその為の方策が図られていった。まず、ぼくに美容という仕事がかれから男性の美容師の仕事になっていくこと、それはすでに業界では沸々と湧き上がってきていること、まずはぼくにその「現実をみさせてあげる」こと、大学3年の時、通代も白百合の短大を卒業と同時に美容師になるべく本郷の『山崎伊久江美容室』に修業入社する。大石も（もう、結婚するのを前提にしていたのだろう）上手くいけば当代人気ナンバーワンの男性美容師の門を叩き、3年修業をして鹿児島に帰る。

こんな、プランが通代の母と夫・利繁（通代の義父）との間では着々と進んでいたようだった。もちろん、相手は（大石さんもそのことは納得しているはず）との理解だったと思う。それは、ぼくにどうも確かに否定することのできない「流れ」と言えた。

美容学校は大久保にある真野美容専門学校の夜間部に通った。校長の真野秀子、郷子、副校長の真野博は有名美容師だった。特に博先生は業界No.1の男性美容師としてキヨシ先生と人気を二分していた。

さて、その当時、一人前の美容師になるためには3通りの方法があった。まず1年間昼の美容学校を卒業して、しかるべき美容室で1年間のインターンという見習い期間を経て国家試験に合格して初めて美容師の免許がもらえた。

2番目の方法は昼間は美容室で実習（安い給料で見習い修業）をしながら美容学

校に通う。午後の時ころから8時頃まで学び1年半（つまり昼間生よりの6か月長く）後に美容学校を卒業してインターンになる。

3番目の方法は美容室で働きながら通信で美容学校を卒業し2年後にインターンになる。この3通りの方法があった。このシステムは平成の初めごろまでであったのではないだろうか。

いちばん技術が身につくのは昼夜美容に関わることでできる夜間部がいいと思う。その道を選んだ。

夕方になると仕事の途中で抜けていく夜間部生は美容室側にとってあまり歓迎しにくい制度だった。おまけに

ぼくのように大学卒業後すぐ美容学校の夜間部に通いながら、しかも免許をとったら田舎に帰るつもり男を雇うのは当時の人気美容室では敬遠された。

ひとりで京成電車にゆられ市川の「キヨシ美容室」を目指して看板を見つけた時の様子は今でも眩に残っている。

新宿、池袋の繁華街の真ん中にいつもいる僕にとって市川駅とその周辺は本当に田舎だった。

勇気を出して美容室のドアを叩き、来訪理由をそこにいた若い美容師に告げた。別室に通されしばらくすると年配の女性が現れた。潔先生のお母様の「キヨシ」まであとで判る。

そこは高卒でさえエリートと言われるぐらいの世界だった。徒弟制度がやっと見直されそれまで女中に近い修業を強いられた中卒の見習いたちがやっと横文字のビューティアシスタントという名前だけは如何にもしゃれた地位を得たことである。

面接の結果はぼくの思い通りにはいかなかった。市川の美容室は見習いは採用しないとのことだった。1年間、美容学校を卒業したらインターンで採用してもいい。

でもあなたの場合は特別研修生として浅草橋の「キヨシ美容室」支店なら通いで修業してのいいです。但し、正規の採用ではないので給料はあげられません。キヨシメンバーとして講習会は自由に参加出来ます。この話をいただ

いた。ぼくの方は今を時めくキヨシ会のシステムと技術を内輪から学べる（外から参加だと実費が沢山かかる）特例なのでよろこんでそうさせてもらった。

大学4年生の1年間ほぼ毎日（大学への補修と卒論の為に池袋通い以外は）浅草橋の「キヨシ美容室浅草橋店」に通った。

先生は横山道子と言った。潔先生とは従姉と言った。ご主人は美容材料屋さんだった。その時ぼくは中野製薬のシャンプーリンスを知った。

一緒に働くというよりそこで美容の初めを覚えてもらった先輩の名は（もちろん顔も）覚えている。男性は土井宏一、ほんとうにかっこいい大阪から来ていた美容師ともう一人は荒井康友（美容師）の奥様になった節ちゃんという名のやさしい娘（二人ともぼくと歳の差はなかったかもしれない）そして、翌年真野美容学校で一緒にになり、その後、2年ほどつかず離れずの付き合いをして、また、かなり後になって中野製薬の代理店同士で付き合いの続いた富山の岡崎美容商会社長・岡崎育男そして、奥様（キヨシ美容室）もこの時代を思い出すと近くにたびたび登場してくるなつかしい人びとである。

大学卒のぼくは当時日本一と言われたキヨシ美容室でも珍しい存在だった。オーナーの石渡 潔は全国美容師の憧れの存在だった。講習会の度にその華麗な手さばきと話術は参加した美容師のため息でいつもどよめいていた。

ぼくは大学卒業と同時に石渡浅草橋店での修行もやめて新大久保にある真野美容専門学校に入学した。まてよ、もしかして夜間部が秋入学制なら4年生の秋つまり卒業前年の10月ごろ入学したことになる。

頃を同じくして通代は『山崎美容室』へ住み込み入社。ぼくは代々木上原にある『ロザン又美容室』の見習い夜間通学生として入社した。店は代々木上原の駅を出て狭い商店街の坂を上がったところにあった。その先生（檀上成子）が通代の母



（有村敏子）の友人だったのが務めた理由である。

夕方5時になると小田急線の代々木上原駅から新宿駅で降りて東口を真っ直ぐ歌舞伎町を抜け、突き当りにある新宿コマ劇場の左横筋を真っ直ぐ5分ほど歩いたところに『真野高等美容学校』夜間部に通った。

この道は誘惑の多い道だった。ここでの一年半（岡崎と同学一緒に学ぶ）も楽しい学園生活だった。同じ夜間部の女の子（といっても20歳前後の生徒）と学んだり、さぼったりと、結局、最後は単位の時間が不足して補修のため卒業が延期になった。ひとりの美人生徒と野々山くん（同期）と3人で白樺湖に1泊で遊びに行ったり。3人同居屋だった。和布団の中で足が絡んだけど結局それで終わった。「あたしと結婚してください。銀座の近くにサロンがあるので一緒に後継ぎして頂戴」と言い寄られた。きれいな見合い写真（B5版）をもらったりした。佐藤伊沙子といった。

忘れてしまったがこの夜間部に通った18か月はいろんな光景が今になってフラッシュバックする。

歌舞伎町の音楽喫茶（名曲から同伴まで、そうジャズ喫茶でカチートやキサスキナスをうたったり）の思い出はつきない。あやうく日劇のバックダンサーにスカウトされそうになったこともある。

真野美容学校時代から卒業してロザン又での修業時代は楽しいことも、苦しいこといっぱいあった。

まさに、井上ひさしの「ひょっこりひょうたん島」の歌の通りの人生だった。そしてそれはKの生業人生なまわいじんせいのフログであると同時に、Kの『わが青春のエピソード』でもあった。

♪くるしいこともあるだろう
♪かなしいこともあるだろう

♪だけど僕らはくじけない ♪ひょっこりひょうたん島

♪どこまでいっても あすがあるホィ、

♪ひょうたん島はどこへいく、♪僕らをのせてどこへゆく



『まるい地球の水平線』 『なにかがきみを待っている』
『ロザンヌ美容室時代（インターン生）』 『成子先生・名和会・修行仲間との思い出』
『じゅっつ書きます。楽しい思い出ばかりです。』

— 大石ケイジの根源に関する告白 — 2017.3（追記）

ほくは美容との関わりについては、本当はもっと大事なことを書かなければならない。それは

ほくの妻・通代とのことである。ほくは通代と知り合わなかったら間違はなく美容界には入っていなかっただろう。

当然その後の人生は全く違ったものになっていたに違いない。まず、美容はおろか、鹿児島に帰っていなかったはず。その頃のほくの進路はマスコミ界だった。事実、3年の頃まで新聞記者か、雑誌記者が夢だった。

在学中に創刊された『週刊テレビガイド』の入社試験を受けた覚えがある。

日比谷のとあるビルの中でその試験があった。今でも受験問題を覚えていて。100名ほどが机に向かっていて。写真が2枚配られてきた。1枚の2Lサイズには（おそらく東京の）繁華街の中で人々が騒然としている。ビルの向こうで煙が上がっていた。走って

逃げるようなひとびと。そして、もう1枚はLサイズ。そこには田舎の小さな駅（ひとりの男―高倉健に似ている）にバッグを下げて佇む男の白黒写真があった。

あと、鉛筆が2本に消しゴム1個。3枚の原稿用紙が机の上にそれぞれおいてあった。スピーカーから声が流れてきた。

「これから、20分の試験を始めます。みなさんの机の上には2枚の写真がある

りますね。

この写真を見て記事を書き上げてもらいます。

まずタイトルをつけてください。次にサブタイトルをつけてください。

皆さんが写真から受けたイメージで自由に書いてください。

ただし、その2枚の写真が記事の内容の重要な証拠になっていることが必要です。

Lサイズの人物はみなさんで好き勝手な固有名詞を使ってよろしいです。ある俳優に似てると思ったらその俳優のゴシップでも自由です。字数は自由です。枚数も3枚以内ならどんなでも結構。ハイッ！それでは始めてください」

—そこまでは、はつきり今でも覚えていて。だけど、20分間にどんなことを考え、どんな文章を書いたのかとても今では思い出せない。かすかに覚えているのは、タイトルに悩んだことだ。どちらかというところいうコピーつけ（ヘッドコピー）やサブコピー）は得意の方だった、いや、今でもその後の人生においてこの分野ではまあまあいい線をしていると思う。でも、この時はなにもひらめきが湧かなかった。制限時間の半分近くが写真をながめているうちに過ぎていった。ほくは、そのときの焦りをいまでもおぼえている。

後にも先にもこれ一回、ほくの人生ただ一度の入社試験の思い出である。

昭和35年―ほくが立教の2年の頃のことだった。

その頃、中央線沿線の高円寺に兄とふたり（前後して、妹の和子も上京してきて）一緒にちいさなアパートに住んでいたと思う。

近くにお風呂屋があった。「お風呂でみっちゃんにあったよ。びっくりした」妹の和子が目を丸くして帰ってきた。

和子とみっちゃん（ほくの妻になる通代の愛称である）は純心高校時代の同級生である。

実はほくはこのみっちゃんなる女の子はちょっと知っていた。

長田中学校の3年生のころ、悪友の有村文之

の家が中町でパチンコ屋を経営していた。

ほくは学校の帰りによく有村の家で遊んでいた。2階の窓から細い道路を挟んで1軒の空き地を置いて木造2階建ての細長い家があった。表の通り（現在の中町ベ



ルク)から3分の2くらいが美容室で、裏の方が勝手口になってい

た。有村の家からは空き地を挟んで丸見えだった。有村はこの中町近辺の悪のリーダーだったようで近辺の子供たちには精通していたようだ。「みっちゃんは可愛いよ、長田にはいない美人だけだね」色が黒れとがちつと難やね』

結局、ぼくは鹿児島にいたときは顔を見ることがなかった。

和子の話によるとみっちゃんは百合女子大に行っているらしい。「高校のころと全然かわっていなかったよ」「有村が中学のころ美人だって言ってたけど」というと「今もすごく可愛いよ」

百合がお嬢さん大学だということはぼくも知っていた。おまけに美人、おとなしいー彼女にしたら、相本や真ちゃんたちにちょっと自慢できるかも知れない。そんな思いが頭をかすめた。

こんど風呂で会ったら「お兄さんがお芝居でも観に行きませんか」って言ってたよ、と伝えるように和子に言った。下はその頃の通代ー色黒のぼっちゃり美人？

初めて通代に遭った時のことを良く今でも覚えてる。

さほど、感動的でも、運命的な出会いでもない、

ごく自然な他の知り合いのガールフレンド(もう、マコとは遠い関係になっていたし)と変わらない出会いだったと思う。

高円寺の北口駅から高円寺のお寺へ向かって下り坂になってる。

ぼくは下から上に、彼女は上から下に、その坂の途中で僕たちは出会った。

大きなウエーブのある肩までの髪の色はナチュラルブラウンで上手く染めたような後で聞いたら地毛なのよと答えた。

小さな顔はまだ幼げで東京の女子大生にはとても見えなかった。

冬だったのだろう、粗いツイード生地、色はカナリヤ色というか、若草色と言った感じのオーバーコートを着ていた。靴は黒のローバーだったと思う。

なぜそこで出会ったのか、ぼくのデートを受け入れてくれたのか、今となってはその後の発展の速さ程その時の印象はあざやかではなかった。

長い時間を置かないで二人は新宿に本当に芝居を見に行った。というのがその頃ぼくは松竹新喜劇にひどく凝っていたのだ。劇場は新宿にあった。兄友のマー坊が夢中になっていてぼくを誘ううちにぼくもファンになってしまったのだ。

なかでも『石井均一座』が押しだった。1958年に旗揚げ、最初の仲間はず塚睦夫、伊東四朗(弟子)確か、幕間と司会は財津一郎今でも『マツモトピアノ』の『マーシャル』・・・して頂戴!」で有名。

行くといつも前から3列目くらいで観ていたので均ちゃん(ぼくの時代の均ちゃん)はコント555号の欵ちゃんとは違つ)の舞台を飛び上がるときのほこりが飛んできた。

自分で言ったアドリフであとのセリフが詰まってしまい芝居にならず地の笑い顔で誤魔化すシーンがとても身近で好きだった。この間合いは、やがてコント555の欵ちゃんと二郎さんに受け継がれてゆきテレビを通して大衆化していった。

下はやっと見つけた石井均ちゃん

まだテレビでのお笑いタレントや劇場もなかった時代だった。もちろん今を時めく大阪のお笑い集団「吉本喜劇」も登場していない時代だった。

おそらく浅草のテンスケ時代かもしれない。

ぼくと通代との初デートはこの新宿松竹喜劇だった。

やがて、通代を仲介に、ぼくの高校時代の軟派していた頃の女子学生(東京の大学に入っていた)浜田敬子(大阪屋

菓子店の長女で玉龍の1年後輩で跡見学園女子大学ーちな

みに、とても美人)服地の太洋の翠ちゃん(ー純心から女子美に行った1年後輩ーその後、有名なコスチュームデザイナー)などとぼくの立教の友人たちと葉山にドライブにいったりして交流があった。

ぼくは高校時代から同級生の女性たちとの付き合いはほとんどなかったのはなぜなのか今でもわからない。





1年後輩の有村恵子（英語弁論部で一緒）がただ一人の玉龍のガールフレンドと言えるかもしれない。

もちろん、彼女とのデートの思い出も少しはあるけどふたりきりで公園で手をつないだ記憶もない。

たぶんもしかしたらお互い心でもどかしく絡み合った程度の関係かも知れない。でも、ひとり妄想の中では多感な高校時代、夢の中でだけ絡み合っていたのだと思う。

高校3年からあとの1年ごろー小林雅代（マコちゃん）がはじめてぼくの性対象として女朋友（中国で彼女）の初めての女性だった。

それまでの敬子ちゃん、翠ちゃん、恵子さんたちはやはりガールフレンド（後輩の女子学生よりはお互い恋心をちょっぴり抱き合った）だったのだと思う。

もし、ぼくに性的な積極さが性格の中に持っていたらもしかしたらもう少し話は発展して、ここに書く思い出も、エピソードももっと長いものになっていたかもしれない。ちょっぴり残念な気もする。

この頃は『クールストラッティン』と重複するかもしれないが立教の友人はここに写っているサー坊を中心に

高円寺のアパートの近くだったオセン（泉 哲三） 相本に斎藤真ちゃん、室さんたちが友人で、交互に交流を重ねていた時代である。

相本を通して東中野の池田姉妹（直美さんと勝っちゃん）と付き合ったり、そして、彼女らの実家である伊豆長岡の温泉旅館「さかなや」にも3泊くらいで2度訪れている。

ぼくのこの時代こうして思い出すととても多くの女たちが登場してくる。ただ、貧乏だったのでデートに誘ったり、なにかプレゼントしたり（その逆はあったような

気がする）の思い出はない。思えば、残念でもあり、悲しくもある。

アルバイトでやっと食っていた。質屋通いもちょいちょいだった。あの父に買ってもらったクラリネットもとうとう何度か出し入れするうちに流してしまった。今でも、だれかがどこかでぼくのクラリネットを吹いているのだろうか。この曲が好きでそのために買った、ピーナツハッコリーの『小さな花』を。

池田の勝っちゃんは好きな娘だった。彼女が東北山形の温泉旅館に嫁いだという話を相本に何年か後に聞いた時

まだ当時高校生だった勝代の顔を思い出し、遠く山形の雪に埋もれた温泉宿のおかみになっている姿を思い浮かべた。

共立女子高校の服を着た可愛いえくぼに、可愛いキスをなぜしなかったのだろう。何度もそのチャンスはあったのに、そして、もしかしたら遠い未来に再びそんなチャンスが訪れるかもしれない、そんな予感がした。そして、それに近い出会いがあったのは昨年の仙巖園の中で訪れた。

わたしたちは団体旅行の群れの中から飛び出してきた彼女は「もうすぐ、来年は70歳になるのよ」と悲しそうにでもあの可愛いえくぼでぼくにささやいた。

ぼくと勝代はちかくのレストランの2階で、他のグループは磯公園の見学に回っている間、1時間以上彼女から50年の勝代の人生を聞いた。



死の大病を克服したこと、離婚して今は東京に独りで住んでいること、そしてもちろんあの頃の青春の思い出をいっぱい。ぼくはもしかしたらまだチャンスはあるのかもしれない、と思った。

1昨年、相本と岐阜・白川などを旅した時に勝っちゃんに会ったこと、まだチャンスはあるかな、と尋ねたら彼の答えはこうだった、例のニコニコした笑みを浮かべ「ボウや、もう10年早かったらナ、遅いよ、もう夢でしよっ」と。

ぼくはそうは思はない、勝っちゃんもそう思っているに違いない、とこころのなかで思った。

この次のFの旅行には勝っちゃんも一緒に参加してもらおう、と相本に伝えてあつ

た。下は仙巖園で50年ぶりに会った二人

その翌年、今年は「どこに行こうか」と話していた矢先、突然の訃報が泉から届いた。

「ボウ、アイちゃんが亡くなったよ」それは信じがたい知らせだった。

思えば、山室の時も、真ちゃんの時もそうだった。

立教の仲間の別れはいずれも「突然」なのだ。

もう、50年ぶりに復活した立教時代の甘酸っぱい交流は途絶えてしまうのだろうか。

わずか2年間だった。次にみんなで会うのは『喜寿』かな、と皆で決めたのに。

……とここで、先日一通の封書が我が家に届いた。

・裏には住所はなかく井由子と名前だけが小さく書かれていた。……由子からだった。いつも、同級生からの手紙は妻に中身を読んで聞かせていたことを後悔した。『あせらない、あせらない、平常心を』僕は胸の早鳴りを気づかれないようその場をはなれた。

その晩Kはその手紙をベッドの中で読んだ。そのミステリアスな手紙を披露しよう。

—50年目の同窓会であなたに会えて嬉しかったワ。そして、53年前のあの日、「遅いから送ってあげるよ」って私を駅まで送ってくれたことを思い出してくれてうれしかった。あの晩、二又交番を過ぎた細い路で変な男たちに取り囲まれ、わたしが無理やり連れて行かれそうになった時、私の手を握って離そうとしないやくざの手にあなたが必死でかみついて振りほどき、駅までふたりで必死で走ったこと、あなたの顔を見たら、顔が恐怖で真っ青だったのよ。そして、改札口に着いた時わたしたちの手は握られたまま固まっていたのよ。そして、改札口に戻らない。泣き出したんだけど、この絡った手のままでずーっと一緒に居たいって、「私の心は葛藤していました。」

もしあなたが怖かったらぼくの部屋に泊ってもいいんだよ」と言ってくれたら黙って「うん」「うん」はなすくはすくものでした。胸の中では「今夜は一緒にいよう。」

とあなたがやさしく言ってくれるのを待っていたのかも知れません。

あのときはKくんと一緒にいたかったの。でも、泊っていたらきびしい父が「晩中かかっても捜し回ったかも知れませんね。結局、私は帰りました。」

そのあと何故なのか、あなたは急にわたしに対してよそよそしくなってしまうました。

なぜだか分りません。そのあと、4年生になったらあなたの顔を学校で見ることがなくなりました。

いつか会いたい、いつかは会いたいと思っていました。でも二度とふたりの紐が絡むことはありませんでした。

「無視されてしまったの、何の理由も分からないままに、わたしはずっと待っていたのに」

それから53年目のあの日の再会でした。

神様がわたしの願いを聞いてくれたのかも知れません。あの晩、「泊っても構わないのよ」とわたくしは言いました。53年前に言いたくても言えなかった胸の中に秘めていた「ことば」でした。

50年経ったのですものね」だまって私をどこにでも連れて行ってよかったです」

でもあなたは53年前とちっとも変わっていません。

「こわい父もいなかったのに……ね……ね……」

・手紙はここで終わっていた。2枚目の3行目だった。

あとの広い空白には目に見えない透明の文字で、びっしりと由子の想いが、埋まっているのが僕には読めた。そして僕にはわかっていた。彼女がほんとうは何を言いたかったのか……

3回ぐらいKは手紙を読み返した。そのうち、深い眠りに入っていた。

的井由子と五十二年前のあの夜、別れて以降どうして彼女に冷たくなったのか、何故避けるようになったのかは今は今なら分かるような気がする。

たぶん「格好つけてほくの方も待っていた」のだと。別に避けていたわけではない、うまく言えないけどそれは由子とほくの愛の差だったのかも。つまり相手が自分のことをどう思っているかなどあまりききえてはいなかったのではないか。

いま振り返って見るに、「今」「幸運を掴めるかもしれない」と言いつつ、「一番のチャンス的一步手前で僕は」「いつも躊躇」してきたような気がする。

「慎重」といえば聞こえがいいかもしれないけど「現状放棄、つまり張り合わずに逃げてしまおう」思い出すと悔いの残ることはかりだった。

そつえば子供のころから僕は「答えは分かっていたのだけど」教室では手を挙げない子供だった。いろんなことが走馬灯のように頭の周りを駆け巡る。でも僕は思う―無理はしなかった。と。半世紀が経った今、ぼくは寛容―許容―の範囲がとて広い性格に変わって来たような気がする。格好よく言えば、人と接する時いつも―相手側の立場になって物事を考えるようになった。

つまり「ぼくがあなただったらどう思う?」として欲しい?」って、その為―時としていい加減ネと言われる―寛容さは相手に対する思いやりなのだと思ってる。

.....いろいろなことが今夜は頭を駆けめぐっている.....ベッドの中。

近くでパトカーのサイレンの音が聞こえる。都会の真夜中の繁華街にいるような気がする。サイレンはいつまでたっても細くながく僕の耳のなかで鳴り続けていた。やがて僕は深い眠りのなかに引き込まれて行った。

2013年5月―そこは未明の池袋京王プリシッインホテルの4階.....まだ夢の中。

・夢の中で何かを聞いた気がした。

朝あけのまどろみのなかで聞きなれたジャズのメロディーが流れていた。始めは小さく短く、まるで傷の付いたシートのように、同じフレーズを何度も何度も繰り返して、心地よい音符だけが勝手に風に吹かれ漂っていた。

その音とは別におぼろげだけでもひとつの音が交差するやうに聞こえていた。

―僕の腕の中でスヤスヤと眠る由子の寝息が聞こえた。僕は無意識に由子を抱き寄せ腕の中にしっかりと抱きしめた。そして僕は眼を閉じたまま記憶の中の由子に想いを巡らせていた。

―枕もとに置いていたスマートフォンが目覚まし用のアラームが徐々に大きくなっていく。あの聞きなれたクールストラッティンの軽快なトランペットのリフレインが流れている。

僕は夢の中で何を見て、何を聞いたのだろうか。―京王プリシッイン403号室―眠りから覚めた僕は、まだ半分はぼんやりした夢の中を彷徨っていた。

―五月の朝の陽光がきらりと光る水晶のようにまぶしくベッドを照らしていた。

《書き終えて》

眼が覚めて見ると支離滅裂な話が何の不思議もない―本の筋として繋がる『ありふれた夢』物語として書いて見ました。

支離滅裂なストーリーが何の不思議もない―本の筋として通る『ありふれたユメ』物語として書いて見ました。考えてみれば私たちの人生も終わってみれば『長い一夜のユメ』なのかもしれません。今の「思い」と、昔の「おもいで」をひとつの文章としてまとめるにはぼくの拙い文構成力では無理がありました。

いまだ煩惱にさいなまれている今、現在の「思い」と、過ぎ去った甘酸っぱい「想い出」をひとつの文章として―しかも『手紙が届く』という「未来への夢想」までドッキングさせて―書いてみました。でも寂しいかな、こんな夢見の愉しみも最近はめっきり少なくなりました。

おまけに『手紙が届く』という「未来への夢想」までドッキングさせるといふ本当に無茶な、一繋ぎめちやくちや、尻切れとんぼーなのに見ている最中は何の違和感もない「夢見」という便利な方法がありました。

・久しぶりの東京ひとり旅の1日目のお話として気楽に読んでいただければ幸いです。(今日)から再び短いけれどたのしい旅へのプロローグでもありました。ところで、よく脳の話をして僕が「東京今昔物語」は終わらなうと思っ。

2013年10月15日

《お仕舞い》 脳の話(1)を少(1)つて僕の「東京今昔物語」を終わら(1)と思っ(1)。

クールストラディン

(いっくら扁桃体は年をとらないとはいえ私たちはいささか遅きに失した感はある。いっくら扁桃体はいいのか。ボケないで今の状態を命が尽きるまで維持出来れば、欲を小さく持つことしよう。つまり仏教で言うところの小欲知足である。その為に扁桃体トレーニングだけは欠かせない。鏡をにらめっこをして日に数回満面笑いを鏡に向かってする。最初に書いた二番目の秘策である。強い情感は得られないかも知れないが、こちらにはさほど難しいことではない。そのかわり、決して他人に見られないことを祈っている。)

◎ちなみに「クールストラディン」とは、カッ「ちくちく」という意味です。

大石の書いた原稿・エッセイ・編集後記集・思いつきの原案…などまとめ。

2016年8月20日編集

同じように。

●南日本新聞夕刊「思いつき」5月23日分

中国四川大地震

日中友好協会)

大石慶一(鹿児島市

長沙の日本語学校には四川省出身の生徒も多い。震源地である綿陽の近くの農村から来ていた可愛い龍習さんの顔

が重なる。そして田舎に帰っていないようにと願う。連日映し出される現地の被害状況を見ていると十三年前の阪神淡路大地震と重なる。発生が2時半とかで学校の授業中のため児童の罹災者の多かったのも胸を痛める。テレビに映し出される被災者の様子からはいつもながらの激しい口争いのシーンが映し出される。自己主張の国民性を懐かしく思い出しながら一方、感心したこともある。倒壊し家屋や瓦礫の下から救出される現場にいる多くのボランティア市民の存在だ。嘗ての中国ではあまり見かけない光景のように思えた。直接地震とは関係ないけどいつも中国の話をするといやな気持ちになることがある。それは中国嫌いの人々の発言である。マスコミから入る中国批判の発言を自分の思いに同化させて中国性悪説を募らせていく。曰く「建物がオカラ構造でこわい」「好意の人的支援をなぜ断る？国家の面子か」そして受入を要請されると「本当は発展の遅れを世界に報じられたくないけど、世論に負けた」から仕方なしにとか。本当の中国はそんなじゃないよ。といつも心の中で反芻しながら、彼らが隣人を心から理解する日のいつか来ることを願う

●八期通信用の「編集後記」

話は変わるが、「そのうち」と思っているうちに過ぎてしまっのが賞味期限。定年を過ぎてからの賞味期限は一体どれくらいだろうか。たかだか、十年〜十五年というところだろうか。まずは、自分自身のために、次に、リニティブな他人のために、このおいしい時期を使いたい。●粗い考え方もいけないけど、期限後は、老けようと、病に倒れようと、その時は運命、宿命と諦める。「僕らには、老中はあっても、老後の楽しみはない」と言ったり、ひんしゅくを買っただろうか。●個々のシチュエーションは違っけど、それぞれの、それぞれに合った時間割を作る時が来ている。苦手科目はあの世への宿題にして、今は、胸トキメク科目だけの時間割をすく作ろう！。同じ夕日を眺めるなら、四角いテレビの中よりも、視野イッパイの砂漠や、海原遙か、眼鏡なしで眺めたいもの。高校時代の四当五落の経験を生かすラストチャンスがきている。残された時間(トキ)は短い。

●八期通信用の「編集後記」

あなたは他人に夢を語った事がありますか？夢と言っても寝床で見た本当の夢の事です。以前は語らうとしたらおぼろげで、語りだしたら支離滅裂・・・・・・・・・・ところが、最近は文章に出来るほどのなかなかの夢をみます。二十一世紀は「心の時代」と言われています。

●南日本新聞夕刊「思つこと」原案

We love 天文館

大石けいじ

天文館の繁華街を南北に二分していた照国通りにこの度銀色に輝くジョイントアーケードが完成した。天文館エリアを東西にも拡大し歓楽街も、そして鹿児島を代表する二大デパートまでも参加したWe love 天文館が発足した。

全国の《元気のある商店街》にも度々登場する九州でも屈指の繁華街だが来街客は年々少しずつ減少気味だ。

中央駅にアミュプラザ、南にイオンを代表に大型専門店や複合施設がひしめく昨今の鹿児島市だがパイが広がったと考えれば打つ手はある。やがて新幹線も全線開通すると県外客も多くなる。

そついった観光客が自分の街にもある巨大スーパーに行くだろうか。デパートと共

存しているその街の繁華街と郊外型スーパーとはどこが違う。

「街にはその街の匂いがある。」もう昔になるが私のいた中町ベルクのアーケード完成の記念誌に山形屋の岩元恭一現社主に書いて頂いたエッセイの一節である。いま天文館は「We love 天文館」の旗の下にラブラブ行進中の感がある。

天文館の2年後を想像するとわくわくしている。今、ちょっと静かなわが中町ベルク通りの一帯が再び、ラブ天(非公式造語)の核になるはずだ。カクの広場に大きなイベント広場が出現するらしい。毎日そこではおともどもも楽しめる催しが繰り広げられる。次にWe love 天文館にして欲しいのは照国通りの歩行街化だ。わたしたちの代に企画した統一イベント「バリアフリー天文館」と「天文館フリーチケット」の次にラブ天幹部に期待するものは何だろう。鹿児島に定期路線をもつ上海、香港、ソウルなどに呼びかけてインターナショナルなお祭り「天文館ラブプカーニバル」(勝手な造語)など考えているのかも知れない。市民も我々住人もこれからの天文館を見守りたい。

●南日本新聞夕刊「思つこと」原案

3月からの中国情勢を見ているとまるでドラマである。第一章はチベット騒乱、第二章は聖火リレー、第三章は胡锦涛主席日本訪問、そして今回の四川大震災についても、いつの間にか、温家宝首相主演のドラマ、第四章となってしまっている。実質的な救援活動よりも中央電視台のシナリオに沿った演出ばかりが目につく。第四章では外国人の出る幕はないということなのか？いくら多くの震災を経験し対処法も熟知していようが、日本人は主役をはれないのだ。歯がゆいばかりである。

未曾有の大地震であり、交通網が遮断され天候も悪い山岳地帯の救援はなかなか容易ではなく、外国の救援隊が善意だけで駆けつけられる状況にないのもわかるが、災害救助のノウハウをもたない武装警察や人民解放軍だけでは治安への対応は十分であっても、救助が難航するのは当たり前である。精神力頼りの人海戦術では人命は救えないし、復興もできない。これではドラマとしては成功しても救命としては失敗してしまう。当局はやり直しはきかないことを理解しているのか？

これほどの巨大地震である。外国の支援を求めてもメンツがつぶれることはない。

世界の力が結集して中国の災難を救うというシナリオでもないのか？中国13億の人民の中にも政府の救援活動に批判的な意見を持つ人もいるようだが、それがなかなか表面に出てこない。これも、言論の自由のない独裁国家ならではの弊害なんだろう。

●南日本新聞夕刊「思つこと」原案

。外国には優れた救助チームや設備（ロボット）があるので、中国の人たちにはぜひともそれを知ってほしい。わが日本も阪神・淡路大震災（平成7年）など多くの被災経験をもち、被災国や国際機関の要請があれば自衛隊の派遣も可能だ。18年のインドネシア・ジャワ島中部地震では延べ3800人の診療など医療支援に実績を残している。今からでも日本に救援を依頼するように、ぜひとも中国政府に働きかけてほしい。テレビが映し出す中国・四川大地震の被災地の映像がまぶたの裏の阪神大震災の光景と重なる。遺体のおい、がれきの間にうすくまる女性の無表情、倒壊した家屋に張られた家族への伝言の紙。記憶がふつつつとわいてきて心が痛い。

大きな地震災害を目の当たりにするたびに、あの記憶がよみがえる。台風などはある程度予報できるが、地震は闇討ちのようだ。そう訴えると、友人が「中国は地震を予知できる」という。

調べてみると、地震を予知し深刻な被害を回避したとされる話もある。1975年の海城地震（マグニチュード7.3）。鶏やネズミの異常行動を見て、国家地震局は遼寧省海城市の住民を避難させるなどして被害を最小限に食い止めたという。今回の大地震の前も、被災地の四川省綿竹市で数十万のヒキガエルが一斉に移動するのが目撃されたといい、この地震のサインを見逃した当局を非難する声すらある。

●南日本新聞夕刊「思つこと」原案

●2001年のWTOへの加盟により益々、世界経済のトップへの道をひた走る中国。自動車国内販売台数436万台はアメリカ、日本に次ぎ現在世界第三位。来年には900万台に達し日本に並ぶといわれている。4年後の北京オリンピック、その2年後には上海世界万国博が開かれる。

全世界の脚光を一身に集める中国。その一方では市場経済の歪とも言うべき都市と農村との貧富の差の拡大。共産党一党支配による政治不信。麻薬の密売、SARS等の社会問題。

サッカーの国際大会に於ける日本ハッシングのようなグローバル感覚の欠如など、現代中国の抱える光と影を自分の目で確かめてみた。現地へ飛んだ。

行く前は「そげん、中国のどこがよかけ？」「帰ってからは「中国はいけんやったか？」と、いかにも広大な中国大陸にふさわしい、漠然とした質問が友人達から飛ぶ。その度に僕はリハビリ中の麻痺患者のように「瞬コトバにつまった。・初めて体験した日本語学校での授業風景が鮮明に頭をよぎる。僕の教室はいつも賑やかだった。真っ赤なりんご顔の陳姐ちゃんの大きな声「センセイ、声ガヨク聞こえマセンヨー」。四川省の呉琳さんは「センセイ！浄土ってどういう意味ですか？センゼンワカリマセン」。岳陽から来た王俊クンの口癖は「キョノ授業、雑談イイデスカ？」。その度に教室中がどっと沸く。日本語で冗談を言うのが楽しいらしい。だから僕の授業は日中入り混じりの漫才状態だ。《日本人が日本語で話をする》それが僕の役目らしく、出来るだけ僕の口からは中国語が出ない方が望ましいんだという。「それじゃ中国に会話の勉強しに来た意味がないじゃんか？」思わずもれる僕のぼやき。

●南日本新聞夕刊「思つこと」原案

授業の話がもう少し続く。もとより僕はにわか教師だから日本語の文法については？である。でも生徒がヘンな日本語をしゃべるとすぐに分かる。しかし、ここで教えている日本語教材を見ると、日本人ならごく普通に使っている日本語を2つあげて、「どちらの遣い方が正しいですか？」と問う。

教師用虎の巻には文法上の違いが理路整然と書いてあり、それを学生達はしっかりと勉強している。尤も、それを覚えなければ日本語検定試験に合格しなだから皆必死なのだ。今日も一人の生徒が質問してきた。

「先生！《学校に行か（ないで、なくて）映画見に行くつもりです。《どっち正しいですか？教えて下さい。》僕は数回、口の中で反芻しているうちに分からなくなってしまう」「こんな場合、日本では、学校に行かずに映画に行くつもりです」と言

います。「どきどき」しました。するとすかさず「《行かす》という言葉は書き言葉じゃないんですよ。」とね。

そんな区別なんか僕が知るから、と聞き直りたくなったけど、グッとこらえて「でも僕は普通に使いますよ」とひきつった笑顔で逃げた。口の中で模擬会話をしているうちに自信がなくなってきた。「書き言葉、話し言葉なんて区別、普通じゃないもんね」「フ、ひびき。いつかこんな質問があった。」この時と、あの時とその時の使い分けがよく分かりますね」という。「この」は現在で「あの」は両者が共有した過去というのわかるけど《その時》は説明出来なかった。僕の好きな番組、NHKTV「そのとき歴史が動いた」司会の松平アナの顔が浮かんだり消えたりするのだった。

●南日本新聞夕刊「思つこと」原案

中国の学生は実に勤勉だ。将来への目標もしっかり持っている。彼等の就職先へ提出する履歴書を見て驚いた。5センチ四方位の枳のなかに原稿用紙2枚分ほどの文字がびっしりと書かれている。すべての空白が小さな文字で埋まる。こりゃ、読む方が大変だ、と思ってしまう。

ひきかえ、日本の若者事情はかというて、若年無業者、つまり卒業した後、進学も、求職活動も、結婚もしない若者が52万人、企業に縛られないアルバイト・フリーターが217万人で前年比8万人増しだと新聞に出ていた。これでは日本の将来は一体どうなる?と暗澹たる気持ちになる。「中国は方言がウエ(多い)たち(の)じゃないの?」も多い質問である。

方言とは別な答えになるが湖南人は方言と方言の区別が出来ない人が多い。「いろいろ」を「いのいの」と言い「大」を「いる」と発音する。ペットショップの前で趙麗さんが叫んだ!

「アイヤーセンサー、アソコ イノイノナ イルが イヌ ナ」(わあー!先生、いろいろな犬がいますね)本人は真面目に発音しているのです。

《お母さんは知らないんじゃないの?》と言わしてみただけでやめた。

●南日本新聞夕刊「思つこと」原案

いろいろな場面が頭をよぎる。青海湖の大草原に群れる羊や毛牛を眺めている自分。

水平線に沈む真っ赤な太陽を車中からぼんやり眺めている自分。うんざりするほどのお寺をたずね。霊山奇山、名山に登り。河川、湖、滝をめぐる。たった一日限りの、数え切れない中国人仲間たちの笑顔が浮かぶ。それぞれの項目が僕のセルにはあふれんばかりに詰まっている。「ところで、食事はいけんやっただ?中華ばっかじゃ?」やっと出た具体的な質問にぼくのセル頭の中にある思い出し出しの「いや」が開く。質問者の好奇心を埋めるべく回答を探す。準備しているキーワードの中から《辛い・とりわけ湖南料理の辛さは中国》が抽出される。「風は近くにある食堂に行って炒飯かラーメンを食べます。値段は5元(70円)ぐらいかな。」時には近所の銀行や商社の社員食堂で辛い定食を食べます「日本で食べない食材に蛙、亀、ヘビなどがある。特に蛙はポピュラーな食材でスーパーの海鮮売場のガラスケースの中の人気者だ。亀(ウグイ)も水槽に中でこそしている。買い物に付いて来た子供が亀の頭を突いて遊ぶ。

ところで蛙(チンワ)は政府の保護動物とかで本当は食べてはいけないらしいが飲酒運転や交通違反と同じで、決まりや規則は守る方が本場に珍しい国なのである。なのに街中にはパトカーがうじゃうじゃといる。「何してるんだろう?」公安は?日本の魚屋には採れたて、切り身、冷凍、どれも活魚じゃないけど、中国の海鮮売場では魚は水槽で泳いでいる。もちろん海鮮といっても日本という海で獲れる魚と同じではない。川魚だろうと池のタニシだろうと魚介類は全て海鮮なのだ。中華料理には刺身も無ければ焼き魚もない。食事の時、自分の前に取り皿や薬味を入れる小皿がないのは淋しいかぎりである。また、中国人は食事中にはあまり水分を取らない。僕は茶水代わりにいつもビールを飲んでた。飲まないと料理が辛すぎて食べられないからだ。ぬるいビールが4元ぐらいだから水と思えばよい。冷えたビールを飲みたい時は給仕にビンダ!(永的)と付け加えなければならぬ。でも、返ってくる答えはいつもメイヨ「ありません」である。冷たいものだ。この「没有」と言う中国語は会話の常用語なのだ。いろいろなシチュエーションでメイヨ(ないよ!)は多用される。日本だとこういう場合、たとえ無くても断定的に「無い」とは言わない。かならず親切の尾びれがつく。よく、中国人はおせっかいで親切というが、あれは好奇心から来るもので実際はそうでもない。公共心とか寛容とかいうものは持ち合わせていないようだ。まさに自己中心といえる。だから先日の愛国

心の塊のようなサッカーの応援は不思議な気がした。ある日、機嫌がよかったのか「没有」のあと「冷やしたビールはないけど、氷ならあるよ。」と食堂の小姐が言った。「オウー！謝罪…… オンザロック ビジョーイイネ」と大きな氷をいっぱい入れてもらい飲んだのはよかったけど、その夜は五分置きのトイシ通いで散々な目にあつた。水道水で作った氷だったのだ。中国人は遊び好きが多い。娯楽の世界でも発展はめざましく長沙市にも酒バーやカラオケなどに加えこの頃は超大型温泉センターが増えてきた。習慣なのか彼らは浴場を歩く時全くすっぽんぼんである。日本人はタオルをそえる習慣があるが彼らにはない。羞恥心と関係があるのかと思ひ、「女性も一緒ですか？」と発展的女子学生の袁静に訊いてみた。「行ったことがない」ブイと横を向かれた。多分スケベな日本人と思つたことだろう。シマッター！

●南日本新聞夕刊「思つごと」原案

そうそうホテルで困つたことがあつた。蘭州のホテルの部屋で用を足して、サテ、紙は何処かな？と探すけど見つからない。なんと、便座の裏後ろにあるではないですか。これにはビックリしたな。「いったいどうやって紙をちぎるんだらう？」僕の左腕は五十肩真つ只中。

片手では絶対切れない事を初めて知つた。是非、試一試？(シーイシー)「イッパ(一番)心に残つた風景は……？」鳳凰(ホンファン)という古い(300年前)の(街で見た風景だった。僕のHPの永遠の鳳凰(ほんぶあめん)より。

・画帳をひらくと一条の河流が古い城をたすさえて真正面から顔に当たってくる。横からみると一幅の絵に見える。縦から観ると詩一首に見える。……鳳凰大橋から虹橋を臨む景色を言葉で表現するのは難しい。見る人、それぞれの感性にかかつているからだろう。僕に鳳凰行を薦めてくれた多くの友人がその理由を言わなかつた訳が橋に立つて初めて分かつた。とてつもなく巨大なセットの前に自分がいるような錯覚。時が一瞬とまる。目の奥に浮かぶ見たこともない筈の遠い支那の田舎の街並が現れる。そこへタイムスリップして幻覚体験をしている自分。……じつと目を閉じると岸辺でパタパタと衣服を叩く洗濯棒の音、談笑している女たち声。裸で水遊びをしている子供達の歓声が頭の中の幻想世界に取り込まれていく。現実に戻つた僕も友人達に言いたい「上手く言えないけど、一度、鳳凰に行つてみませんか？」僕に鳳凰を教えた友人たちと同じように……

●南日本新聞夕刊「思つごと」原案

まだまだあるセルの中、一番「怖かつたこと」「惜しかつたこと」「恥ずかしかつたこと」「パニックになつたこと」「そして」「誰にも言えない秘密のこと」など目白押しだが紙面がない。ところで皆さんも自分だけのセル作りに励んでいますか？僕は、とりあえずの賞味期限をあと五年に設定しました。五年は微妙な数字だと思ひませんか？未だ、少しは先のようにでもあり、いやいやすべし(そ)のような気もします。五年前を振り返れば昨日のよう……！が実感だつたりして。本当の最後に一言。こちらに来ていつも胸が痛むのが物乞いの子供たちの多いことだ。街の中、地下鉄の車内、公園と、どの都市に行つてもやたら目に付く光景である。歩く事の出来ない奇形児らを正視する勇氣は僕にはない。食事中に、そつと擦り寄ってくる乞食の子供なら、せめて一角の小銭でもあげるけど、地べたに身を投げ出している不具な子供を見かけると横を向いたまま足早に過ぎるしか術がない。繁栄への道をひた走る大中国のまず一番にしなければならぬこと、それはこんなことからかではないだらうか？

●編集後記

おおいしけいじ

▼日本語教師をしてから言葉や言い回しが気になるようになった。「善いこと、悪いこと」と「正しいこと、間違つたこと」の違いを一市民の立場で考える場合と、国民として眺めた場合とでは、そのニュアンスの違いは大きい。そもそも自分が『国民』であるのか『市民』であるのかすら状況次第で変わってしまう。国同士との争いに於いては人道上の善悪より国家間の正義の方が優先するようだ。自分自身に言うも良し、他人のためにおすそ分け出来れば更に良し。でも、施すだけでは「やさしい」だけ。本当に欲しがっている人に上げたいものだ。相手の身になってあげてあげてを「思い遣り」という。

その行為が正しいか否かより、「善いことをしたんだ」と自分に自信を持って言えることをしたいものだ。▼省みれば私達は余りにも穏やかだったが故に、日本国民であることを忘れ、なれあいの市民意識だけで生きてこなかつただらうか。この

反動が次の世代につけを残さなければ良いのだが。

地球平和の為に日本は、そして私達国民は何を為すべきかべらひはたまに考えてみるのも良いのでは。間違っても「平和の為に戦する」などという訳の分からない愚だけは犯さない為に。

南に本新聞 夕刊 『思うこと』案

● 釣るるん会 大石慶一（鹿児島市日中友好協会企画部長）

という釣り仲間のグループがある。ほぐが名前をつけた。

ボス格の頭部がかなり光っていて躊躇したけど「釣りはるるん」とこまかし。中国語でいうことさしすめ「釣魚迷会」だろうか。

五目釣りは何でも狙いの釣りのことをいうけどほぐらのは釣り場が五目、つまり行く海が決まっていない。秋目、瓢島、たまには湾奥、指宿と、暇と体力があるときは竹島や黒島にもヒラマサやシママジを釣りに行く。

行く先で道具が変わるので専用物置がいっぱいになる。

前日は竿や仕掛や釣果を入れる予定の？クーラーの大きさ選びなどで大変だ。一番楽しいと思うのはカワハギ釣り、きらきら仕掛を海底に遊ばせ秀才カワハギと駆け引きする醍醐味は大物釣りにひけをとらない。

釣りは「好きこそものの」が通用しない世界である。たまには運があつて海の神さまが救ってくれることもあるがつまりは器用、不器用の世界といえる。

釣り位置を換わろうが、棚を教えようが、仕掛けを分けてあげても釣れない人は釣れない。ほぐは中間であるが、奥が深いと思うのは「釣れない時が誰にもある。」のが釣りの世界である。中国ではひとり、ほんやり旅するのが好きだけど、釣りやゴルフはワイワイと行きたい。制約されない連れとの行動は楽しみが倍になるものだ。ポーッと竿先を見ながら釣り人は何を考えているのだろうか、いつも思う。お茶の世界も夏になると蓋が変わるが船釣りの夏は夜釣りのシーズンになる。満天の空にきらめく宝石のような星群を眺めていると、とつぜん黒い海中から次々と上ってくる「瓢の赤イカ」をたぐる愉しみは釣人だけの真夏の夜の祭典である。

● 「思うこと」

長沙日本語学院のじん

2008年5月23日掲載

大石慶一（鹿児島市日中友好

協会企画部長）

特に蛙はポピュラーな食材でスーパーの海鮮売りのガラスケースの中の人気者だ。亀も水槽に中でごそごそしている。買物に付いて来た子供が亀の頭を突ついて遊ぶ。日本の魚屋は切り身売りがほとんどだけど、中国の海鮮売場では魚は水槽で泳いでいる。

海鮮といっても日本でいう海で獲れる魚ではない。川魚だろうと池のタニシだろうと魚介類は全て海鮮なのだ。中華

料理には刺身も無ければ焼き魚もない。

食事の時、自分の前に取り皿や薬味を入れる小皿がないのも淋しい。又、中国人は食事中には水分を取らない。僕は茶水代わりにいつもビールを飲んでた。

湖南料理は水を飲まないと辛すぎて食べられないからだ。ビールは50円ぐらい。

水と変わらない値段である。冷えたビールを飲みたい時は給仕にビンダ！（氷的）と叫ぶ。でも返って来る答えはいつも没有「ありません」である。冷たいものだ。

この「没有」という中国語（メイヨウ）は会話の常用語である。

いろいろな状況で使用される。日本だところいう場合、たとえ無ても直裁的に「無い」とは言わない。かならず親切の尾ひれがつく。

中国人はおせっかいで親切というが、あれは好奇心から来るもので実際はそうでもない。公共心とか寛容とかいうものはまだ発展途上といえる。

ある日、機嫌がよかったのか「没有」のあと「冷やしたビールはないけど氷ならあるヨ。」といつも行く食堂の小姐が言った。「オウ！謝謝！オンザロック ビジョー イイネ」と大きな氷をいっぱい入れてもらい飲んだのはよかったけどその夜は五分置きのトイレ通いで散々な目にあつた。水道水で作った氷だったのだ。

● 親孝行

大石慶二（市口中友好協会企画部長）

日本語スピーチコンテストなどで自国と日本人学生との気質の違いをテーマにする出場者も多く、いつも興味深く彼らの話を聞いている。省都や沿岸部から来ている多くの留学生達の故郷は別に

て中国にはいま日本にいる学生が小さかった頃の生活水準がまだごく普通に存在する。湖南の日本語学校で教鞭をとった経験がある。殆んどの学生が将来の夢はと訊くと、金持ちになることだと答えた。

そして、歳をとったら故郷に帰り親孝行をして一緒に暮らしたい。だから今勉強して社長を目指すのだと、目を輝かせて答えた。今の日本で金持ちになって親孝行をしたいという学生を捜すのは至難、もしかしたら皆無かもしれない。自分の進学のために必死で働いてくれる親の姿をみる学生が少ないせいなのかも知れない。

しかし、貧しさの中で構築されている親子の絆が解き放された時、又、親たちが子供の学費が生活を圧迫しない程の生活水準に達した時、はたして今の中国の学生たちは親に対して今と同じ感情を持ち

続けるのだろうか。日本にいる留学生たちの生活レベルは低くはない。学生がバイトをするのは日本人学生も同じである。長沙で教えた学生達と彼らとはどこか違う。親しい留学生のことが耳に残る。「私は私、一生」

回しかない人生を自分の為に精一杯生きたいです。人はそれぞれ自分らしい生き方を考え、行動する権利があります。」帰国せずに人生のステージを日本に求め、就職し、結婚する留学生も少なくない。

急速な経済発展する中国。やがて景色が変わった時、今の彼らの一世代あと位にきつと来る豊かさの代償が気になる。高学歴の親たちが我が子に求めるものその子供たちが親に抱く気持ちは今とは変わっているだろう。「歳をとったら故郷で親と暮らしたい」目を輝かせて語ってくれた湖南の学生達の思いがいつまでも萎えないで欲しいと願う。

● 思ひこ 6月21日用

● 八期会

日中友好協会企画部長)

大石慶二（鹿児島市

玉龍の八回卒である。会員は現在、230名、緩やかに緩やかに減少を続ける。年会費2千円を送ってくる会友が150名、その全部に「八期通信」を送っている。A4サイズ8頁、総力ラー、毎年発行し15号を越えた。昨年の編集後記に書いた一節を書き写してみる。（八期通信を読んでも青春をなぞる仲間たちのシーンが多い。

古いアルバムからの写真の整理、押入れの奥に大事にしまっていた古手紙やノートを読み返す描写など。何となく感傷が伝わってくる。でも、ただの回想ならいいけど人生の整理などと、夢夢考えないよう願いたい。終着駅はまだまだ先なのだから。この頃物忘れがひどくなったと仲間が言う。ほくに言わずと、覚える努力をしてないのでと思う。「教室に通いだしたけど覚えられない。進歩がないから辞めようか」などと彼女は言う。でも、覚える努力だけでもボケ防止になっている。何も今更上達しなかったっていいじゃない。鮮明な地デジに根を張った大木のように釘づけになるよりはるかにいい。引きこもりや、三日坊主にならないように「見る、聞く」ではなく、脚を使って「見に行く、聞きに行く」努力を欲しい。悠々として、ちょっぴり急げ、をモットーに世間を渡ろうではないか。鬼も、病魔も恐れをなしてやり付くまい。二十年は外観さえ気にしなければ今と変わらず元気なものだ。何となく歳をとるのも平和でいいけれどまだ新しいシーンに身を置くことだって出来る。ひとりで行動するのに自信がなければ八期の仲間の輪に加わればいいだけのこと（八期会は今年10月に卒後50周年を迎える。再会の宴の翌日から大学しての屋久島登山が待っている。

「長沙市民は借金しても貯蓄はしません。」学院長の範例氏はなかなば自慢げに語ってくれた。平均給料、月1万8千円なのに長沙市には豪華な酒バーやカラオケ店がひしめく。昨今はサウナや超大型温泉センターも増えている。

ところで習慣なのか、彼らは浴場をすっぽんぼんで歩く。マナーの違いかなと思いい「女性も一緒ですか？」と発展的女子生徒に思い切って尋ねてみた「行ったことありませんから」とブイと横を向かれました。多分、スケベな先生と思われだに違いない。

身体は何で洗うのですか、と訊くと不思議そうに、「もちろん手で洗いますヨ」と範先生の答えが返って来た。中国で垢すりタオルやスポンジを販売したら儲けるかも、とその時考えたが何の事はない。自分の方が日本でタオルなしで洗っているではないか。

ホテルの中には洋式トイレのペーパーが便座の真後ろにあるところがあった。これには驚いた。「いったいどうやって紙をちぎるのだろう」「はじめに紙を切ってから座るのだろうか」そのとき、ぼくの左腕は五十肩の真っ只中だった。

長沙弁もわかりにくいが湖南人にはう行とナ行を反対に発音する人が多い。生徒に湖南出身者が多かったのでこの逆転発音にはてこずった。

「いろいろな大がいる」を「イノイノない、イヌ」と発音するからこんがらがってしまふ。生徒に「映画を観に行こうか」というと「ミノミノ」つまり観る観るが「見ぬ見ぬ」と否定に聞こえてしまふ。

半年の日本語教師体験は素晴らしい思い出だった。範例日本語学院は二百名の生徒がいる。二十歳前後の女生徒が殆んどだ。リタイアされた団塊世代のみなさんも半年ぐらいはこんな異文化交流にチャレンジしてみませんか。

最近知合う人の中にはぼくが美容室経営者で鹿児島で初の男性美容師だった事を知っている人は殆んどいない。

ネットで知合う県外の人には年齢まで不詳で通している。「あの頃」といっても年代を言わないと語れない程の年月

が経ってしまったのかも知れない。美容の道に入った時は大学の卒業面接の頃だった。「キミの家、美容院なの？」

想定外の就職先に教授の驚いた顔が今も目に浮かぶ。

新宿にあった真野美容学校の夜間部には男生徒は3人、内2人は家が美容室だった。鹿児島に帰って来ても男性に

髪を触られるのを躊躇する客もいた時代。カットも今のよう単独メニューではなく、パーマやカラーに付帯してい

てブローという技術もなかった。代わりに多かったのが「ときつけ」と言って前の日にセットした髪をそのまま逆毛

を立て直して結び直すメニューなどがあった。見習い中はフケ取り作業に明け暮れたそんな時代だった。

サスーンの時代の到来と共に美容室にも男性美容師が増え、一日の客数も150名を超える日もあり、40名余

りいたスタッフとさほど大きくないぼくの店は終日戦争さながら状態だった。やっтерることは大差ないのにすべてがカタカナ一色に変わっていき、美容師がハ

アスタリリストに婚礼部はブライダルサロンと名を変えていった。それでも死語にならない言葉がある。それは修行

や師匠という言葉。まだ美容はや

はり技術者の世界なのだとほっと胸をなでおろす。本来なら育った業界に何らかの恩返しをしなければなら

ない立場、と時に思う。でも、と自分に答える、「一緒に育った仲間たちがぼくの代

りに熱心に後進の指導に当たっているからいいか」と。

校正さん：いろいろとありがとうございました。 大石けいじ

●大石様 「思いつく」連載企画案

中国関係の話がメインで大丈夫だと思いますが、せっかくなら自己紹介も兼ねながら、国際交流や美容師のごと、同窓会のごと、天文館のごとなどにも話を広げると、より楽しい連載になると思います。以下、勝手に私が考えたイメージです。ほかにも話のテーマが広がってもいいと思います。

①「中国のごとがよかけ？」

中国の日本語学校で働いた経験、「映画を見に行く」の言い回しのエピソードを添えて、中国に興味を持ったきっかけを。

②男性美容師として

大石さんは鹿児島初の男性美容師だった、と聞いたことがあります。若いころ修行時代の話を一度聞いてみたかったです。いろいろ苦労があったと思います。今後、男性で美容師を志す人へのエールも。

③美しい鹿児島

ナカマチバルクであった「美しい桜島、美しい鹿児島」展。祁さんのために、プリントの手配など協力した経緯。祁さんがパネルをキレイにそうじしたり、大きな写真に差し替えたりしたエピソードも良かったです。作品のほか、タイトルにも胸を打たれました。

④春節の宴で

鹿大食堂で開かれた留学生たちの宴にて。留学生たちのエピソード、おもしろかったです。本人たちの了解が取れば、紹介できたらいいですね。「親密なお付き合いではないかも知れないが、これで一期一会になるかも知れない彼らの明るい、屈託ない笑顔を忘れることはないだろう」のシメがよかったです。

⑤同窓会ネタ

思わぬ出会いなど、何かいろいろ聞いたことがあるような気がします。卒業後何十年も経っているのに、付き合いを欠かさないのはなぜ？ 秘けつは？ 同窓

生との旅行エピソードなど。

⑥天文館いまむかし

昔の天文館をよく知っていらっしやるのではないのでしょうか。 今との違いなど、知りたいところ。通りの会の話題など。

⑦美容室のごと

時代の推移で、美容室を取り巻く状況もだいぶ変わったのではないのでしょうか。最近の傾向など、何かエピソードがあれば。

⑧若者事情

日本の若者事情、中国の若者事情と比較して。

⑨中国の西郷さん

黄興のごとを（簡単に紹介しながら）

⑩今後の目標など

連載を総括したお話でもよいかと思います。 よろしくご検討をお願いします。 有村美千代

●南日本新聞夕刊「思いつく」掲載 平成20年6月7日（金曜） 中国人の思いやり 大石慶一（市日中友好協会企画部長）

中年になってから中国で日本語教師を経験したほとんどの人が生徒達の自分に対する態度に感動する。「やさしさ」や「思いやり」を毎日シャワーのように浴びて来る前の日本の現状を嘆くのである。そして滞在日記の1日は決ま

って「今日もまた生徒に感謝！」で終る。本当にそうなのだろうか、中国を旅していると確かに関口知宏の「中国鉄道大紀行」のような世話好きな人々によくかわす。いつか硬寝台で乗合わせた土地の人に家に誘われ途中下車、「もしかして人違いを？」と錯覚しそうな歓待を受けたことがあった。

反面、たいていの街の路上には正視するのがつらい物乞いをする弱者たちを見かける。食堂などで時々そばに来て腕を差し出す子供なら、せめて五角の銭でも入れてあげるけど、地べたに身を投げ出している人を見ると目を背けて

通り過ぎるしか術がない。しかしほかに優しい生徒達はそんなとき冷たく言う「あ

の人達、本当は金持ちです」経済大国中国、やがてこういう光景も過去のものになるに違いない。それより気になるのは弱者に対するこの国の人々の心の問題。自分に関りのある人だけに注がれる愛はどこかひっかかる。秒読み段階に入った北京オリンピック、世界中から訪れる外国人観光客に愛国心あふれる中国人がどう応じるのか、アスリート達の競技ではなく市民レベルのぶつかりに身内が絡んだ時が心配だ。生徒と満員の路線バスに乗るといつも恥ずかしい思いをした「先生、ここが空きます」生徒が大声で叫ぶ、その席の前には座りたそうな腰の曲がった老人が立っていた。首を激しく横に振るべく顔の不思議そうにみる彼らの顔が今でも浮かんでくる。

●新人候補・・・この原稿は選挙中になるので没にしました。

注目している候補がひとりいた。当議員の過半数を超える団地や地域をバックにした候補でもない。もちろん所属政党を持たない無所属である。年も若くて肩書きもない。

選挙に必要といわれる「地盤・看板・カバン・経験」がすべてない候補である。選挙が始まったけどどこで活動をしているのか何も聞えてこない。自分も街に住んでいるので親しい候補が数名いる。所属団体のおす候補もいるけど彼の事務所が通勤途中に見えるのでいつも注目していた。失礼だが派手な候補者名文字看板もなければ名入りの旗も小さく見えた。気になってネットで調べてみたら次のように紹介されていた。かれは4年に一度開かれる知的発達障害者の世界的なスポーツ祭典「スペシャルオリンピックス(SO) 上海大会」に参加。7000人ノアスリートに4万人のボランティアという規模の大きさに忘れることの出来ない興奮を覚えた。夏季世界大会の日本代表バトミントンコーチとして参加(世界の6の力国・6のの名の選手が参加)その2週間の間24時間ずっと一緒に生活する中で技術はもちろんすべての点で世界のレベルの高さに刺激を受け、これからも地域の活動の向上に積極的に寄与する為にも議員となって広く市民の意識広めたい。

初めて接した知的発達障害のある子供たちと友人として共に歩みたい。と言う。彼の将来の目的は「生き方の違いが認められる社会、そんなルールから少し外れた若者たちにとって、希望の星になればいいんです。」「障害があっても気軽にスポ

ーツが楽しめる環境をつくるのが自分達の役割」と言う。

幾つかの公約(多選自粛・金をかけないコンパクトな選挙、スピーカー連呼をやめる)・・・

●タイトル 聖火リレー又は中国少数民族・・・この作品も個人名なのでぼつにしました。

丁雪輝さんのこと

丁雪輝さんは内モンゴルから来た留学生である。

4年前の「外国人日本語スピーチコンテスト」で特別賞の上海往復航空券を受賞した。

モンゴル族の煌びやかな民族衣装がよく似合っていた。当時まだ大学ではなく赤塚学園の生徒だった。現在、鹿大の2年生である。一昨年秋、内モンゴルの草原を馬で駆けてみたくなり雪輝さんに尋ねたら「フフホトには叔父さんがいます。また包頭は私の故郷です。いとこの金トンさんはとても良い人です。あなたは安心して草原にも砂漠にも行ってください。」行って驚いた。彼女の叔父さん(劉情)は巨万の富を持つ大事業者だった。フフホトには開発区に建設中のマンション群が数十棟あり、包頭(バオトウ)には中国全土に名の届いた薬品会社・工場を持っていた。包頭の人口は200万人、鉄鋼の町である。モンゴル語で「鹿のいる場所」中国語で「鹿城」と称され鹿児島と同じ鹿である。

金トンさんは社長の運転手とか、一人ともンゴル族である。滞在中、僕のお抱え運転手をしてくれたのである。彼女からは度々、国際電話が携帯にかかってきた。「今、どこにいますか?」中国に旅する日本人は少数民族(6の6ある)というと幾分哀れみの目で接する人が多い。今何かと話題になっているチベット族とモンゴル族も

●長沙に想う。

おおいしけい

あなたがもし、空調のよく効いた専用列車に乗って見知らぬ町や田舎や景勝地を旅していると思ったらん。

汽車から下りて街を歩いてみたい。見知らぬ人と話をして見たい。しばらく滞在

してみたい。いつもは見れない綺麗な景色を眺めてみたい。高い山に登ってみたい。いつもと違ったものに触れてみたい。

人は皆、そのような夢を抱いています。人は旅から帰ると大方は「やはり、我が家が一番だね。」と言いつつながら、今、行って来た旅の想いに耽るものです。

数パーセントかもしれないませんが、「このまま人生が終わるのを待っているのか?」と、他人が見たら、うらやましい環境に居ながら本人は今、単調に生きてるむなしさと、いくばくかのあせりを感じながら生きている人がいます。そして、ついにその夢を実現する人、夢のままむなしく人生を終える人、人生いろいろ、です。

「もう一度、自分の最後の我儘を実現してみたい。」と、我が友、竹下くんは長沙に赴きました。

何も、長沙でなくても、よかったです。中国は好きな国ですから、他国よりはよかったですと思います。

生活環境は彼の鹿児島のお宅や環境からすれば、はるかに過酷で貧しい生活かもしれません。でも、そんなことは、今の彼のとってさほど辛いことではありません。僕にしても、同じこと、あのヤオリンの貧弱な住いは決して快適ではありませんでしたが。

長沙のあの暑すぎ寒すぎの天気も、学校の生徒たちも、周りの人々も、華天旅行社の彼も、華程大酒店の部屋もホーイも、最高だった。

今、僕は愛車BMWで通勤している。店ではパソコンの前でキーボードを叩いたり、時々、お客様の髪をカットしたり、街なかだから、本屋に行ったり、会合があったり、そして時には家に帰り、風呂に入り、夕食を食べながら大型液晶テレビをソファに寄りかかりながら眺め、読書をしばらくして寝る。休みは庭の花や木の手入れや、買い物に付き合ったり、娘の家や、息子の家に行ったりして孫の相手をする。

たとえ楽でなくても、僕は中国に独り、住みたい。たとえ、誰も、看取ってくれる人が居なくても人生の最後は中国で終えたい。と言う夢は消せません。でも、それが実現するか、どうかは僕の運命に任すしかありません。運を自分で切り開くことはできません。

運が夢を導いてくれるのを願うことは出来ます。僕は心の中で、いつもそれを願

っています。

僕はあのヤオリンでの生活も決して悔いてはいませんでした。もっと、いいマンションに住みたかったのは事実です。今度、もしチャンスがあったら必ず良い部屋を借りたいと思つ。

僕と竹下くんとの大きな違いは、彼は、最後の我儘に現状を選び、僕は最後の我儘選びの為の準備に、長沙での生活体験をした。ということでしょうか。したがって、僕の旅はまだ続きます。

●『思つこ』原案 原稿 田中友好ついで。

しばらく前だが長沙市の対外友好協会を通してうちの協会会長あてに次のような文書が届いた。湖南省の油絵芸術家団体が日本で油絵の展示会をしたいが検討して欲しい、と。

「鹿児島市で長沙油絵画家による美術展を行いたい、できれば東京でも開催したい。会場費はそちらで負担。主催はそちらの団体をお願いする。訪日する人数は20名、滞在は五日間くらい、在日の費用はそちらが半分負担してほしい。」との内容だった。

早速、役員が集まったの緊急相談会の結果、「滞在経費の半額負担は無理な相談。また絵を販売するつもりなら公立の美術館は借れない」との回答を送った。「予定ではなく目的じゃないの」との意見もでた。

ほどなくFAXで返事が来た。「展示作品は1人5、6枚です。また額縁は持参すれば重量がかかるのでそちらで120個お借りしたい。額のサイズを教えて頂ければ、こちらではサイズに合わせて画を描けます。尚、展示最終日には作品を売る考えもあるので会場への連絡をよろしくお願いします。迷惑をかけますが大変感謝します。」

会長はストレートな断り方は失礼になるのではと「前向きに検討したいが現在は会場のめどがたちません」との返事を出しましょうか、と言つ。「それでは実施を前提に検討する、と解釈されませんか」「曖昧な表現は誤解のもとでは」などと議論が過ぎない。

もとより親中派の集まりである日中友好協会でも中国人の考え方については理

解に苦しむことが多い。昨年、友好都市締結25周年記念式典があったとき「文化交流より経済交流や旅行団を送り込んで欲しい。」つまり、花より実のある交流を強く望んでいる。そういう話があったらしい。

友好都市間の交流は益々進めて行かなければならないが今回のような利害がみえみえの友好は「遠慮願いたい」。

式典では両市の架け橋として努力された方々が「友好の使者」の称号や楯、委嘱状を戴いた。これは結果に対して戴いたもので、貰ったから提案を断れないでは困ってしまう。花を貰って実を求められなければよいが。

来鹿した中国交流団が別れ際によく言う大袈裟な「非常感謝！」と親しい朋友に言われる「謝謝！」の熱い言葉とはどこかちがう。 「こんな時、日本人の常識なら・・・」というくらい思いがいつも残る。

●『思つこと』原案 原稿 日本語教師してみませんか。 大石けいじ

長い人生には何ヶ所か停留所がある。何もじぶんで敷いた幹線を走るだけではつまらない。支線に乗り換える最後のチャンスは何時だろう。

停年を迎えこれから自分のために時間を使いたいと考えている人に絶対お勧めなのが短期滞在の中国での日本語教師体験である。

「面白そうだけと言葉も分からないし、大体、先生などしたこともない」答えは「実に愉しい体験です」。

日本が喋れて、本を読んであげることが出来たら合格です。生徒は二十歳前後の向学心に燃えた女性がほとんどです。

卒業したら現地の日本企業に就職します。日本語検定を取るのが目標の私立の専門学校です。

部屋は立派な宿舍が提供され、食事も提供されますが、ぼくは夜は自分で外食（５０円くらい）をしてました。長沙料理は辛いので有名ですが家庭料理店は言いさえすれば味加減は自由です。

こういう異文化体験は日本にいたら絶対に体験することはできない。週３日ほど休みをもらい週末には湖南地方の山村や、生徒の故郷へ案内してもらった。

大陸に自分の拠点を置き、そこから４日、５日の気ままな旅をすることも旅好きな

人ならたまらない楽しみである。汽車やバスの旅も安くて快適だ。見知らぬ土地にただ一人旅するのも得難い体験と思う。

●編集後記 大石けいじ

「はにかみ王子」なる新語がマスコミを賑わしていた。

はにかみの意味を調べてみると「恥ずかしがること」（広辞苑）とくらしいかでないが、はにかむという表情、態度は自分のとった善なる行動に対する照れ、ひかえめさの表れと思う。なんとなくどこかごしま人には「はにかみ

王子」が多いような気がする。ぼくの周りにもそんな人が多い。当然、八期仲間も例外でない。強いて自己流の解釈

をすれば、人間関係における「おもいやり屋」とぼくは解釈したい。▼ところで先頃、マスコミを騒がせた久間元防

衛大臣のあのひと言には考えさせられた「あれ《原爆投下》もしようがなかったのか」発言である。弁解してみた彼の

発言や表情にも腹がたつたが「九州人の口癖」とあんな場合に言われたくない。国の正義とはいっても身勝手なもの。

その為に善良なる市民が犠牲になってはならない。リーダーたる者は自国、他国、関係なく人類すべてに対しておもいやりの心を持ち続けてほしい。▼話を変える。

何が、と言っわけではないがこの頃『チョット違つんじゃないの』と思うことが多い。八期通信を読んでいても青春時代をなぞる仲間たちのシーンによく出くわす。ふるいアルバムから

の写真の整理に時を費やしたり、押入れの奥に大事にしまっておいた古手紙やノートを読み返したりなど。感傷が伝

わってくる。でも、ただの回想ならいいけど人生の整理などと、ゆめゆめ考えないよう願いたい。終着駅はまだはる

か先なのだから。▼この頃、物忘れがひどくなった、と仲間が言っ。僕に言わずと

覚える努力をしていないのではと思う。「〇〇教室に通っているけどどうも覚えなから辞めようかな」と彼女は言う。でも、覚える努力をして

いることは格好のポケ防止になっているのだ。何も上達しなくたっていいじゃない。写りの綺麗になった地デジ放送

を大型テレビの前で日がなポーツと眺めているよりはるかに良い。▼引きこもりや、三田坊主にならないように『見

る、聞く』『ではあ、ん、足を使って』『見に行く、聴きに行く』『欲しい。《悠々として、ちよっぴり 急げ》をセッター

に世間を渡ろうではないか。鬼も病魔も恐れをなして寄りつくまい。後、200年は外観さえ気にしなければ今と何も

変わらないで生きられる世の中。何となく年をとるのもいいけれど、まだまだ新しいシーンに身をおく事だとして出来

る。もし、独りで行動するのに自信がなければ安心・安全な仲間の輪に加わればよいだけのこと。そんな仲間のため

に「はにかみ元王子集団」八期会は存在する。

●南日本新聞夕刊「思つこと」平成20年5月2日（金曜）掲載

鳳凰古城

大石けいじ（鹿児島市日中友好協会企画部長）

画帳を開くと一条の河流が顔に当たり、横から見ると一幅の絵に、縦から眺めると詩一首にみえる。

鳳凰（ほうおう）古城を言葉で表現するのは難しい。黄山（こうざん）のように四絶と讃えられる水墨の世界でもなければ中国に30ある世界遺産に登録された名所旧跡や著名風景地でもない。

1980年に鳳凰出身の作家潘（しん）従文の小説「辺城」の映画化で一躍、一大観光地になった鳳凰古城。湖南（こなん）省の西部、貴州（きしゅう）省との境

にある交通不便な地にある。「長沙に行ったら是非、鳳凰だけは行かれたら」。どんなところですか？」と問い返すと彼らは一樣に口をつぐんだ。そのわけは実際に鳳凰大橋に立って始めて解けた。

一瞬にして自分がいまだ見た見たり等もない遙かむかしの中国の古街にタイムスリップしたような幻覚の世界に誘われる。目を閉じると河べりで女たちが衣服を叩く洗濯棒のパタパタ音や裸で水遊びをしている子供らの歓声がとびこる。

ゆったりと流れる沱江（たこう）を遊覧船に乗って下ると、ミャオ族の若い女性たちの歌う民謡が聞こえ陸に上がると3m幅の石畳の古街が地形に沿って迷路のように続いている。

耳をすますと遠い明代のさざめきが聞こえてきそうである。2日ほど、河畔に乗り出すように建っている吊脚楼といわれる民宿に泊った。

たおやかに流れる沱江、川に張り出すように軒を並べる高床式家屋、むかしと変わらぬミャオ族の営み、そのおりなす不思議な空間は旅人のこころを洗い流してくれる。

もし尋ねられたら「うまく言えないけど鳳凰に行ってみませんか」そんな答えしか言えない、そんな珠玉の観光地である。

●春節の夜宴

思つこと

特別篇

4月25日用

大石慶一

（市日中友好協会企画部長）

春節の宴に招かれるようになって五年になる。知合いの留学生も両手では数えられないくらいになった。自治組織である学友会の今年の会長はMくん。大連出身のY（だいいん）ケメンである。お人よしで、優しいと留学生の間で人気者だ。昨

年までの会長Sさんはチーパオのよく似合うぽっちゃり美人。彼女は春休みを故郷の天津で過ごす為今日はいない。瀋陽出身のDくんがニコニコしながら顔をみせた。学生部世話役を始めてすべからの協力者である。農学部なのに余り農業は好きでないという。よく家にご飯を食べに来た。日本企業に就職が決まった。これで国の奨学金も一人空きができる。彼はマイカーを持っていて中国からの視察団の案内をよくしてくれた。今夜もいろんな中国人留学生との再会に花が咲く。向うから挨拶に来る学生はまもなく日本を去る者が就職して県外に去る学生たちだ。

安徽農業大学のT教授も1年の交換研修を終えて合肥に帰る。昨年は協会の1日バ

スツアーで開門岳登山、阿蘇にも参加した。つい先日彼とはお別れドライブで長島の海岸路を走った。

安徽にはこんな美しい海はない。「一生の思い出です。」「感激のことはがうれしかった。

錦江湾に釣りに行き大鯛をゲットしたPクンも思い出を胸に青島に帰る。

「去年の開聞登山が一番の思い出です」と言ってくれた理工学部の人。春節の宵は留学生たちとの楽しい語らいの一夜だけと寂しい送別の夜でもある。かれらとの付き合いは日本人の友人達とのそれに較べると決して深い、親密なお付き合いではないかも知れないけど、これで一生会えないことになるかも知れない彼らの明るい、笑顔を一瞬忘れることはないだろう。

「思うこと」新執筆者

「思うこと」の執筆者が14日付から交代します。第百五十回の執筆陣で、次の六人の方々が隔日順に十週間担当します。

野からい	野からい	野からい	野からい	野からい	野からい
発信でき	発信でき	発信でき	発信でき	発信でき	発信でき
いと強	いと強	いと強	いと強	いと強	いと強
グート会	グート会	グート会	グート会	グート会	グート会
一市長は	一市長は	一市長は	一市長は	一市長は	一市長は
ら計約千五百人が当た	ら計約千五百人が当た	ら計約千五百人が当た	ら計約千五百人が当た	ら計約千五百人が当た	ら計約千五百人が当た
二台に加えて、警察署	二台に加えて、警察署	二台に加えて、警察署	二台に加えて、警察署	二台に加えて、警察署	二台に加えて、警察署
を訴えてきた。だからこ	を訴えてきた。だからこ	を訴えてきた。だからこ	を訴えてきた。だからこ	を訴えてきた。だからこ	を訴えてきた。だからこ
と成功を祈っている。	と成功を祈っている。	と成功を祈っている。	と成功を祈っている。	と成功を祈っている。	と成功を祈っている。

鹿児島市立図書館長 本田 善己さん 音楽クリエーター 小田 美幸さん
日本茶インストラクター 亀田 恭子さん 鹿児島市日中友好協会企画部長 大石 慶二さん
松し夢トモトウク理事長 丸田 真悟さん 介護ヘルパー 野見山 潔子さん

本由さん 亀田さん 丸田さん 小田さん 大石さん 野見山さん

ガソリン価格 エリアなどで販売するし、在庫分を保有してガソリンと軽油の上限値 いる高速道の給油所に 法定外税新設

縦書きA4版2段書式に書き換えます。令和元年5月18日。

第三章 人生のある時期の『日記帖』2002年?

平成14年です。ぼくの年齢は63歳です。

朝・穰くんファミリー来る。4人で松原神社に初詣。天気が良かったので二人で加治木の両親の墓と郡元のツネおばあちゃん、きよばっバンの墓参りを済ませます。

和香ファミリーが来る。外は雪。下の写真は美宇ちゃん

●祝全家新年快活! 身体健康 万事如意

●意 心年吉祥! 今年也多多指教。再! 村上久幸 明けましておめでとございませす。

●昨年は色々お世話になりました。今年も宜しくお願ひ します。



●同窓会からご無沙汰しております。ホームページを拝見しました。二回同窓会を楽しんだようでした。

●私も12月15日に長女がやっと結婚しました。夏から福岡の家の整理やら色々忙しいでした。それに加えて年末には風邪でダウン、一時良くなったのですが、今もう少しかな?数日したら全快かなと思います。

●小迫先生の言葉を思い出して もうでなくて まだ を実践していこうと思ひます。アニメーションカードを送ったら混雑で受け付けて貰えませんでした。年末に予約すべきでした。また後ほど挑戦します。どうぞよいお年をお迎えくださいませ 磨子

●年賀状とメールのカード、ダブルでありがとうございました。今ごろ初商で大忙しでしょうね。今年は山形屋が2日からで、たいへんですね。うちの母は2日になって、大喜びで買い物に出かけましたよ

●昨年は大晦日が夜勤だったので、そのまま徹夜で五ヶ瀬にスキーに行きました。雪山の初日の出(らしいもの)も、けっこうよかったですよ。大石ファミリーはどう

過ごされましたか？

それと、バリアフリーの写真の件、社内処理した結果、お代はいらなくなりそうです。よかったです！

それでは、すっかり寒いですが、おかせなどひかれませぬように。 有村美千代

1月2日1月3日1月4日

●大石さん：

お元気ですか、いいカードをもらいました。どうも ありがとうございます。

最近 仕事なくて、休みましたから、会社に来ないのです。だから、いつも 返事を遅くなりまして、気がしなご下れな。 お元気

小馬 1月9日

●久し振りで、おおひらです。

元気で頑張っているようです。現役で！

私もどうにか元気でやっています。

ゆっくりホームページ拝見させて頂きました。相変わらず君の几帳面が見えるようです。ヤーヤー君、入来祐作君、この前会ったので末富さん、それと種子田さんでしようか？

頭のきれいな人、あれバスケの渡辺君ですね、高橋紘子さんなどどう見ても前に戻りません。俺なんかどう見てもカヤの外になってしまいました。

あ、それと原田さんはヨーク解りました。あまり長くなることかと思えるので

今日はこの辺で！ 又メールします。 バイバイ。 1月12日

●返事が遅れて申し訳ありません。取材を兼ねて伺います。趣向などいろいろとお聞かせると思いますので、よろしくお願ひします。取り急ぎご連絡まで。

メールでの年賀状、お名前の漢字を間違えて送りました。すみません。 理子

----- Original Message -----

Sent: Friday, January 11, 2002 1:43 PM

Subject: 新年挨拶...**

● 本メールの件は、

1月3日12時～1月3日15時～16時の時の2回。

中町ベルクはカクの広場（ロッテリア前）ナヤ通りはカネマタ付近

照国通りは？証券前で「新春もちつき大会」を・・・

ベルクは700人分の「ぜんざい振る舞い」も行います。

遊び（食べに）きませんか？ おおいしけいじ。

1月12日

●大石先生

遅ればせながら、あけましておめでとごいねいます。

それから、すてきなe-cardありがとうございました。

実は、e-アニメーションcardをいただいたのは2度目ですがその後もう一度もらいましたが、それぞれ、音楽もアニメーションもさまざまで、楽しめますよね。私は、仕事でパソコンを使っていますので、家でメールしたりするのは、どうしても休日になります。なかなか自宅のパソコンを「楽しむ」という域には達していません。でも、我が家も再来週には、光ファイバーのブロードバンドが導入されますので、インターネットももっと快適に楽しめるようになります。

パソコンが古いマックなので、どんな感じになるか少し心配ですが、なんだかとても楽しみです。

メールアドレスも変更になりますので、またお知らせ致します。

御健康で良いお年でありますようお祈りしています。

理子

●大石先生新年好！

中国逗留は有多一个月、我心理有点担心因

听力和口不太好。有很高、有点、非常。

正在准备去中国的事情、天努力学、很忙。

祝の度、愉快的三峡旅游、一切都顺利、 村上 1月17日

●村上先生

・・・メール有難う、近づいてきましたネ。

心配しなくていいですよ。分からなうときは、筆談（ペンと紙があれば）

なんとかなるでしょう。といっても不安なのは、良く分かります。

頑張ってください。

ところで、生活が始まったら、ぜひ そちらの様子をデジカメで写してメールで送ってください。寮とか食堂とか、学習風景とか・・・すべてを僕が僕のホームページで公開紹介しましょう。

八期の仲間が羨ましがることでしょう。ぜひお願いします。 大石慶二 一月18日

●先日懐かしいメール有難う。

今、**米倉先生**と一緒に君のメールを見ています。

先生も元気で頑張っています。何を頑張っているのかは分かりませんが・・・とここで、入来裕作とは誰のことですか？

浜崎(ヤーヤー君)に君のメールを転送したら心配していましたよ。ショックならいいけど・・・というって。

又メールします。 大石慶二 一月16日

●大石様

お元気で活躍の事と思います。

大変ご無沙汰いたしておりますこと申し訳ございません。

この度は親父の誕生日にメールカードをお送り頂き厚く 御礼申し上げます。早速見せてやりたいと思います。

親父も92才になりましたが老いたとは言え元気で過ごして おります。

でも、最近はずいぶん出て行く事がおっくうと見えなかなか外へは出たがらなくなりまして。しかし天気の良い日は散歩を1時間ほど致します。

長生きを致す事はなかなか事ですね。

私も今年は年の始めから何かと忙しく致しております。

是非、今年は一度鹿児島島に帰る機会を作りたいと思っております、その節には一杯やらせて下さい。

大石さんからの暖かいメッセージ重ねて感謝申し上げます。

奥様にもくねくねも宜しくお伝え下さいませ。

益々の発展お祈り申し上げます。

一月26日 (株)グローバルユースビューロ

古木 康太郎

●このたびメールを。作りました。まだまだパソコンに慣れませぬ。一応アドレスをお送りします。先生のホームページも少し見ました。

y1.29@k7.dion.ne.jp 山本むつじより 一月26日

さむ子様

初メールおめでとう!!!

メール文から、貴女の打ってる様子が目に浮かびます。ところで年末は失礼しました。折角来てくれたのに充分なお相手も出来ず、お金まで頂戴してしまい悪かったですね。

ところで、メールアドレスの1.29は何の数ですか？パソコンもやりだすと結構おもしろくて、ストレスの解消にもなります。そのうち、さむ子さんも自分のホームページを作るようになるかもしれません。頑張ってください。

おおいしいじ。 一月27日

●古里さま

元気でやっていますか？

久々にホームページ見せてもらいました。お忙しいようで今年は未だ更新してないようで・・・僕の方、路面電車と八期SJJツアーをいじりました。あと西安・雲南・大理と中国ものを追加しました。ところで、秋(9〜10月頃)予定のSJJツアー2(中国の旅) 関西関係は参加如何でしょうか？

まだ具体化してませんが、もし希望があったら連絡ください。僕は3月26日より8日間「中国・三峡」に行きます。 大石けいじ。

PS/村上久幸君は3月から4ヶ月間中国に留学が決まったようです。

一月31日

●2月20日

元気でやっております。

信念は1月13日に6人の参加でパルメダールのクルージングを楽しみました。写真が出来たら送信します。ホームページの更改はなかなか進みません。

秋のツアーは休みが取れそうにありませんので今回は不参加と言つことにします。関西からの参加者は私はずかんでいませんで直接そちらに連絡したかたがありますか。

●こんばんは、陳 俊甫（陳豪）です。

霧島のご招待、ありがとうございました。

今回はスケートが一番印象的で、面白かったです。

大石さんはやっぱりすごいですね。90年代とは思えない滑りです。

何時までも元気にいらっしゃって下さい。

今度スケートに行くとき、ぜひ連れてって下さい。

また、デジカメのメモリをいただき、誠にありがとうございました。

これで、写真のサイズを気にせず思い存分に撮れるようになります。

ありがとうございました。

では、失礼いたします。

俊甫

●お元気ですか？博美君

ふと思いついて、と言つより何時かは・と思つていたのですが、昔の事を書きとめて置きたいと

思っていました。もしかして、自分の記憶が消えてしまうことも・まあ、ないとは思つけど。

実は我が人生に君なくしては語れないのです。

そこで、ストーリーを少し面白くする為迷惑な箇所があってもいけないので君の了解を得ておきたいと思ひます。

浜崎にチョット語ったら「いや、絶対反対やっつて」「書かんほうがいい」とのことでした。

ホームページに載せようと思うので、載せる前にFAXで原稿を送ってみます。

呼んでみてください。実際、小指の思い出はなるべく書くまいと思つています。

それより、君から見た「大石君との思い出」みたいなのが欲しいです。交互に載せながらストーリーを作っていければ最高と思つています。メールで結構ですから、ひとつ書いてみてくださいませんか？

2月10日

そのうち、坊さんも一緒に又、えびのに行こうなりました。

>その時はハオさんもコーチとして同行してもらおうなと思ってますのでよろしくお願ひいたします。

こちらこそ、そのうち、転ぶコーチとして、ぜひ連れてって下さい。

楽しみにしております。

健二さんの手は、写真に写ったときによるものでしょう。

しかも一回だけでなく何回も転んだからです。

ちなみに、鹿児島に戻ってから、自分の手のひらも書くなつていたことに気づき、びっくりしました。

今は、もう完全に治りました。次回は転ぶことなくスムーズに滑れるだろうと思ひます。

2月11日

●My dear Hiromi

了解しました。やめときまじょう。

実は君にだけ打ち明けたのだが、ぼくは3年の頃小林雅代という1つ年上の彼女がいた。

この頃、何故か、付き合ってた頃のいろいろなシーンを思い出す。そして、考えてみれば、

本当に僕は彼女に「いいかげんな付き合いしかしてあげなかった。ことに後悔してる。時間は帰ってこないのは分かっているけど。何故か、彼女に済まない気持ちでいっぱいだ。

もし、彼女に会えるなら、思い出ばなしと、詫びを言いたい。

もう、40年という時間が過ぎてしまった。

近い将来本当に中国に住みたいと思っっている。

いろいろ鹿児島島の50年間を思い返すこの頃です。

君との事を書こうと思っただのも、何も青春時代の遊びの告白をして「あの頃は無茶をしたよナ」

と言いたいわけではなく、僕の横にはいつも、君がいた。実際、書留めたかったのは、そんな、僕の想いでした。

そんな訳で、書き始めた最初の部分を送ります。いずれにしても書く過程でいろいろな人が出てくることになるので、君や浜崎君の忠告通り、発表は止めることにします。

一人だけで書き残したいと思っています。

君も気分が晴れてきて、もし、皆と語りたくなったら、ぜひ、八期の集まりにておいで。

ほくも集まりのリーダーというか、世話役みたいなことをしているけど、実際の当時の友は居ないので、昔話もいまちなが実情です。 まってますヨ。

大石慶二より。2002・2・12

●おはようございます。都城の武永です。

以前、先生へのメールを天文館のほうへ送っていることに気付きました。(すみませ

ん。)先生のホームページ凄いです。僕も挑戦しなくっちゃと思い、今夜からホームページ

ページビルダーの勉強会に出席します。いつ出来るかわかりませんが、最初はトップページと掲示板だけでも思っています。順次報告させていただきます。

今日は雨模様、先生は今頃海の上か、砂漠の空の下か、などと想像しています。モ

ンゴル移住計画も着々と進んでいるようですね。嬉しいです。

僕のほうは特別なこともありませんが、来年頃には高校の卒業が出来そうです。目標十年で始めた通信教育も今年八年目。学科の単位は取れているのですが出席日数の方が足りないののでついでに必修外のものも色々勉強している所です。卒業できた

ら次のステップを考えます。大学に行って『ヨーロッパ近代史』をやるのも楽しそ

うですし、僕の移住計画を立てるのも遅くはないかもしれません。

来月はグアテマラに行っている娘が帰国します。彼氏を連れてくるそうですから、簡単なスペイン語を今から練習中です。彼女は彼と一緒に東京で資金をためてヨーロッパの大学に行く計画を持っているようです。長男は去年大学院を卒業して日本

ユニシスという会社に就職しました。次女は東京でブータローしています。次男は仙台の東北大学の二年生に今年なります。美代子さんも今年53歳益々パワー全開

という感じですよ。皆、凄く楽しそうです。

近況報告でした。先生のHPちょいちょい覗きにいきます。ご家族の皆様によろしくお伝えください。アツ！野村船長にも・・・ 達哉。

●武永先生好久不見！！

お元気で何よりです。

息子さんが東北大学に在学してるんですって？

実は、僕の親しい友人、中国(西安)人で、陳豪(チエン ハオ)と言います。が、今年鹿児島大学を卒業して、4月から東北大学の博士課程に進むそうです。初めての土地で不安がっております。

よかったですら、力になっていただければ嬉しいですネ。北京の舞蹈大学でクラシック・バレエを習得した好青年です。

写真左端の人物。去る2・5に霧島・エビの高原にて撮影。私事、来月末から10

日ほど三国志の舞台 長江・三峡を旅してきます。

ホームページ目下製作中はMemories of child hood & youth です。尤も、目下僕のサーバーが工事中でUPされていません。2月17日

●おはようございます。起きぬけの爽やかな朝にマリリンちゃんは強烈です。

日曜日HP講習会に行っただのですが、しょっぱなから大失敗。サーバーとの接続方法を教えてもらいたかったのですが、講師(親友)がフォルダとファイルを先に理

解してからとぬかしやがるので途中退席。何も勉強できませんでした。例によって頭に来ないと行動しない私めは、月曜日にテキストを買いに行き猛然とお勉強しま

した。何もかも初めてですので、まだお見せするようなものではありませんが、ヨチヨチ歩きの状態を覗いてみてください。マリリンちゃんはおられません。こんにちは、陳 豪です。

「親切にお友達の息子さんを紹介していただき、誠にありがとうございました。初めての土地での友達は何よりの頼りです。」

仙台に行ったら必ず武永さんと連絡をとらせていただきます。

「好意、心から感謝いたします。」

東北大学大学院経済学研究科の入学試験は来月の13、14日の2日間ですので、只今、僕は合格を目指して毎日がんばっているところであります。

来月から、大石さんは三国志の舞台である長江・三峡を旅するそうですね。

良い思い出がいっぱいできるよう、心からお祈りいたします。

中国での旅の際に何が困ったことがありますたら、

どうぞ遠慮なくうちの両親に連絡してください。

恐らく力になれると思います。

お友達を紹介していただき、誠にありがとうございました。

では、ここで失礼いたします。

2月22日

この週間足らずに迫ってきましたね。

最後の準備でバタバタしてることでしょう。

それとも、天命を待つ心境にきてますか？

前回、あちらから届いたメールと今回の具体的な文書とではずいぶん待遇が違いますね。今回は先生として招待されるんですね。責任もあるけど、やりがいも生甲斐も、夢もありますね。僕も懂れます。

高い給料までもらって自分の勉強が出来るなんて素晴らしいことです。

話は急に変わりますが、昨日本屋で面白い本を見つけました知ってるかも、又既と呼んでるかも知れませんが、紹介します。

著者 小田 空(そら)

「中国 いかがですか？」

漫画本。

発売元 集英社 office YOU 特別編集

実はこの本がお勧めではないのです。同じ作者のシリーズが後2冊出てます。「上・下」で、その下のほうが、空さんが[経歴市](#)で中学の教師をした経歴本(漫画風)作者は小姐漫画家です。

貴方の参考になるのではないかと思いますので読んでなかつたら如何かと……. 仕事で、お客様に呼ばれましたので、失礼します。

どうぞ。よい旅を・祈念！収穫。2月23日

下記の情報有難うございます。

まだ読んでませんので、早速「紀伊国屋書店」(関東で一番の)へ問合せたところ、「コミックは扱ってないとの返事……残念！取り急ぎ御礼まで。村上久幸ご迷惑をおかけします。昨晚、友人からの添付メールが入っていたので、ウツカリ空けてしまいました。今朝、本人からウィルスのメールが行くかもとFAXが有り慌てています。私からの添付メールが送られてきていたら、ウィルスですので空けないでください。悪しからずお願いします。

2月24日

先生の趣味の広さと行動力には驚かされるばかりです。『気功』ですか……。すごく、興味あります。というか、本なんか買って読んで読んだりマクロピオテックを学んだりしました。僕のメル友で高校三年生の受験生が先日『元気があれば何でも出来るッ！』って書いてきました。これだなんて思いました。まさに先生ですね。みーちゃんかわいい。先生のじっちゃんぶりも……。連載。

2月28日

大石版ラスベガス&ロスアンゼルスの旅如何でしたか？

もう一つお勧めというか見て貰いたいサイトを紹介します。

けいじわーるど編集後記の下にある memories of child……をクリックして見て下さい。

僕のメモリー(回想記)を書き始めました。ボケないうちにとまって……今小学校編を終わろうとしています。長田中学校の思いではなかなか出てきません。皆さんに差しさわりのない文章にしたいと思っています2月28日

元気がよければいいよ。

1週間程前摩子ちゃん、桐原典子さん浜崎、南郷、みずえさん等と江戸っ子寿司で会食をしました。

僕のホームページ(トツページ)の編集後記の下にあるマイメモリーをクリックして下さい。僕の回顧録

を書き始めました。貴君のことは殆ど書きませんので、「心配なく。何か思い出す」懐かしいエピソード」など教えて貰えると有難いです。3月1日

●3月2日(土)

キグシ・サーカスが愈々、明日までです。何年か置きにやって来るサーカスですが、今年は何故か?胸が高鳴るのです。

空中ブランコ、玉籠の中を回転する3台のオートバイ、可愛い姉ちゃんたちの玉乗り思い浮かべるだけでワクワクします。

今日は運良く雨模様、店も暇です。スタッフが電車で行ったら、と言ってくれたので、決心しました。

満員の子供たちで席がありません。舞台袖からの観覧とあいました。

トランペットかトロンボーンで奏でる「美しき天然」はやっていませんでしたが、嬉しい一日を過ごせました。人生、これが最後の生サーカス観覧でしょう。

●3月3日(日)

松家憲吾くん美紀さんの結婚式がありました。

お父さんの松家(宏市議)さんが目に浮かびます。

世間ではいろいろ言う人もいましたが、僕にとっては頼れる(僕より若いけど)かけがえのない人でした。

彼が元気でいたら、もしかしたら、僕も美容界にもっと協力してたかも知れませんが。彼は夢を失わない人でした。北方謙三の「三国志」第八巻・水府の星 284

ページの後ろの3行を思い出します。

・・・曹操は目を閉じた。・・・

洵イクはどういう思いであつたらうか。怒りか、絶望か、諦念か、曹操に対する抗議か、それともまるで別の・・・、

支えきれないほどの人生のむなしさに襲われたのか。憲吾くんは心やさしい人に見える。新妻・美紀さんも、見たところ、優しい人のようだ。優しさこそ、何もの

にも勝る宝物とおもつ。

志半ばで去つたお父さんの分まで頑張つて欲しい。

●おはようございます。最近こちら付近で「KEEJ-WORLD」が話題です。特に韓国人の金さんは「モロ中国してる」と大喜び。人間味あふれる素敵な方でしょうね

、人格が出てますよね、と絶賛です。確かに「キヤル」と遊ぶ人間味あふれた方で、**キヤルシール**や**マリリン**ちゃんをベッタリ貼って楽しませてくれる素晴らしい人格の方ですよ。

とは・・・さすがに・・・言えねえよ。まあ、僕も己のキャバを広げるために**仕方なく**頑張ります。

先生のメールを開く時、つい周りを見回すようになった小心者の達哉より。

●3月4日かけて、**娘夫婦の愛犬「太郎と花子」**を預かりました。

黒の花子は盲導犬にもなる、頭のいい「ラブラドル」という犬らしいが、この花子は例外らしい。話し掛けると、一応、首をかしげるので、「オヤ、人間の口トバを解セルのかな?」と期待させるが、これが、全くの期待はずれ。生意気にも座ったり、仮眠したりする時は、必ずソファか、クッション・イスの上にはか座らない。

吼える時だけは「**びゅんびゅん**」と地の底から聞こえるような超低音を響かせる。

白茶の「太郎」は「**ゴルデン**ドリバー」とかいふ犬種?

らしいが、こちらは、まだ、ちょっとまじなようだ。

飼い主の娘夫婦が我が家に連れてきて「タロちゃん、ハナちゃん明日帰ってくるから大人しくしてるんです。」「

と、言つてドアを閉めて行つてしまつたら。タロくん(これは男犬です)は玄関から上がらずに「**びゅんびゅん**、

トコトコ」と鳴き続けていた。一方、頭のいい昔の花子は一目散に部屋の中へ突進!!!

神戸に住んでいる妹(前列右端)の長女夫婦が挨拶を兼ねて墓参りに帰つて来ました。兄弟3人にそれぞれの子供、そして、ついに孫まで入れての会食と相成りました。なにかと感慨深いものがあります。人生は「ところてん」かな?とか、フト思つてしまつたり。

三代目（孫）が一人前になる頃の会食写真はどんな写真になるのか？何人が「つまだされて」いるのか？

願えば、四列目にメンバーすべて残っていていければ幸いです。読みながらシャッド・・・シャッド・・・と言う所ばかりでジューボイなど君の手紙を読まない限り、一生僕の脳の皺から出てこなかっただろうな・・・そう思って次から次感心することはかりでした。

本日に久し振りに昔に返る事が出来ました。

感想が遅くなってごめんね・・・

大平より3月5日

●おはようございます。

昨日は掲示板へのご訪問ありがとうございました。（返信は掲示板にて）さっそく先生の日記拝見しました。交友の広さを感じしながら楽しめました。

更新した時には又教えて下さいネ。僕も「今日のたっちゃん」みたいな写真日記をアップしようかと思っていた時です。で参考になりました。また、デジカメも持っていないし不得意分野です。どうなるかわかりませんが色々考えてみます。美容のことに力を入れないで、豊かさややさしさ（優しいと思いやりの考察はまだやっていませんが）を視点にHPを作っていけたらいいなと思っています。HPのお師匠様よろしく。

あいかわらず、サロンでのカットマンが僕一人ですので、先生のお供で中国に連れて行ってもらうこともママならない状態です。でも昨日保険の更新で保険金が倍以上になったのを見ると確実に年令を重ねているんですね。考えていかなくっちゃと思います。動けるようになったらあちこち連れて行ってください。カットのお客様がお待ちですので稼ぎに行ってください。連載。3月9日（土）

お tatty さん、お褒め頂戴有難うございます。今、北方謙三の「三国志」ハルキ文庫を第九巻目を読んでいる最中です。

やっと、人物像が浮かんでき始めました。「やまこ」と「おもいやり」は僕の永遠のテーマです。「三国志」の登場人物の中にも、それらしい人を当てはめながら読んでいきます。写真めがけです。

●3月18日

気功教室に行ってきた。実は15日に風邪をひき、調子が悪かったのですが「**こんな時こそ気功がいいんだ!**」と独り思い込み、張り切って

受講。かねてより多く沢山の人の、気を入れて貰いました。体に気が充満してくるのが分りました。体がほてり、ポツポツとなってきます。（実は熱が出てきてたんでしょ） 帰りはいつものコースで西田温泉ゆき、そこで又たっぷり温熱を体に受け、ついにわが体温急上昇！38.0℃になり、手足にバイブレーションが走りた。これが悪寒 (okan) とごうんだなかねの体温三十五.0℃なので3度の上昇はかなりこたえる。

明日が連休なので一日寝ることにしよう。**気功師予備軍たちに気を入れてもらっている nujun・・・**

●3月20日大石先生：お元気ですか。

3/8北京まで学校の自家用車で運転手と英語の先生(外国語クラスの主任)が、李さん(宇都宮在住)の奥さんと迎えに来てくれて、赴任先のシン台市第三中学校の宿舎に来てから、一週間立ちました。生徒数は、高中也含めて約6000人、先生が約500人とのことですが、私のいるところは、初中の一角です。現在クラスを二クラス持っています。中一クラス(42人)と中二クラス(40人) アメリカから二十代の男の先生(英語)、イギリスからやはり二十代の女の先生が半年前に来ていて、部屋に挨拶にきました。 全国レベルで、外国語導入に積極的に取り組んでいる学校ということで、3/12には、政府関係者が来て校庭で、表彰式がありました。その日は「中国中央電視台」の取材があり、私の授業風景をカメラで撮影されました。英語のレベルが高く、部屋に訪ねて来る生徒は、ほとんど日常会話は話せます。パソコンの画面に言っていることを、入力させて理解したり、英語で理解したり、何とか意志の疎通をしています。食事に4回(学校で2回、政府(県)関係者と、李さんの家庭と)招待され今日やっとおちつきました。 以後は中国語のメールで送りますが、そちらからの送信は yayia123@vega.ocn.ne.jp お願いいたします。こちらからは china.yahood でワードを添付して送ります。 では又。 お元気で。村上

8日中国に独り日本語教師として赴任した友人の村上久幸君から第一報が届きました。

大石慶二



3月20日（水）

ジョー君の娘・ミウ姫も懇意今年から幼稚園生です。

園児予備軍として2年いましたから正確には3年目になります。

初めての制服が到着しました。

早速、通代おばあちゃんに見せるんだと喜喜として、我が家へやってきました。

僕の役割は例のごとく報道・記録制作・発送です。

●久幸先生

日本語教師就任おめでとうー！ととうとう、やりましたね。先日、古市庄八郎君からも貴方のこと書いたがきを貰いました。

中国での嬉しい、苦しい、嬉しい、悲しい、怖い腹たついろいろな経験を「友人Mの新興日本語教師」

日記」として僕の Keiworld で紹介したいのですが、時々、そんなつもりでメールをくださいませんか。く

3/14〜17日までの中文日記は意味はよく分かるのですが翻訳すると自分の主観が入りそうです。こちらのバージョンも続けてください。でも、可能なら僕の「掲示板」に直接メッセージをもらってもいいです。但し日文で、中国語は多分入力出来ないと思います。八期の仲間もきくと読んでくれると思うけど・・・

僕は29日出発します。のんびり川くだりです。そのうち、HPに載せますので、写真共々、見てください。

僕も年内にもう一度西安に単独旅行をして短期滞在の足がかりを作ろうと思っています。貴君の居所と西安はまあまあの距離ですから、行か来れば幸いです。頑張りってください。又愉しく便の待つては。

デジタルカメラ写真もよろしく。く

3月21日

●大石様：

ご無沙汰いたします。綺麗な風景を満喫しながら 体に気をつけて下さい、辛いものが食べなければ、無理にしないで、青菜になったら、私は心配していますよ。

ウルムチはだんだん暖かくなっていきます。今日はハイ豫氏になりました。去年の冬、雪があんまり多く降らなかったで、今年は多分もっと乾燥になるかもかもしれません、そうだったら、老衰し易くて、本当にはあさんになって、大石さんに再会したら、見知っているかしら。(笑い話だけ) 仕事も忙しくなってきました。四月の下旬天山南路の旅が決まられるそうです。

あなたの旅行の収穫をあつて教えもりますね。

春子(この名前どう)

●4月6日

ウルムチの馬 麗 春さんからメールが届きました。

三峡クルーズへの気遣いとウルムチの近況報告でしょうか。今、中国では、自分に日本語の名前を付けるのがナウいそうです。

僕、個人的には麗春のほうがいいです。あえて、日本名なら春美にしたいです。マーさんにメールしましょう。

●ご無沙汰しています。お元気ですか？

昨日、8日間の三峡の旅から帰って来ました。

成都から大足〜重慶〜三峡・長江を船で3日〜武漢〜上海がコースでした。今回は友人と二人で行きました。昨年より中国語が結構話せました。

レストランで、買い物で、知合った人たちと、積極的に会話しました。聞くのが難しいです。皆、速いです。

又、勉強します。馬さんと中文で会話するのが夢です。

春子もいいますが、僕個人的には、麗春のほうがずっと好きです。でも、あえて日本語名にするなら春子よりは、春美(はるみ)はいいんじゃないかなと思います。貴女は今度、日本人のツアーを案内ガイドする時、聞いてみたほうがいいですか。

今度の三峡ツアーは僕のホームページで書きますから是非みてください。他のページもnewの点滅はみてください。4月9日
馬サンに送ったメールです。

帰国(4月5日)後、早速、「三峡を旅する。」を書き始めました。どうぞ、聞いてみてください。まだまだ、続きます。

今日から社会保険センターで「中国語会話初級編」を受講。半年間の予定。

受講生30名ほどです。陳教室は5月からの予定です。

●4月8日

「気功・大林教室」第2回コースの始まりです。新しいメンバーが10人ほど入ったようです。一番の美人が見えませぬ。僕としてはチョット寂しい気持ち。

●4月10日

またまた太郎と花子が来た。朝6時にだ。

娘夫婦が神戸に出張だそう。

又ひと回り2匹ともサイズアップしている。花子はお気に入りの上に座る。

えらく静かに並んでいると思ったら、鼻の先にジャキーがあった。待てー!の状態だった。知らずに僕が「アレッ!!」と言った瞬間、「ヨシッ!!」と間違えたらしい。おりこう?太郎が**カバツ**と噛み付いた。負けじと花子も**カバツ!!**太郎にとられてしまうからだ。**クリックすると大きくなりま**
す。

なにしろ、写メールの経験がないまま、出発直前にデジカメを買って一夜漬けて教わりやっつと、メールの環境を日本語でも出来るよう

整えてもらいました。コンピュータとインターネットの環境を、2年前に整えた、学校なので、担当の技師も日本のパソコンは初めてらしく、香港と画面送付のやりとりして、小生の、パソコンを理解してもらいました。

初めての写メールです。中一の生徒が、訪ねて来た時のです。

6階建ての4階に小生の部屋があり、イギリスからの女教師(22才)は3階、アメリカからの男教師(24才)は2階です。幸いにして、小生の階は、女生徒で2



段ベッドの8人部屋が20数部屋ですので、若返った気分になります。80人の生徒が20人減りましたが、毎日楽しくやっています。さすが、大陸いいかげんで、今回の契約書に昨日サインさせられました。では、また。お元気で! 村上

●4月13日

北京近郊の市で中学の「日本語教師」を始めた友人の村上久幸君から来た近況報告です。彼からのメールは新しいサイで独立ページにしたいと思います。仮題「ニーハオ!ウオ・シィ・日本語先生」

大石 さん

久しぶりです。お元気ですか。素晴らしい旅をしましたね。中国語がだんだん上手になるそうですが、おめでと。きつと大石さんと中国語で会話チャンスがありますね。私のコースはかわられまして、コルラのコースをしました。部長は南疆の旅は苦しくて、男の方は良いと言いました。ウルムチは最近、気温が不安です。このまえ、風邪を引いて、注射して苦しかったです。やっとよくなりました。大石さんと「同病相怜」かしら。名前の方ですが、勝手に言うことですが、そんなに真面目に返事したと思わなくて、御迷惑をかけた。やはり麗春です。じゃあ、また4月15日



●馬 麗 春さんから。

先日お尋ねの件「大足の爆竹」は、ワイフのメモによると、観音菩薩の誕生日になっておりました。回答が遅くなっていますでお分りかもしれませんが、お知らせいたします。明日4月17日(水)14時からC委員会です。よろしくお願いたします

4月15日一緒に三峡を旅した菊池さん中振連事務局長から。

●鹿児島島の橋本です。

本日、添付ファイルのような写真を撮影いたしました。場所は高見橋電停です。ミラーが増設されているのがおわかり頂けると幸いです。

よろしければご自由にお使い下さい。なお、もっと高解像度をご希望でしたらメールでお知らせ下さい。

● 4月16日

路面電車をこよなく愛す、橋本様より。いつもありがとうございます。

● 4月16日

毎年今ごろになると、我が家のアプローチの羽衣ジャスマインがトてもいい匂いの花を咲かせてくれます。桃の花が終わり。エビネが可憐な花をつけ、シランの花も、一重のミニばら、ほけもまだ残り咲きしています。真っ赤だったもみじが段々緑色に変わってきてます。銀杏の木が小さな緑の葉をいっばいつけ始めました。昨日、天候不順のため久し

ぶりの離島釣りが中止。変わりに、買ってきていたコスモスとヒマワリの種をプランターに植え付けました。夕方から、映画「ロードオブ・リング」を観に行きました。

お久しぶりです。お元気ですか？

三峡クルーズに風邪をおしてのご旅行いかがでしたか？大いに楽しめましたか、それともダウンなさいましたか？。若さをほこる大石さん、風邪などなんのその楽しまれたことでしょうか。ところで、先日、平沢さんから中国旅行のことを聞いたのですが、具体化されたのですか？

大分前に、加納さんから中国旅行の日程がどうなっているの？との電話をもらったのですが、大石さんに電話がありましたか、日程がわかったら教えてあげてください。

この頃はパソコンはほこりをかぶっています。思い出したように開いています。

横山 磨子

4月20日

こんにちは ホームページを見せてもらいました。とても素晴らしい出来ばえにびっくりしました。沢山の写真で旅行の様子がよくわかりました。

八期会の中国旅行の件ですが 私も参加したいので詳細が決まりましたら連絡くださいよろしく お願いいたします。私もパソコンを息子に習いならメール打っています。

新名 義三



● 4月21日

大石先生

先日は素敵で雄大な中国の写真入りのメールありがとうございました。母は美容院へ行くくと大石先生の話ばかりしていて、中国のお話もうくらつかうっていましたので、写真がとても身近に感じました。楽しいご旅行だったようですね。

私は歴史に疎くて、特に中国史は高校の日以来大の苦手でしたので

中国にはあまり興味もなかったのですが、最近旅行に行った方の良い評判を聞くことも多く、いつか是非行ってみたいと思っています。中国史を学ぶことが先決のようですが・・・それに言葉は旅行を楽しむうえでもとても大切な要素ですので、中国語が少しでも通じるといいですね。中国は私にはまだ荷が重そうなので、大石先生を通じて、もっと身近なものになるといいです。

ただ、今一番行ってみたい国はベトナムなのです。

以前みた「ラマン」という映画がとても好きだったのとベトナムブームに影響されていることもあり。もちろん独特の文化に触れてみたいというのが一番の理由でしょうか。お風邪の具合はいかがですか。

わたしも実は風邪で3日も寝込んでいて、やっと体調が回復したところです。

関東地方は今春は特に寒暖の差が激しくて、桜はあつという間に終わってしまい、

もう初夏の陽気の日もあるぐらいです。ホームページはたまにのそいでいます。盛りだくさんの内容ですし、大石先生は良いご家族やお友達もたくさんいらして、お幸せですね。天文館でも時々お買い物したくなりました。

他に鹿児島に関しては、南日本新聞のホームページ内（Kyodo News）からもリンクできます。この桜島のは1分置きの映像は楽しめますね。

では今日はこの辺で、お元気です！



● 4月21日

ご無沙汰しております。陳です。

久しくメールを差し上げず失礼しておりますが、お元気ですか。

僕は仙台に着きもうすべ一ヶ月になりますが、

一度に借りたアパートは通学にあまりにも不便で、もう一度部屋探しをしました。

新学期や転勤の後でもあり、一週間で10件ほどの不動産屋さんを歩き回り、

ようやく自転車なら20分で学校に行けるアパートを見つけました。

今週の水曜日に引越しを済ましたそれに、昨日、僕はやっと自分の研究空間を手に入れ、インターネットをも接続しました。

それでさっそく大石さんに安否のご報告しないといけないと思い、このメールを差上げたのであります。安否のご報告が遅くて、誠に申し訳ございませんでした。

鹿児島に居たころ、僕兄弟がいろいろお世話になりました。

東北での友達を紹介していただいたり、霧島へ連れてくださったったり、東北大に合格したことで、お祝い金までいただきました。本当にありがとうございます。

一週間前に武永友哉からのメールが届きましたが、昨日、自分のパソコンがやっとインターネットにつながり、今日分かったばかりです。大石さんにメールを送ってからさっそく彼に返事を書くことと思います。

東北大学に合格し、これからも精一杯がんばっていききたいと思えます。どうかこれからもご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

また、僕の姉のことでありますが、たまにわがままところがあり、もし失礼に当たることがありましたら、どうかお許しください。

僕兄弟が離れ離れになり、ちょっと姉のことを心配しております。

彼女にとって、鹿児島で本当に相談になれるのは大石さんと大石さんの兄様、それに松間さんだけであります。どうかこれからも、姉のことをなにとぞよろしくお願

いします。

それでは、今日はここで失礼いたしますが、何かお役に立てることがございましたら、どうぞご指示してください。僕は必ず全力を尽くします。では、また。

4月28日

陳 豪氏より東北大学大学院入学しました。

添付の写真は、校庭に新しく設置されたものです。

「世界へシンタイ市を知らしめよう!」「世界へ目を開こう!」

「未来へ目を向けよう!」「教育の現代化へ!」などのキャッチフレーズが書いてあります。校内のあちこちにも、「文明開化」への目標がはりつけられました。「WTO加盟」後、全国的に世界への仲間入りに向けて活動始めた

みたいですよ。

ここは、田舎町(といっても、鹿児島市なみの町です)ですが、文明開化へ向け

て始動始めた感じですよ。平教員の3倍の給料をもらい、空調完備の部屋を準備され、こちらの物差しでいうと「破格の待遇」だそうです。

数日前には、校長と同伴で、共産党の副書記(シンタイ市の)に会い交流の輪を広げてゆくために、今後ともよろしく、ということになりました。

雨が非常に少ない、梅雨もない所なので、「ほこりっばい」町です。「どがすぐ濁き」日本にいる時の、4倍お茶を飲んでます。

自転車を買い、毎日30分先の公園へ行き、地元の人たちと、一緒に太極拳をして8時に学校へ帰るのが、日課です。何しろ、この町には、日本人は、私一人だけ、

ですので、珍しがられています、言葉は、ほとんどわかりませんが、かたことの中国語で何とか、楽しく暮らしています。

夜は、中一の女子学生が部屋に押しかけて来て、発音の先生になり、教えてもらってはいるのですが、なにしろ不器用で・・・なかなか、うまくなりません!

お元気で! 村上

4月27日中国で中学教師になった。村上君からの便りです。

5月3日

菊薫るる五月になりました。

今日は孫子のミウちゃんと兄の孫子の薫子(かおるこ)ちゃんが夕飯を一緒にしようと、我が家にやって来ました。

二人は久しぶりのご対面だったので、最初はしらじらしい雰囲気でしたがそのう

ち、慣れてきました。テレビ「むーみん」を観たり、結構、会話を弾んでいたようです。ちなみに、ミウは4歳にあと1ヶ月、薫子は2歳です。麗春さん、喀什の旅遊お帰りなさい！
カククリ湖はさぞ、美しかったことでしょう。



是非、写真をみたいです。貴女が前に写っていてバックにカククリ湖なら、天池の写真と一緒にです。

是非、デジカメで写してメールに貼り付けて送ってください。貴女からの中国語メールは僕のパソコンでよく見れます。エノンコードを簡体中国語に変換して見れます。

80%は訳せますが、2行目の「如く」までが？です。こんな意味でしょうか？

「貴方に暇があれば、私の間違いを直してくださいね」とも嬉しい「そのあとは、このところ、割りに忙しいので、暇を見てあなたのホームページを覗いています。・・・ですよね。」

5月12日

5月10日は次男おじさんの葬式の日でした。

若い頃は上海で憲兵隊長をしていました。阿久根に帰ってからは、果樹園や野菜づくり、海の魚、川の魚を飼ったり、ニワトリを数百羽、庭に放し飼いをし、広い家の周りの畑の到るところに卵が放置、夜になると庭の木の枝には白や赤、黒のニワトリの花が咲きます。椎茸菌を植えた古木が生垣に何十本もあり、馬鹿でかい椎茸が山ほど。牛や、豚や、やぎも飼い、・・・一体、次男おじさんの職業はなんだったんでしょう。



小学入学前の一年と、小中時代、毎夏、阿久根大島にキャンプに行くとき、必ず、おじさんの家、母の実家ですが、数日泊まっています。

10年前、突如、脑梗塞を患い、入退院を繰り返していました。母の姉妹がのっています。次男おじさんの中で、最後に、この世で元気だったおじさんでした。

僕の母が長女で次男伯父さんの奥様（富士子さま）が六女ですから、僕に、年齢的にも一番近いおじさんでした。

男の子のいない家でしたので、大石の家を継ぐために来たのでしょ。当然、僕には従兄弟、従姉妹が沢山いますが、次男おじさんは、それらの一族の長といえるかも知れません。

とても寂しい日でした。

もう50代、60代になった従兄弟たちと、後の藪、石垣は50年前、皆で遊んだ場所。5月13日
馬さん。からメールが来ました。

●大石さん

今晚は、中国語が本当に上手ですね。貴方の予想がとっても正しいです。そして、残念なことですが、デジカメは有りませんですから、写真を送ってあげません。ごめんなさい。

この前、トルファンの新しいブドウ溝に従弟（4歳近い）といっしょに行きました。

その所は果樹園ようですが、桑の木、杏の木、胡桃の木とブドウ棚があります。特に桑の実がもう熟して、白いものも有るし、紫や黒いものもあって、たくさん落ちて、木の下、全部、桑の泥になりました。私達は自分で桑を取って、その枝を揺す振って、その実は雨のように、頭と体に落ちました。従弟はすごく楽しかったですけど、ずっと彼を世話しましたから、ほんとに疲れました。

これから、おもしろい事があれば教えてください。中国語がもっと上手になるように頑張ってください。

●5月21日

久々の「離島釣り」でした。計画の度に天候に嫌われ今回やっとの決行でした。

メンバーは5名（平田氏、作田、他しギュラー）で、14日pm4:00鹿児島港を出航しました。（左写真）船は、隼人港から「かねまる」です。餌付きなると、何と言っても寝室（部屋）がいいのが最高です。行き返りの時間が6時間はか



かるので、疲れが違います。特に釣れない時の帰りは心身共にダメージが大きいですから、16号から20号のハリスにテックイむつ針又は সেই針を付けて狙いはカ
ンパチかしまあじです。

外海にしては、この日の波は錦江湾が波静かな時の如し、天気予報式に言えば「海上の波の高さは一メートルから一、五メートル。海上のレジャーは気を付けなくて良いでしょう。」と言ったところでしょうか。「こんな日はあまり芳しくないんです。」結局、結果は「まあ、まあ」とどちらかというと、欲求不満でしょうか？

写真のホタが数枚。大きいのでは「ふえふきタイ」が全部で10枚くらい、おきあじ（ひらべったいアジ）・・・この魚は大ききの割には引きが強く期待を裏切られる事が多かった。その他では馬鹿でかいさばに目玉の大きいめあじ（平田氏が異常に釣っていた。）

次回はそれぞれの魚を写真に撮ってきます。

以上、2002年初離島釣りの「芳しくない釣果報告」です。そろそろ、甌島沖のアカイカ釣りのシーズンが近づいてきました。楽しみですよ。

今回は帰港後にハブニングがありました。・・・疲れのド：ツト出る。キーワードは

「警察」「違反」「出頭」「3台」

去る5月10日の伯父の葬儀の後、従兄弟の東 洋紀君

から「ケイジさんの小さい頃の写真があるよ市じいさんによく似てます、送りますよっか?」「是非・・・昨日、大阪に住んでる洋紀（ひろのり）君から懐かしい写真が届きました。父が同盟通信の記者だった為。僕は生まれはソウル、育ちは北京と日本離れの生活でしたが、伯母さんの結婚式で母の実家・阿久根に帰った時の写真のようです。

左から、おじいちゃん、僕（多分2歳）おばあちゃん、志津子伯母さん、兄（4歳）母です。

この写真から5年後に日本は終戦を向かえ、僕はこの地へ戻ってきたことになりました。戻ってきてからの記憶はシッカリしています。おじいさん（市次郎）との会話も含め。

実はこのおじいさんが僕をいつも守ってくれている。という話を聞いたので、僕はその話を信じることにしました。

5月25日

小学5年の年時の恩師・米倉ノリ先生が来店しました。

べつに珍しいことはありません。大体、週一、二回は顔を見せます。尤も、隣の山形屋には毎日行くそうです。まあ、ついでに髪の手入れというか、顔見せに寄ってください、といったところでしょうか。

今日は「清水展」の帰りとかで、僕に「良いから行きなさい」と勧めに寄った、このことです。先生のお勧めは従うことにします。3時間後に僕は黎明館にいました。小学・高校のクラスメートの大平君に先生の元気な様子をメールで送るべくデジカメに撮りました。

本人が知らないうちに公表され怒られるかもしれませんが、まあいいでしょう。

心の大きい方ですから・・・

5月29日

八期の女性代表幹事の木村美子さんが髪のお手入れに来ました。18日の夕刊に教えているハワイアンフラ（普通フラダンスといいます）が彼女にいわすと絶対違つらしいのです。フラとはハワイ語で祈りや踊りと言う意味で、雨乞いなど自然崇拜の中から生まれた宗教的性格と、日常瀬活にある喜怒哀楽の表現という二つの要素がある。とのこと・・・南日本新聞の記事（美子嬢のコメントでしようが）から。フラは足でリズム、腰でアクセント、手で物語を表現する。「スエイ」「アミイ」「オニウ」の3つの腰の動きが基本とか?でも・・・

僕なんかは、やはり腰の動きだけにしか目がいかない。

「横揺れもいいが、何と言ってもダイナミックな縦ゆれがタマラン・・・」変質的観賞家といえる。

遠い昔、カイウラニホテルの野外ディナーで、目の前で観たフラの踊り（縦ゆれ）は今なお神秘的な太鼓の音と共に現役である。



中央ブルーのムウムウ(と言っただけでしょうか?)姿が木村老師(中国語で尊敬をこめて先生の意味です。)

の月になり、下界はワールドサッカー一色ですが、自分周りではそろそろエギ(仲間間ではイカ釣りの道具とすべわかる)の手入れと仕掛けの準備を梅雨中に済ますべく構想中。

店のスタッフが僕のデスクの前にコピーというメダカもどきを置いてくれた。

釣りの構想を練るにもってこいである。もっともヌタツフは癒し効果でおいてくれたのだろうか……どうも勉強不足で、いじるたびに、おかしくなるので帰国してよく教わり、写真は送ります。これもどうだか……?

帰りの切符を手配して、6/30に帰国することになりました。

最近、真夏日がつづき、ビールをのんで風寝をする日がつづいています。私の部屋は「空調完備」、

先生の独身寮は「蒸し風呂」、校内は扇風機、格差があり恐縮しています。

切符を手配したら、とたんに「日本の味」「日本の温泉」「日本の新鮮な空気」がなつかしくなりました。

いつも、楽しいたり感謝! 村上

最新中国入荷!!!

9月19日

2002FIFAワールドカップ日本、トルコに敗れる。

6月に入ってから、日本列島はワールドサッカー一色でした。僕もご多分にもれず、今回はすっかりサッカー通になりました。正直な所、オフサイドもあいまいで、ポランチというポジションが何処なのか?ハッキリしませんでした。

日本中の人が通になった。(TVで勉強させられた)6月だったのでではないでしょうか。

あと、一週間、決勝まで勉強というか、復習が続きます。



僕はTVを観ててひとつとも気になったことがあって、それは、インタビューの中で、トルコ人の老人が言った。

「トルコが勝つことになっているんだ。これは運命で決まっているんだから仕方ないでしょう。」「試合中、気になって仕方が有りませんでした。」「聞かなきゃよかった」と思っことでした。トルコってなにか、そんな発言がハマリそうな国のような気がするんです。(よく自分でも分りませんが)日本を代表する二人中田(左)と小野(右)

6月28日(金)

あつという間に(?)6月が過ぎようとしています。

カレンターを覗いて見ますと、商店街関係の会合が4回ほど、法事とか、ファミリ一会食が3回位、中国語や気功レッススが数回、ほとんどいつも月と変わらない僕の風景です。

おっと忘れていました、大事なことを、「観戦」EFAワールドサッカー」です。明日、明後日がクライマックスです。

ご多分にもれず、すっかり学習させられました。正直なところ、もう解説は食傷気味です。ところで、愚息(一般的に、日本ではこういう言葉を使う)の横ジョーが6月29日(土)に美容室RIZZをリニューアル移転オープン

ます。

初めての開業から2年足らずのリニューアルは僕から見るとチョット冒険のようですが、最初が狭いサロンでしたので、もっと広いところでスタートしておけば……あと2、3年はいけたのでは、と思ったりしますが、いろいろな考え方があるでしょう。

要は、本人たちの決断と実行あるのみです。

新サロンは鹿児島島の街の表通りとも言える照国通りの中程にある。新しいファッションビルの4階(フロア面積およそ50坪くらい)です。明るく、広い、ゆったりがキーワードでしょうか?



東京の師匠・金井 豊氏ホームページの指導のお陰で、月並みな言い方ですが感謝しています。

奥行き約50m・幅15m（フロント含む）

セット面10・シャンプー5台のゆったり設計

表、前面ガラス。

7月1日（月）夜 黒島釣行

初めて黒島に船釣りに行きました。

船は「福寿丸」串木野 <http://www4.synapse.ne.jp/fukujumaru/> へ。

仲間の高木氏がよく利用している船です。彼曰く、

「とにかく、船長が、釣らせてあげよう」と、一生懸命

なのがいいのよネ」「餌は勿論、錘も忘れたりしても準備してあるし、いろいろかゆいところには気を付けてくれる」と、いつも、ヘタ誓めの船です。

ただ、串木野まで走って（車で）それから、離島・

黒島まで、3時間というのが、チョットきついかないという理由で、鹿児島港まで迎えに来てくれる「かねまる」隼人を使つての竹島・硫黄島ばかりでした。

先日、南九州高速自動車道が市来までのびて鹿児島く市来間が20分チョットで行けるようになり、後、串木野までは10分足らず、すごく近くなりました。

わかな（尾長クロ）・カンパチ釣りもいいかなと作田キャンプ以下「釣メンメムンバー」での釣行となりました。

6月計画していた釣行が天候不順のため、すべて駄目になり。今度も今日しかいい日はない（明日から台風接近）という状況での出発でした。

結果から先に言つと、90%満足の釣行だったと言えます。あとの10%は大物とは言いませんが、カンパチをもう少し釣れたかった。しまあじの顔も見なかったの、欲張り100%でしようか？



2キロ弱のカンパチをカツラギさんと、僕が上げました。朝方、明るくなりかけた頃、まず、カツラギさんの竿にきました。「キビナ」にきたよ」との一声に、みな慌てて、「船長！キビナ」にきたよ」とでも、あとは僕が一匹上げたただけでした。それでも、

5人で、わかなの3〜4キロサイズを30枚ぐらいと、ほたてを15枚ぐらい、あと、いろいろ、30位釣りました。

僕の釣り上げたシーンも一応、他のメンバーに写して貰ったのですがカメラに慣れていないのか全部ピンボケでした。

つり師は皆、器用と思うのですが・・・残念！

三人スナップの右端は船長・大久保さん、僕の後方は黒島です。

八期会の皆様！ー書いてますネ。暑中お見舞い申し上げます。

バテないように頑張ってますか？鹿児島島の夏が始まりました。



15、16日は「照国神社」の六月灯です。若き頃、テレビ喫茶のジュークボックスに10円入れて聞いたロックンロール。珍しかったソフトクリームの味。格好はといえば、サックドレスにマンボスボン。

・・・思い出しませんか？ 20日は、「おきおんさー」です。アイスキャンデーをなめながら観た仮装ぐるま。ほくは「エイパイヤ」の美女パレードがお目当てでした。（ませたのかナ）

さて、21日は玉龍同窓会です。例年8月8日でしたが、今年は変わりました。間違わないようお知らせします。会費は当日で結構です。7時からです。

八期会の総会・懇親会も続いて行つて予定です。行ってきましたヨ。初イカ釣りに・・・くわしい釣り日記は別サイト

「2002釣りバカ日記」をご覧下さいこの日100匹の大台をあげた釣るるん会のイカ隊長高木さんの一匹目。

7月20日（土）海の日。日は「おきおんさー」でした。梅雨明け宣言はできていないけど空はもう夏空に変わりました。

クリックして見ましょ。つる顔に出遭えます。

7月27日(土)

玉龍高校全校同窓会八期会総会毎年8月8日に行われる玉龍高校の同窓会が今年は7月27日に開催されました。

今年の当番幹事は17期生です。我々が当番をしてから早いものでもう9年が過ぎました。

今年は東京から1組の西山和宏くんが初参加でした。

彼はノンフィクション作家です。数冊のベストセラーを出しています。今回も発売前、部屋に遊びにきたそうです。全然憶えています。僕が東京の網島に大平くんと同居していた頃、部屋に遊びにきたそうです。全然憶えています。

詳しい情報は八期会のサイトで・・・西山和宏くんと新刊本。

7月29日(月)

久しぶりで秋目釣行(釣るるん作田組)でした。

マー坊こと今城雅彦くんが第三宮丸の船長になったので皆で行こう行こうと言いながら今日になってしまいました。詳しい釣り紀行(日記)は別サイト「2002釣りバカ日記」で紹介します。トップページから飛んでください。

きょういちの釣果を一枚だけ紹介します。

釣ったアカイカの泳がせ仕掛けにきたアラです。

釣り人はかつらぎさん。

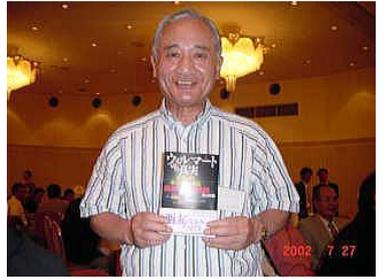
8月22日(木)

恒例のワイワイパーティ002がありました。中町ベルクの店主・従業員一緒に過ぎ行く夏を惜しむ集い

今年で100何回目になります。

今年は160名の参加者がビールを飲みながらゲームやアトラクションを楽しみました。最後は恒例・ビックリ抽選会があり、今年のビッグ賞、賞金三万円はカネシンの

新内 勝彦さんが当たりました。



また、今年のラッキーボーイは二見屋の山崎 真クンのご子息でした。ジャンケンゲームで優勝・2万円近くを獲得。さらに抽選会で山形屋特別賞・自転車を当てました。

アトラクションの華はビール一気のみ大会女性部門でしょうか？ 我が美千代代表・重信さんは惜しくも1秒ぐらいの差で隣のソーホワットの？さんに敗れました。写真上の手を上げている人が優勝者で、その隣奥が我が代表重信留美。残念賞を兼ねて、吉川さん、笹峰さん4人で天文館にカラオケのはしごに行きました。

我が友古川順一夫妻と内山和子様・森氏と吉川氏・笹峰さん

末広さんのお嬢さん恭子さんと重信さん

8月24日(土) 鹿兒島サマーナイト大花火大会 北埠頭

残暑？お見舞い申しあげます。

どんな夏をすごされましたか？

今年も又 鹿兒島の夏の終わりを告げる錦江湾サマーナイト花火大会が昨夜開催されました。

今年は3回目で、三ヶ所の発射台から打ち上げられ、どの花火を見ればいいのか迷うほど 大パノラマの迫力に 圧倒されました。

今年は 午前中の雨もすっかり上がり(昨年は豪雨に見舞われた) 満天の？星空のもと(チョット、美文すぎ) 心ゆくまで過ぎ行く夏を 満喫しました。

直径600メートルの三尺花火は カメラをはみ出してしまいましたので、一尺を連発を

ほんの しばしの時間(たぶん60秒ぐらい) ムービーでご覧下さい。

どうぞ、心身ともに 実りある秋を お迎えください。

僕はもう少し夏の夜のお仕事が残っています



▼中国語を習っていて思うことは反語(否定)の使い方である。「好きですか?」という問い、日本では「嫌いです」と答えるけど、中国では「不好」つまり「好きじゃない」と応える。

これは、同じようで、全くニュアンスが違う。つまり許容範囲の問題で、食べ物で喻えると、「食べられない訳じゃないけど、食べたくない」そんな感じだろうか。習い始めの頃、文法が簡単なので、中国語は発展途上語なのかナと思ったけど。今はこのころの大きさの違いだと思っている。▼「下で下リママやバラエティ番組を見ていると、司会者や出演者がこの頃、気になる。好みがはっきりしてきて固有名詞を見ただけで、見たくない番組が増えてきた。そのうち歴史ものか、スポーツ番組以外は見なくなるのではと心配になっていく。

そういえば最近、最小単位の間でも、会話が途切れがちである。思っている通り声に出すと喧嘩になりにかねないので、つつい、無声音で返事をしてしまう。「不好ブハオ、不好ブハオ」とつぶやきがもれる。「あなた何か言いました?」「いや、中国語の勉強中です・・・」と慌てて「マカしてしまっ」ことが度々である年輪と、このころの大きさは比例しないのだろうか?研究テーマが又一つ増えた。

▼話は変わるが、今年はなぜか台風の多い年だった。その言えは、僕等の肉体も、いつ暴風圏内に入ってもおかしくない年になってきた。「ある日突然」、におびえるのは大袈裟かもしれないが、先日、くちびるが心なしに痺れるような、乾きを感じた。理由を探したが心あたりがない。独り、思い悩んでいるうち、ある朝、舌に痺れがきた。「もうお終いだ!」と思った瞬間、目が覚めた。夢だった。

知り合いの医者に「こんな症状はなにかのサインじゃないですかね」と尋ねてみた。医者の返事は単純だった。「リップスティックでもつけてみたら?」で終わった。

「あるある大辞典」という番組で、60歳以上の人は殆どが歯肉症で、放っていたら大変なことになると聞き、早速始めた歯ぐき磨きのせいだと分り、止めたら治った。



▼「なった時はなった時サ」「開き直ったら何も怖いものはないよ。」と言っ人もいるけど、台風に見舞われた、釣りにも行けない。収まるのを家でじっと待つばかり、だから、「僕が行ける時は一週連続でも行くことしてるサ」

我が釣友の言葉が耳に残る。

9月6日(金)

注:中国語で「好き」は本当は喜歡(シイファン)といいます。従って、本当はこの文では、「好」「不好」は「喜歡」「不喜歡」が正しいのです。が、雰囲気から好の字を使ったかったのでそうしました。好(ハオ)は本当の意味は「よい」という意味です。

9月6日(金)

●年をとると人は寛容になるのだろうか、それとも頑固になるのか・・・僕の場合は前者のような気がする。

カミさん曰く、「貴男のは、ただ無関心なだけじゃない・・・」つまり、自分以外のことには、「他人ごと」と言いたいらしい。

寛容といえは、この頃、自分の許容範囲が随分と広がった気がする。

わかり易く、たとえを女性にとると、美人の幅がすっかり広がった。つまり、簡単に言えば、若い女が皆美人に見える。あの頃は、顔が好みでないと全て×だったけど、今は違う。何故か、視線が垂直移動を繰り返すのだ。

今年も月に中国の西域を旅してきた。例の極楽トリオにプラスいで・・・鳴砂山で見た、砂漠に沈む夕日の美しさに息を呑んだけど、それにも増して、可愛い小姐(シャウジヨ)には、いつも見とれてしまう。

そんな小姐に、「ニー・是・色狼(スーラン)」と言われ、正確に言うと、書かれ心を見透かされたかと、一瞬、ギクっとしたが、いい男の意味だと言われ、ほっとした。帰ってから、中国語会話を教えてもらっている陳さん(若い女性)が言うには、「ス、サン、アンタ、ナニシタノ、コノイミ、シットオリタヨ。」
咎めるような彼女の結構、流暢な日本語に一瞬だじろいだ。

●話は変わるが、「そのうち」と思っているうちに過ぎてしまおうのが賞味期限。定年を過ぎてからの賞味期限は一体どれくらいだろうか。

たかだか、十年〜十五年というところだろうか。まずは、自分自身のために、次に、リラティブな他人のために、このおいしい時期を使いたい。

●粗い考え方もしれないけど、期限後は、老けようと、病に倒れようと、そのは運命、宿命と諦める。「僕らには、老中はあるっても、老後の楽しみはない」と言ったら、ひんしゅくを買ったらどうか。

●個々のシテューションは違うけど、それぞれの、それぞれに合った時間割を作る時が来ている。苦手科目はあの世への宿題にして、今は、胸トキメク科目だけの時間割をすく作ろう！。

同じ夕日を眺めるなら、四角いテレビの中よりも、視野イッパイの砂漠や、

海原遥か、眼鏡なしで眺めたいもの。高校時代の四当五落の経験を生かすラストチャンスがきている。残された時間（トキ）は短い。

・2001/8/31

発行 「八期通信・編集後記」より。

昨年の編集後記も並べてみます9月7日（土）

友人の陳豪俊甫（chenjun fupun）からメールが届きました。以下。お久しぶりです。陳俊甫（陳豪）です。

お元気ですか。

僕は8月2日から8月17日まで約2週間の北海道一人旅へ出ました。北海道は本当にいいところですよ。

北海道の人は親切だし、食べ物もおいしだし、冬の寒ささえなければ、本気で住みたいです！

今回は苫小牧で上陸し、そこから自転車で日本の最北端（稚内―宗谷岬）までたどる着への挑戦してみました。



ちょっと疲れましたが、目的地に到着したとき本当に感激しました。それに、今回は旅館に宿らず、殆どキャンプ場でテントを張って生活しました。最初の日は寂しかったけど、二日から次々と友たちができて充実した日々をすごしました。

さて、今回デジタルカメラでたくさん写真を撮りましたが、ダウンロードの關係で写真を厳選した上、サイズを縮小して遅らせていただきます。写真の説明(上) 宗谷岬に行く途中 65kmくらいの間、案内板以外、電柱などないところですよ。(中) キャンプ初日(若見沢)真ん中、一番小さいのは僕です。

●陳豪さんへの僕の返事。

元気で何よりです。僕も元気です。

愉しかった様子が写真からよく伺えます。実は、日本人なのに、僕はまだ北海道を知りません。

何度か機会があったのですが、未だ果たせていません。

だから、豪さんが「現在、北海道旅遊中」

の話をお姉さまに聞いたとき、「イイなあ、いいな」と羨ましく思いました。

北にいるうちに、行ける所は万難を排してでも行くことを勧めます。の友人を見つけ、チャンスを作るのです。おしきせのツアーでない旅ができるのは今のうちです。

勉強は身につくものですが、想い出にはなりません。旅は思い出として、脳のフィルムに残ります。体験と想像は全くべつものです。

「越々」の部分の方は賣方で考えてください。いろいろが見つかったらにおしえてください。

スミマセン！左端の写真だけサムネイルに失敗しました。

9月15日〜16日 福岡玉龍会と八期会そしてライオンキング観劇。

玉龍八期の仲間と福岡玉龍会への参加と皆との交流、そして、折角このことで、人気ミュージカル、劇団四季のライオンキングを観に出かけました。

上は15日の写真ですが、翌16日はものすごい豪雨になりました。

この会の詳しいことは八期サイトを見てください。

9月26日(木) 太陽の里訪問(伊集院)

2002年バリアフリー天文館の開催打ち合わせのため、伊集院の授産・療護施設「太陽の里」を訪問しました。

平岡中振連理事長、樋口氏、菊池事務局長、に僕。太陽の里からは佐田京子理事長、末吉授産施設代表、瀬戸山療護施設代表、事務長でした。

もう一つの目的は、施設にいる北迫正治さんが絵画集「花と、詩と」第三集の発刊祝いを言う為でした。

1年ぶりの再会ですが、ひと回り顔が引き締まって、とても元気そうでした。

9月28日(土)

北迫正治さんからおはがきが届きました。

大石先生

この度は、もったいないお気持ちを本当に有難うございました。お元気そうで何よりです。素晴らしいホームページは拝見させて頂きました。さすがに凄い凄い光栄です。これからも無理なく頑張ってくださいね。

いつもお気持ち嬉しいです。心からお礼申し上げます。また、励みにして頑張ります。ご配慮は有難い限りです。

やっと第三集にこぎつけました。すぐにサインいたしますね。

これからもご好意にお応え出来るよう水彩画中心で、例え、無意味でも身体のため次の第四集を目指してコツコツやります。

どうか、ご自愛の上、何よりお体優先でお過ごしください。

心から御礼まで

北迫正治



10月8日(火)

「チ」があがってるよ!」高木(名)名人の電話にのって、最初の昼釣りに出かけました。場所は甕島沖。イカ釣りポイントよりはかなり沖の釣り場です。深さは85〜90mです。

鍾は1500といったところでした。結構、流れが強いようです。

結果(釣果)は芳しくありませんでした。僕の場合は言っておきます。

何故なら、後ろの方で釣っていた人は、船板をバチバチと飛び跳ねる

魚の音が途切れることが無いようでした。

たまりかねて聞きに行きました。「底から何mですか?」「8mばっかじゃん」と

ナ」「嘘じゃナカバッテン、見とけば・・・今、落としてるバッテン」仕方なしに見てました。CP500のレバーが底から8m巻き上がる。

「ここで直ぐ反応があるバッテンな」「あれ、おかしかナ、すぐピクピクくるじゃけん」と「そりゃそうでしょう。僕の撒き餌が流れてないバッテン」まあ、そんな

こんなで、彼のクローラーは満杯、バケツもタの尻尾がフラダンスをしてました。ほくのバケツは洗濯機の水だけが回転してました。要するに僕の釣果は写真の通り。

相棒たような(はるかに僕よりは多かったけど)彼にしては、ボヤキが出ていました。



昨年(2016年)11月26日に喜寿(77歳)を迎えました。

記念に何かぼくの孫へみうちちゃん・一人くん・絵里香ちゃん そしてまだ見ぬぼくの曾孫たちのために、爺ちゃん、ひいじいちゃん(たちの為にこの頃の風景を書き残しておきたいとキーを叩き始めました。

まだ本格的には書き始めませんが 今日(2017年3月1日(水)曜日)です。午前中は大竹勝さんの為に「大竹マサルの長沙日本語教師日記」の「ピー化を終え、11時55分から始まる映画『ララランド』を近くの天文館シネパラに観てきました。

何日か前、(1週間はたっていないと思う)オプシァミスミに一人くんが本を買いに行くというので一緒について行って4年ぶり?かで出版された村上春樹の長編小説『騎士団長殺し』上下を買った。値段はともかく単行本の表紙の硬さが嫌いだけで文庫本までは待ちきれないので購入、さっそく読み始めた。

前作の『色彩を持たない多崎つぐると、彼の巡礼の年』も偶然にも同じ書店での購入だった。その単行本は崎元雄幸



くんを送ってあげた。新作の横に僕の大好きな文庫本になった『つぐる・』が積んであったのでまた読み直そうかと、一瞬迷ったけど躊躇した。なにしろ、いま、宮城谷昌光の『三国志12巻』の12巻目を読み始めたばかりなので、この『騎士団長殺し』と、それに、世間を今騒がせている3つの事件を特集した週間文春を読まなければならぬ。

三つの事件とは何か、曾孫のために書き残しておく、1番目は北朝鮮の金正日の長男**金正男**を腹違いの弟である**金正恩**委員長(33歳)が暗殺(マレーシアのクアラ Lumpur プール空港で白昼、若い女2人を使って)した事件。サスペンスドラマよりおもしろい。

次は、東京築地の魚市場を豊洲に移転するいざこざ(豊洲の土地が汚染されている)に、前東京都知事の石原慎太郎氏がかかっていたそのやり取りと東京オリンピックに絡んで小池百合子現東京都知事と議会で、森オリンピック組織委員会らとのバトル。

3つ目はアメリカ新大統領トランプ氏にからむ世界の情勢。まあ、朝、昼のテレビ番組はTBSの「ひるおび」KYTの「ミヤネ屋」までその騒がしさは半端ではありませぬ。そういつ、ぼくも録画して布団に入ってから2時間は「マーシャルを飛ばしながら観ています。おかげでBGMを聴きながら三国志や村上春樹の世界に入っていく時間を奪われているこの頃です。

おまけにこのひと月、孫二人がガーデンの老夫婦マンションにひも(ママ)付きで泊まりこんでいて、そのにぎやかさに(けっして、和やかではありません)振り回されています。ちなみに、上の男の子一人くんは

付属小学校を今年卒業します。下のアイドル**絵里香ちゃん**は今年から付属小学校に入學します。思えばかおり、仁志・和香・穰・一人・絵里香と6人の子、孫、姪子を付属で育つのを見守ってきたことになりました。

かおりちゃんが付属小に入學した1965年から50年も私たち夫婦はかわってきたことになる。長いね!

嬉しいことに一人くんは先だって佐賀県諫早市にある中高一貫校「早稲田佐賀」に見事(とわたしたちは思います)合格しました。4月からは6年間寮生活に入ることになりました。英語が苦手らしく(ママの言)目下、英進館に週3日の特訓中ですが観ていると本人はゲームに夢中のようにだ。



院長(敏子さまの通称)のことで第三者的な立場として少し述べてみたいと思います。

あれから後、つまりかおりちゃんが院長をさくら郷に送り東京に帰りまもなく赴任地ポーランドに帰国したその後についてです。

あれから後、通代は週1回、麻由美さんも週2回の頻度で、また仁志くんも今まで大事なときは母を見舞っています。

ほぼ皆(関係者)がさくら郷でのリハビリがいちばんベターだと思い、後は着実に、元の元気な院長に回復することを信じ、あとは過ぎていく日々だけが薬(治療)と
思っていました。

ところが予想に反して、風間訪れても寝ている(眠っていると云った方が正しいかも)ことが多く、冷たいお菓子や食べ物を買っていても置くだけで帰って来る
こともありました。

郷の方の話では普段は車椅子(前も最近は同じ)でホールで3食たべとのことですが以前に比べてとても食が細いとのことでした。元気になるためには何といっても
口から自らの意思(食欲)で食べることですよね。

心配して郷の方はリハビリ施設に行ったときに点滴などもしていたのではないで
しょうか。

(事実、今の松下病院でも1日に何本かの点滴での栄養補給をしています。)口から
の流動食も取っていますがごっくんが上手く出来ずに逆流の危険があるそうです。
そうになると、さくら郷ではそれでもなくとも経営形態が縮小され施設のスペースも合
理化、スタッフの数も減り、勢い入居者に対する気配りなども今まで通りには行か
なくなってきました。

それでも、ほくの見た感じでは前からいる職員さんたちの院長に対する思いやり(気
配りも)全く変わらないように見えますよ。

それでも、食事の際の手間と喉の逆流の心配と、ときどき目を離すと車椅子から
立ちとうとするらしい)その心配)また、夜中にの頻繁にトイレの催促に対する対応
など、今の状態は老人ホーム形態のさくら郷の対応では厳しいとの現状は僕が見て



さて、この章はタコ足(必ずしも8本というわけではなくイメージとして思っ
てもらいたい)風の構成で書いていきたいと思う。1本目から3本程は育ってきた学
校(八期会―玉龍を中心に)単位の同窓生グループ。④は「日中友好協会」と中国
人の友人たち、そして自分の足で辿ったかの大地。⑤は

あつという間に2018年3月(78歳)になっています。何でも記録したいと思います。
時間がありません。



いてもよく分かります。

幸い、今移った松下病院はもともとは精神病院が専門の病院ですが院長のいる3階の施設は軽度の認知症患者が中心で（普通よりちょっとねと言った方々）加えて院長も副院長もよく知っている方です。

和香ちゃん的主人、慎一さんのお母様・松下治子さまの近い親戚です。

場所は鹿児島から高速を使うと30分で病院に着きます。イメージとしては「さくら郷」は空港インターを降りてあの蕎麦屋から霧島神宮へ約30分かかりますがその分がカットされ空港に病院があると思えばいいでしょう。

単人インターを降りると3分くらいで病院です。また、かなりの近いところにホテル京セラがあります。その別館に泊まって病院まではタクシーを使ってもいくらもかからないと思います。

まあ環境（あらゆる面から）は今の」さくら郷」より今の院長の状態を考えるとほかに松下病院がいいと思います。

ネットで見たいと思いますが出来上がってまだ何年も経っていないきれいな（米盛病院とまではいきませんが杉安病院よりは施設も環境もいいと思います）病院です。

問題はほくが行ったとき風なのにベッドに寝て足から点滴中でした。点滴をしている状態はやはり病人ですよね。「えっ」と思いましたよ。ほくは係の看護婦さんに聞きました。「一日、何時間くらいこの状態ですか？点滴の中身は何ですか？口から採る食事の中身は？くわしく教えてくれましたのでそのカタカナ薬をすべてネット（Google）で調べてみました。

先日、お昼の食事に行きましたらさくら郷のよく知っている女性の方が院長の様子（介護も兼ねて）を見に来ていました。院長とお話ししながら懸命にスプーンにおかゆをのせて食べる手伝いをしているところでした。とても、ほほえましい風景に見えました。通代の顔を見てニコニコ微笑みました。

一瞬、光が見えました。「これは元に戻るかもしれない、聞けば夜中のトイレ目覚ましも最近ではそれ程ではないようです。リハビリと食欲（口から食べる）が元の元気な院長に還る最大の課題とします。

ただ、年齢からみるとどんな健常お年寄りでも喉のこっくりが弱くなるようです。栄養のある流動食を何とか採ってもらい胃瘻（いるっ）だけはしてもらいたくないですね。

以上、ほくの目から見た状況報告でした。通代と麻由美さんはよくやっています。当たり前と言えはそれまでですがね。

麻由美さんも当然かもしれませんが義母の面倒を良く見てくれているのではないのでしょうか。通代も適切なアドバイスを彼女（元看護婦でしょう）にもらっているようです。

以上が僕から見た今の院長を取り巻く現状です。けいじ



大石慶二

又は『英末の留学生日記』—

2018.3.10

はじめて吉永英末さんを知ったのは5年前、英末さんが大学4年の夏だった。

わたしは15年ほど前から鹿児島島の大学に留学している中国人留学生への支援活動をしている。といってもたいたことではない。催事や県内の日帰りバスツアーなどを企画しての日中交流である。2013年の夏は初めて1泊キャンプを南大隅の花瀬川河畔で行った。

BBQ大会にキャンプファイヤーと星空のもと留学生との楽しい時を過ごした。翌日の昼食を近くの障害者施設「花ノ木ファーム」でとった。

60名ほどの留学生の前でファームを経営している白鳩会の中村隆重理事長の歓迎の挨拶が終わると「ニコニコ顔の理事長が「みなさん、何か質問がありませんか？」との問いかけにひとりの女子学生が手を挙げた。

「福祉と農業を結び付け地域おこしを目指される理事長の経営理念は素晴らしいことだと思います。ところで推進する中でいちばん困難なことは何ですか？それと、理事長の今後の夢を良かったらお聞かせください」

一瞬とまどい顔で中村理事長はそれでも得たりと、熱い思いを語った後で『日本語がお上手ですね、さすが中国の方はすばり核心にせまる質問ですね』と、すると「すみません、私、日本人です」。吉永英末という女子大生を私が特別に記憶にとどめた瞬間でした。

日中友好協会の一員として留学生の若者たちの支援・交流をされていていつも思っていることは中国人留学生たちに比べ日本人大学生の（何となくの）ひ弱さ、無気力さだった。この日英末（以下さん無し）に会って「オヤッ日本人学生も捨てたものじゃない」そんな嬉しい気持ちになった。

次に彼女に会ったのは翌年3月、協会主催の『中国養父母の法要』式典が行われた西本願寺別院の会場だった。彼女はその日が大学の卒業式とこのことではめいば

かりの（法要の場にはちょっと目立ちすぎな）袴姿で駆け付けた。

英末は嬉しそうに上海の復旦大学の修士試験に合格して国費留学生の資格をもらえたことを告げた。お祝いを述べた後でわたしが「留学中のことを協会のホームページに載せませんか？」というところをささず「頑張ってみたいです」と元氣な答えが返ってきた。

わたしは英末は普通の留学生では終わらないもっと内容の濃い日々を過ごすだろう、と予感みたいなものを感じた。事務所で協会の公式ホームページを見せて掲示板（ブログ）や YouTube のアップ方法、など（結局はおせっかいで、わたしが手伝うことになったが）の打ち合わせをした。

そうして（英末と私）との3年間の（留学レポート）の二人三脚が始まった。予想に違わず送られてくるレポートの量は半端ではなかった。日々の活動（出来事）も多いがそれと同じくらい内面（心で思うこと）を発露する文章も多かった。

若い留学生と同じ心の悩みもあったけど愛（青春）の悩みは全くなかった。それなりにプライベートは仕分けしていたのかもしいないが。一度だけ男子学生とのペア写真を挿入したらすぐ「この写真はボーイフレンドと間違われる恐れがありますから削除してください」とメールが来たことがある。

そのまま横書きで送られてくるレポートに写真を挿入して見やすくしたが文中に画像を入れられないフェイスブックなどへの掲載は難しかった。何しろ文章が長すぎると読んでもらえないから。

2年目の2015年8月の『小さな森の物語』—支教（貧困な地区の小中学校に短期滞在して学校に寝泊まりしながら子供たちに教育を提供するボランティア活動（AA12ページ）、の時から縦書きのエッセイ風の書体を取り入れた。それぞれをPDFに変換することによって12ページを連続物語として構成した。

この後、翌年の平和学の旅ともいえる『東南アジア平和の旅』をはじめ『西安の旅』『重慶の旅』『福建省の旅—アモイ・泉州』『東北地方の旅』それらのすべてが英末の旅は単なる観光旅行ではなく専攻する平和学に関わる旅といえる。2年生からはレポートは横書（日記風）と縦書（エッセイ風）にしたおかげで手間をとったけど

その分とても読み易くなった。

英末の留学中の特筆すべきことのひとつに普通の海外留学生としてはあまりないと思われる学校や学会などでの（思いがけないと、本人が言う）発表の機会が3度もあったことである。

2015年5月の「国際関係の授業での1時間30分にわたる発表」そして、9月26日、南京大学での『国際青年平和学会』12月には復旦大学『日中韓女性史会議』の通訳と1年間で3回、しかも日本からの一般留学生にはとても手に負えないであろう中国語や英語を使つての発表をこなしている。

ところでレポートを読み返しながらか思っていることは英末の目指す「平和学」とは何だったのかということである。

「支教」や「工友」たちという貧困や生活弱者たちとの交流(2011の年)また「東南アジア平和の旅」のきっかけを作ってくれたオーストラリア人エマからの影響。そしてカンボジアの「キリング・フィールド」から「ベトナム戦争記念館」の現実を目にして英末が受けたショック。「しかしこの貴重な時間のおかげでわたしは、しかと戦争の恐ろしさと残酷さをこの目で見た。そして、平和学を通して戦争と向き合いたいと心に誓つ。」

私はこの旅を通して、将来の道を決心した。復旦大学を卒業後アメリカの大学院で平和学を学びたい。そしていずれは・・・—英末の留学生活中にこの旅が与えた思いの大きさが感じられた。

英末からのレポートは全部変換してネット上に掲載してきたが白状すると一篇だけ二人だけの秘密で公表しなかったのがあった。それは南京にいた時に訪ねた「南京大虐殺記念館」でのレポートである。

英末の文章は加害者が日本人であることに戸惑い、犯した罪を同胞として懺悔し(心にごみあげる)謝罪の言葉を文字にした。

そして書き上げたレポートを読み返したらレポートとして公表するのに不安がよぎったのかもしれない。ただ一人英末のこの時の心境を知ったわたしも何度も読み返して「これは載せない方がいいかも」と返事をした。…平和とは難しい。そして、言葉(コメント)も難しい。

『英末の留学生日記』の書き始めに若くして亡くなられたお母様がいつも言っておられた「生きるとは人の為に生きること」その言葉を書いた紙が英末のパスポートにしっかりと挟まれている限りこれから実社会に踏み出す英末の「平和学」への道は揺るがないに違いない。

そして、いつかゆっくりと、英末とふたりで「それぞれの平和学について」語り合いたいと思う。

● 蘇頼さん：

昨日、慎一社長がお話がある、と言って二人で食事をしました。貴女の事が話題でした。いろいろ慎一さんの話を1時間ほど途中は口を挟まないで聞きました。

聞き終わって先ず思ったことはお互いの誤解(取り方の)だと思いました。でも、誤解は放っておくと取り返しがつかない方向へ行ってしまう。

お互いの性格から来る誤解(取り違い)が殆んどだと思えました。性格が変わらない以上どちらかが折れる必要があります。何故ならある問題に対する考え方は「どちら正しい」のですから。その場合どちらかが意見や考え方を変えないと結論は導き出せないと思います。

今回の問題の一つは、歩歩高ら回収した売上金(200万円位)と言っていました(をイーランプ上海は早く本社に収めて欲しい、という事らしいです。そうすることが為替差額の為、本社が損をしようがしまいが構わないと本社側は言っている(勿論慎一社長も)のに対して蘇さんの方は「なるだけ会社が損の少ない方法をとりたい」と言っていて送金が長引いている。という解釈です。

元立てがいいのか、円立てが良いのか、ぼくは蘇さんほどは勉強をしていないので分かりませんが、そういうして長引いているうちに誤解の輪が広がって行くことは好ましくありません。

ここは、自分の主張が、イーライフ本社(もちろんイーランプ上海)の利益になると思っても、主張は引込めて、「好きなようにしてください」とするのが一番だと思えます。

今の日中の金融政策がこういう形をとっている以上、金さん(大連市)とイーライ

フがしている商売のやり方に準じた方法が一番良いのではないのでしょうか。つまり、イーランプ上海が金さんの会社という風に出来ませんか。

ぼくと蘇さんの関係がイーライフに振り回されていくことは賢明ではめりませぬ。

近い将来、蘇さんは性格の合わない状態を続けて行けなくなったら独自で今の会社（イーランプ上海）を買い取るか、独立かを選択する時が来るかもしれない。

そのようなときが来た時、日本の、鹿児島のような製造業や流通業者と懇意になつていくと、コンサル業も輸送業も、商売も多方面に広げて行くことが可能です。

イーライフ本社はどうか知りませんが、慎一社長はごうも、歩歩高が好きではないようです。

ぼくはイーライフの成功の秘訣は「いかに歩歩高と共に儲けて行くか」だともいいます。

だから、今回の貿易文化節も日本の業者も、歩歩高もお互い経済効果を高め「やってよかった」と思われるように頑張りましょう。

ところで、今度、土屋さん（交易部副会長にします）を歩歩高SOCに派遣しますので、蘇さんは両者を知っている友人として立ち会って貰えませんか。歩歩高さん側の都合のよい日を教えて下さい。

なるべく期間で（たとえば6月中旬とか）教えて下さい。これは急いで返事が買いたいのとぼくの方から会長名で歩歩高の責任者に親書を送りたいので住所とメールアドレス、氏名を教えてください。

出来たら覚書でも取り交わしておきたいと思えます。担当者の孫さん？にも挨拶のメールを交わしたいと思えますので、ぼくのことをよく紹介しておいて下さい。これらのことは蘇さんの口添えはしてもらっても、直接協会と会場側とで進めて行くことなのです。

それと、輸送業のコンサルを蘇さんのイーランプがするとしたら」という方法でしたので、こうして欲しい」という要望書をこちらにください。いくらぐらいかかるか大よその経費もお願いします。

但し、こちらの方がもっといい方法で安く上がる方法がある。という意見を言う業者が出て来ないとも限りません。蘇さんの案に対しては、言ってみれば身内ですから、金額だけで他を使う事はないと思えますが、その分責任は僕も貴女と連帯責任

を負いますので慎重にお願いします。

2012年5月16日

大石慶二

平成27年(2015年)1,2,3月に書いた文書・手紙・感想文のなひ……

上城恒夫氏との交流MEMO

● 大石慶二様

先日は、懐かしい深みを感じる声を聞くことが出来て、大変嬉しく存じました。記念誌をいただいて一読し、思わずダイヤルしたのですが、正に正解でした。

時が甦りました。二重の感激をいただいた気がして、一気に時間の回廊を駆け戻ったのでした。お礼申します。

記念誌は良くまとめられましたね。伝わってくる温もりは、大石さんのお人柄と、同期生全員に対するこころくばり、母校、ふるさとへの想いです。各頁から感じました。

植樹の情景も余韻が残ります。

後期は、つい読み返したくなる文章です。ことばや文字が失われると、国が減じるという言い伝えもあります。文章や言葉は読む人、聞く人に、心を伝えるものだと、私が新聞記者になった時に教えられたものですが、そんなことも、しみじみと思

い出す心の伝わる文章ですね。 教えられました。

いつのまにか82歳になりました。信じられない老いの道行ですが、肩書や権威に反発しながら、生活に苦勞する書生でゆったりと生きて来たのは、出会いの人々すべてのおかげだと有難く思っています。

貴兄にも、心から感謝いたします。

つい先日、KTSの小笠原 弦さんと会い長い時間話をしたのですが、彼の純粹の人柄が感じられる得難いひと時でした。KTSテレビでお知り合いましたらときに

語られることをお勧めします。個性的な人生観を持っています。

人の出会いは一期一会ですから……

又、折りがあれば、是非お目にかかってお話を伺いたく存じます。

お礼かたがたの一筆謹上です。ありがとうございました。

2月26日 吉

上城恒夫

● 上城恒夫のエッセイより。

「ふるさとのおいがするから……」

上城恒夫

自然はいつか人間に仕返しをしようと、オカルトめいた話は好きではないが、漠然とそう思っていた。

夏が終わりかけて気がつくくとバス通りのイチヨウ並木が、揃って下の方から茶色に枯れている。

猛暑だったせいで、道路の照り返し熱が下葉を焼き切ったのであろう。

無理もない。今年は真夏の記録を百一年振りに更新したのだ、平均気温がインドのニューデリー並みだったのと、聞くだけで息切れしそうな暑さだったからね……

私など、大のようにならりと舌を出して、呆然とこの夏を過ごしたので、とても自然を観察する気力はなかった。

ベランダに出てみると、鉢植えのベゴニアもホトトギスもテッセンも、見ごとに茶色の干物になっている。

九月に入って、朝夕には少し涼しい風が吹いた。かすかに季節が移る気配は感じるけれど、日中の蒸し暑さはやりきれない。ベランダの白いタイル壁に、なんのつもりか油蟬が何匹もしがみついた鳴きわめくものだから、耳からも汗が吹き出そうだ。東京の蟬は哀れにも樹液を吸うことを忘れてしまった。

自然の仕返しは、大都市から始まるのである。あからさまには見えないが、もう何年も何十年も前から、じわじわと生きものが住めない環境に変わりつつあると言っている。

もちろん、それは都市化文明を勧める人間の手によってなされることである。生活を便利にすればするほど、自然は確実に遠くなっていく。自然の小さな一部に過ぎない人間が、自らの意思で無辺大の自然を遠ざけている矛盾。そのうちに、自然から何かの形で仕返しを受けても、それは自業自得と考えるしかないように思う。

使い古された言葉だけれど、コンクリートジャングルの東京は、今年のような猛暑が続くと、気分的には砂漠にいるようなやりきれなさがつらくなる。砂漠なら満天の星が見えるだろうが、東京の夜の空は、濁った空気を通して、十数個の星がぼんやり光っているだけである。

そんなことを考えていると、いつか東京に住むのは愚かなことだと納得もするが、それでも今のところは、もうしばらく東京から離れるつもりはない。

私の場合、兄を昭和二十年三月十日の東京大空襲で失っているので、気持ちのどこかに「東京は嫌な所……」という思いがある。なのに、それはそれで、毎年の命日に東京都慰霊堂までお参りに行っているし、正直なところ歳月の中で風化している。

上の文章は商店街時代の先輩・上城恒夫氏に「記念誌」を差上げたお礼に感想と氏の著「二階堂進」を戴いた際に届いたお手紙です。

下の文章は『55周年記念誌』と一緒に同封した僕から上城氏への文章です。

● 上城恒夫様

大石けいじ

2015.1.17

昔、ぼくがまだ20代で鹿児島に男性美容師として帰ってきてまもなくでした。通りの顧問格として上城様とお知り合いになった頃、店の店内新聞（主にスタッフ対象）の校正をしてもらいに山形屋の企画部を訪れたことを思い出します。

忙しいのに時間をさいて、つまらない小学校の壁新聞のような手書きペーパーを熱心に目を通してくださいました。「大石君、これいいよ、皆のモチベーションをあげるのにすごくいいと思うよ、直す所なんかないよ」と言われ結構自信をもったことを思い出します。

― 大学を出て変なことから東京で付合っていた妻の実家にスカウトされそれでも夢

をいっぱい抱いていたころでした—本当にあれから50年がアツというまに過ぎようとしています。

今回の上城さんの年賀メッセージはなぜか胸を打たれました。内容というより、ぼくにはあのメッセージを書かれた時の上城先輩の心もようが伝わってきました。今までになく何べんか読み返しました。(今までは2回ほどでしたが)そして、瞬時に思いついたのがこのことでした。

そうだ、「上城さん」この記念誌を読んでいただくこと「そう思い勝手に送らせていただきます」。

このあとの文章は、ぼくの美容の弟子で何故か「師匠」(ぼくのこと)の生き方を見習っています」という変わり者がいて(都城でサロンを数店舗経営)彼にもあげようと思っ書いて添え文ですが今のぼくの心境なのでそのまま失礼かもと思いがら載せてもらいました。(彼はがん患者です)彼はまじめ過ぎるのでいつもやわらかい世界を語って聞かせます。それと、年賀状?の最後にしたためられた上城さんの一行の文は「自分史作成もしくは文字の作品」を・・・と解釈しました。もしそうなら楽しみです。心待ちにしていますよ。

●—達哉くんへ—

ぼくの60歳代は中国美女(万人が認める美人とは限らない)に取り巻かれていました。(これもただ単に)

関わっていた程度かも知れない)——といっても何名かとは(シャケンと云う名の長沙女はラブレターをうっかり見られて妻にはれたけど)彼女らとは、告白しますが、いわゆる「ゆくところ」まではいきませんでした

彼女らが一様にぼくに言った言葉は「先生は若いデスネ。まだ充分恋人候補に値しますヨ」でした。

今、70歳台になり中国語での会話と中国自体がぼくからいろんな意味で遠くなくなってしまいました。

そんな訳で帰本能のようなものに引きずられ高校、大学時代の過去美女(ときに面性)に關心が移ってきました。さすがに肉体的には接触したとしても一切のときめきは感じませんが「ゆめまぼろしのむかし」に戻って(正面は現在、背面は過去)の顔を交互に使い分けて付合っています。

記念誌の発行以来、ぼくからの電話をとつぜん受ける彼女等の電話口での表情は歓喜に震えているように覚えます。とつぜん、あこがれのタフガイ・裕次郎が甦ってきて「わたしに電話をしてきた。しかも、旧姓を呼び捨てだったり、むかしの愛称を言ってくれたヨ・・・」そんなリアクションです。

もう、しゃべるは、しゃべるは、学生時代にほとんど話したこともない(僕らの時代は共学は登下校のときだけ)なのに喋りすぎて、ぼくの用件も聞かないまま切ってしまう人もいます。

そのあとしばらくすると丁寧で驚くほど綺麗な文字で書かれた手紙が届きます。

「貴方のことは高校時代から(その後のいろんな会合の時にも)物静かで、どこか他の同級生とは違っていました。・・・」みだいな、一見せてあげたいくらいです

—学生時代を思い出させる、ときめき心ユキいっばいのレターです。もしかしたら誰でもいいのかも知れませんが、しかも、彼女等の多くは高校時代にはクラスのマドンナとして数多くの同期男子の片思いの傾城たちです。・・・とまあ、書いていくと限り無く、且つ貴兄にとって無関係のことばかりなので止めますが・・・つまり言いたいことは、何歳になっても扁頭体をびくびくさせる気持ちだけは(いやらしい意味ではなく)忘れないことだと思います。

親として、夫として、身近の親族の代表者として、あるいはしがらみの取りつかれた身近の社会のリーダー格としての「自分」。それなりに立派なことだし、勲章者かも知れませんが「それはそれで壊さないうまでも」それが自分のこれから先の人生のコン(処世訓)ではないと言っことを自覚することです。

自分のこと言えば、これから先は1日をより長くする努力をしたい、いかに睡眠時間を少なくするか、3時間長く起きていると1週間が8日になる。1年が13カ月になります。その為には睡眠時間を5、6時間にすることです。今まで7、8時間寝ていたら2時間を読書か、好いテレビ観賞に使えばいいでしょう。

謙遜ではなくこの記念誌の作品群は—自分のものも含めて恥ずかしく読み返したくもない—たいした内容—ではありませんが、これを手にした同期人たちは過去を懐かしみながら、同期としての誇りのようなものを感じてくれているように思いました。

実際に多くの仲間から読後の感想が届きました。大方は僕に対する労いと感謝のことばですがその裏に「自分たち同期の誇り」がメッセージから感じとれるのが嬉しかったです。

一緒に送られた感想文も送ってみます。ただ辛いのは、記念誌に投稿してくれた内の2人が既に鬼籍の人になりました。アツというまでした。昨年の10月に刊行したの……。うち一人は自分の完成作品を見ることもなく。

もし、近くの方でパソコンを覗けられたら（アイパッドかスマホでもいいです）以下のサイトをクリックして見て下さい。八期文庫HPを作りました。

そして、寄稿して戴けたら上城作品も載せたいと思います。ワードで欲しいです。

HP サイトとEメール アドレスです。 HP は

<http://www.nihao-kagoshima.jp/hatiki55.html>

● 上城氏に無関係の『ぼくの思ひこぶ』を載せませぬ。

私たちにはもう具体的なスケジュール表はあてにならないのだな、と感じた昨年末から今年初めの出来事でした。

今からは現在・過去・未来で済むのではと思います。もちろん明日をきむ未来です。

そうそう、過去といえば記憶のことですが人間の記憶は時系列に、つまり年代順に並んで記憶されていないのではないかと思います。他人と話をしている自分だけがその同じ過去の出来事を全く憶えていない「えっ認知症」とあせることはありませんか。

人それぞれ自分の整理ダンスを脳内に持っていて、その時の受信程度によって整理されるケースが違ふんだと思うんです。ポーっとしていたり、聞いてても感銘を受けなかったり、また時にはすごいショックを受けたり、そくそくと胸がときめいたり……と、その程度ごとに個人の整理ダンスの場所が違ふのじゃないかと思えます。

胸キュンの入るケースは「その人の扁頭体を通りますから」とても、クリアで昨日の事のように思い出す。本人は目の前に浮かんで現れるのではないか、と思うんです。

何を言いたいかと言うと全く記憶にない時はその時記憶の箱に入れなかったか、つ

まり、もう取り出すことはない」「箱に保存されたということ。なので認知が来た心配しないことです。

つい先日妻の伯母が亡くなりましたが周りの兄弟姉妹が一緒に回顧する言葉が「頑張ったから、急ぎ過ぎたのよ」「無理していたからね」と言う労いことばでした。まあ、必ずしも言葉通りではないでしょうが、われわれ、これからは、元気なうちとはどうか、肉体の頑張りは程ほどにしたいと思うことです。間違っても若いものに負けるものかはありません。

他人が重い荷物を持ってくれる時は、あるいは、「わたしがとってくるから」などの場面が来たら「悪いはねえ」がいちばんの正解です。これからは他人が代われない自分の足腰の鍛錬などは欠かさずマイペースで鍛えて、仲間内の旅などへの参加の準備に、自信付けを心がけましょう。

写真のことで思いますが、何かあって、その人の写真が欲しい時、本当に写っている自当てる写真がないことです。100枚ある中で4、5枚あったらいい方です。一枚もいいのがない方が多いです。いや、写っているんですよ集合写真には、いっぱい。

● 上城氏に無関係ですが『八期女性に今年』送った文章です。想い出のために……載せませぬ。

1月17日(土)の八期新年会の風景をDVDにまとめました。

びっくりしました。ふたつのKが働いたのででしょうか今回は例年の倍近い42名の参加者が集いました。会場に入るとそこは、自分の声が聞こえなくなった世代の、一瞬渡り鳥の島に迷い込んだような、悲鳴のような大声の会話と、お互いからだを叩き合う異様な、はじけるような笑い声に包まれていました。

隈元さんの開会のことばに続き、浜崎会長の挨拶の終りは鳥たちの私語のつぼみの中にかき消されてしまいました。プログラムらしきものは一応たてていたようでしたが、「遠路はるばる(関東・関西・福岡)組」による乾杯！そして簡単な挨拶……と司会の隈元くんは目の前に来る「馳走を横目に決めていくカリキュラムを履行すべく一生懸命でしたが、交代でマイクを握る「遠路はるばる組」さん達の声はほとんど皆には届かずというより聞こえないから聴いている人がいないという状況でした。それでも会場の雰囲気は参加者みんなの「至福の笑顔」に包まれてそれはいい

雰囲気でした。

お久しぶり組も今回は多く参加して喋りたいことがお互いいっぱいあるのでしょつ。少しは昨年末に届いた記念誌の懐かしい白黒写真に喚起されたのかも知れません。話したいことがお互い喉に詰まって口に出ないものだからもどかしく相手の肩や手を握る人・・・それでも、「みなさん顔を忘れてる人もおられるようですので簡単な自己紹介をしてください」とマイクリリーが始まって80%の人は聴いていなかった。最後に立ったひとりだけえらうけうけていたけど。

幸いマイクの前だったのでぼくは大体は聞いていましたけど、ほぼ、皆さんが先日、あっけなく（は失礼な表現かもしれないけど）あちらに逝ってしまった平澤希代子さんの想い出にふれていました。みなさん寂しくなったのでしゅわね。

さて、私ごとですが、新年会が終わったころ、75歳以後の生き方についてぶっと考えて見ました。思うことは自分の宿題についてでした。もう今から手足を動かすものはパスしようと思います。体力維持のジョギングや水中歩行などはいいつて、今更テニスやサッカーなどはごめんです。

それにしても（少しは知っていると他人に語れるほど）知らないことがこの世の中にはいっぱいあることに驚かされます。眼から得る知識はテレビや読書で得られますが目ほど能動的に耳を使っていないのに気がきました。そうだからは耳が遠くなる可能性が強いや、そう思うと急に音楽を聴きたくなりました。

昔の音楽は脳内の音楽ケースにも、スマホやiPadにも2000曲以上の音楽がストックされてあるけど好きなのに未開拓な音楽の分野があることに気がつきました。まずは耳慣れたジャズは横に置いてクラシックに挑戦しようと思いつたのです。

今まではシンフォニー、コンチェルト、ソナタ、重奏団など演奏形式にジャンル分けて聴いていました。それを演奏家ごとに聴いてみようと思いつたのです。ベートーベンとモーツァルトそれにチャイコフスキーは（というよりほとんどこれらが中心の）交響曲と協奏曲は何度も聴いている（BGM風ですけどね）ので今度はフレームスとマーラーを解説書を見ながら聴き学びしようかと意気込んでいます。

イヤホン感覚でも聴けるようにと考えました。クラシックは高音域と低音域の幅が広いのでBluetoothを通じてワイヤレスでそれなりのスピーカーで聞こうと奮発してBOSE（ボーズ）の小さいけれど驚くほど高性能かつ大型スピーカーに負けないいい音が出るのをアマゾンでネット買いました。

ちなみに（Bose SoundLink Mobile speaker II）30,000円です。繋ぐコードも電源コード不要なカバンに入れて持ち運べる超便利なスピーカーです。こう見えても僕は昔はオーディオマニアでした。

音の入り口（カートリッジ）から出口はもちろん繋ぐケーブルにまでこだわった時代（40年前）もあったのです。

無料のアプリMusicTubeeからプレイリストを作り、取り込んだ曲を寝る前に一曲（30分程度）づつ聴くようにしました。

何かを学ぶ、気持ちがあがきめく、脳細胞を刺激するつまり、若さを保つためにいちばん苦もなく得られるものが耳からの刺激だったと思いついたのでした。寝ていても、雨も嵐も関係なく、手足を使うこともなく刺激を受けるものは聴覚にしかずと思いつたのです・・・まあかなりこじつけですがね。

寝る前には猫を膝の上に乗せハイボールを片手にフレームスのピアノコンチェルト第一番に浸り、朝の目覚めとともに、ベッドの中で猫の足をもみながらマーラーの『巨人』を聴く・・・そんなイメージは抱いて戴ければ幸いです。

上村篤義先生

大石慶二

2014.12.4

お便り有難うございます。

2,3日前、年末に長田の同級達と男女5,6名で会おうと言う事になり市来龍作さんと「先生元気かな」と言ったら「元氣そうやっど、みなみの応援で達筆なガキがきた」と言う返事でした。今度、ふたりで川内に会いに行こうか、と語り合っことでした。

さて、記念誌を早速、送ります。本づくりも結構楽しいものですな。仲間の励ましに乗って完成しました。皆から

のお礼のメールや手紙がうれしいものです。10月に完成しました。1と月後に20名の元気な仲間と奈良・大和路を歩きまわって来ました。毎年みんな元気なものです。でも、ビデオで見ると悲惨なものです。もう少し颯爽と歩いている積りなんでしょうね。じいじ、送ったDVDをお楽しみください。

重複したかも知れませんが長田時代の写真も再度作りなおしておきます。

あの頃のことは先生は失礼かもしれませんが時代がピンポイントで思い出さないかも、と思い、僕の記録物語りを同封しました。小学校から高校までをタイシエス卜で書いています。大親友だった有村パチンコ君や、内くん、福くんなどが音信不通で寂しいです。生きているやら分かりません。

それでも名簿を見るとおわかりでしょうが旅行などで集まると、話題は高校時代を飛び越えて長田のわんぱく時代にタイムスリップします。

勉強もほとんどせず、毎日学校で何していたのでしょうか。体育部の仲間は忙しかったのかも知れませんが、僕など中学3年のころは有村の「パチンコ屋」でお富さんや「真室川音頭」を聞きながらパチンコのじゃらじゃら音の中で遊んだり、山形屋や西本願寺かいわいが遊びの縄張りでした。時折、図書館に勉強の真似をしに行ったり、帰りは副島さんの家を覗いてみたり、そんなことしか憶えています。

この前律子さんにあった時「大石くんは石で追っかけて恐かったのよ」と言われたけど「哲二と間違ってるんじゃない」と言いました。ほくなど大人しいものだったと記憶していますけど・・・とまあ、皆と会うとまだこの歳になってそんな話に花が咲くんです。もう他の話には花も咲かなくなりました。

実は僕も（いい風呂の日、11月26日誕生日）に後期高齢者の烙印を押されました。今まで使っていたプラスチックの健康保険カードがペラペラの紙に変わりました。治療費が安くなったので我慢しますが車の免許更新も「認知症検査」が加わり落ち込んでいます。

話は変わりますがもしよかったらほくたちが先生の川内を訪問して（新幹線で行きます。少し飲むかも知れませんが）クラス会をしてもいいと思います。

場所と、日時を指定してもらえれば幸いです。四元政明くんが川内在住ですので、彼に段取りさせても良いかなと思っています。

もし、息子さんか、お孫さんでもいらしたら以下のサイトを出して僕らのホームページを見て下さい。流行りのスマホやタブレットなどでも充分見れます。

<http://www.nihao-kagoshima.jp/hatiki55.html>

結論がつかないまま終わるのかもつねづね。

一話しが思い出の渦の中に何もかも一緒に現れては消え、また現れては消えて、肝心のほくと通代の回憶（おもいで）にたどり着かないでいる。

通代とふたりのはなしはこの後、美容師というこの後ほくが辿らなければならないおよそ40年以上の美容界の話しに繋がっていくことになる。

それは必然、有村家、秋元家（通代の両親の話）の話が増えて来る。この美容生活40年間は必ずしも今となってはほくの人生にとって有意義だったかということとも思えないのが今の気持ちだからだ。

だから、ふたりの関係から美容学校を経て、ロザン又美容室での『見習い・インターン』を経て、やはり、鹿児島に帰ることになり『美千代美容室』で美容師人生が始まっていく、『楽しかったというキーワード』でくくると、経営、教育を通して右肩上がりで鹿児島美容界のトップを歩いたオンリーワンでナンバーワンの美容師人生は輝かしい成功の人生だったのかも知れない。

またいっぽう二人三脚で歩いてきたつもりの有村利繁（通代の義父、つまり美千代美容室の創業者であり通代の母である秋元敏子の夫）との最後に訪れる波乱の結末を思うと『むなし人生とうキーワード』になる。

人生の中でいちばん豊かであるべき期間が実際は「豊だったにもかかわらず」つらい、思い出したいくない期間になってしまったのは共に頑張ってきた通代をはじめ、ほくをほんとうにやさしく導き励ましてくれてそして他ではいっばいほくを「自慢の婿殿として」自慢してくれた院長・有村敏子にも悪い気持ちがいっばいする。院長がもし、こんなに早く「世間果け」が来なかったらどんなによかったのと思う。何にも増して最後は通代も、院長もほくにいいように決断してくれると思う。

たのが『安易な考え』だったという이었다。

あなたは「やさしい心でね」「思われるのよ」「思いやりのある人なのネ」といわれるのよ、よむのがうらやまかっ。

僕は、この半年ほど、この二つの言葉「やさしい」と「思いやり」について、自分なりの解釈、というか、定義を馬鹿みたいに考えています。（もしかしたら、昔からの癖である言葉遊びかもしれません）

ともかく、人に、やさしいと言われているある人物を仮想して、 どちらの言葉がその人にピッタリなのかを考えています。

今の時点での仮回答としては、**やさしい**とは生まれつきのもので、それはやさしそうな顔つきと、やさしそうな言葉づかいをする人を言うのではないか。どちらかといえば、デジタルなものであって、ハートフルなものではないという気がする、人々が「あの人はやさしいよ。」と言つ時は、その人の性格や人格とは無関係の、その人が持って生まれたDNAのなせる業ではなからうか。

変な言い方かもしれないが、「やさしい」とは景色みたいなものといえないか。美しいものは美しいと言ったような・・・一方、「思いやりのある」と言う言葉について考える。

相手のことを思ったり、相手の身になって物ごとを考える、程度の差はあれ、いくばくかの、自己犠牲が伴う。 その痛みを超えて相手に施しの出来る人、そういう人を「やさしい人」とは言わず、「思いやりのある人」と言う。

単純に相手の痛みは誰でも分かるし、助言も出来るけど、問題は、自分に犠牲とどうか代償を強いられた時に相手のために喜んでそれが出来る人。そんな人のことを「思いやりのある人」という。

バリアフリーの関係でも、旅や、趣味の世界でも、人間関係があるかぎり、この「思いやりの心」を發揮する勇氣をもちたいと思う。

2001・10・26 けいこ。

2001（平成13年）11月22日

今年の八月にホームページの構想を練り始めました。

丁度、「八期通信」を上野さんに手伝ってもらっている頃でした。

もっとも伏線があつて、それは、ウルムチの馬さんとの約束（といっても実際は、M氏がしきりに、勧めていたのですが）日本に留学をしないか？面倒みるよ。と・・・本人も少しはその気になったのか、「資料を送って下さい」「連絡はメールで大石さんにします。」という話になりました。 「そのうち学校のパンフレットでも送りますしょう。」ということでした。

とりあえず、今回の旅の写真と鹿児島島の街の写真でも送ろうかと思つたのですが、中国語の文字変換が出来ず、（東京のY嬢に変換ソフトまで借りて勉強したのですが、いまだ成功していません。）陳さんに文字を書いてもらい、馬さんに送つたのですが、返事が来ず、 届いたのか、どうなのか分からず、そんなこんなで、ホームページの方が世界中何処でも間違ひなく、こちらのことは発信出来るのでは、それと、八期仲間に、情報をメールで送るなら、「八期会のページ」を作つたほうが、写真もいっぱい載せられそうだし、「掲示板」を利用して、お互い情報交換も出来る。とまあ、こんなことが動機といえます。

あれやこれや考えているうち、なんとなく、トップページ（top）のデザインが浮かんできました。

それからは、「バリアフリー天文館」も近づいてくる。 釣りのこともせたい。 忘れないうちに旅行記もたまっている、・・・と頭の中で、画像、写真、動画、文字が錯綜して、仕事が手に着かなくなりました。

6月初め、上野氏に一度、僕のプログラマーの sonnet で無料のホームページを作つて貰いました。

（今も存在していますが）トップページだけです、・・・でも、アドレスがとても長いと、「容量が少ないのでは？なんだか、一杯入れるのがありそう・・・」そんな気がして、そちらは止めました。

そんな時タイミングよくパソコン誌が特集でCD-ROM 試供版つき「簡単に出来るホームページの作り方」を見つけ・・・、練習を開始。

だんだん格好がついてきたがやはり、試供品、何かおかしい。（本当は、そんな気がしたのかもしれないが）とうとうと言つた、納得して、ソフト購入を決意、到

着を待つ。

僕のホームページ師匠の牧野氏のアドバイスでなんとなく出来上がっていく「天文館」といって登録する。

10月終わりにほぼ70%完成。途中何度も、上野氏、牧野氏をわざわざ呼ぶ。

馬さんから「掲示板」に開設祝いが届く。そして、11月3日第四回「ハリアフリー天文館」開催。

14ページの力作2001・三におはら祭&ハリアフリー天文館が完成。

そして、

11月19日「ニー・ハオ・中国」のシルクロード浪漫14ページ完成。

11月20日・ナカマチベルグ・ギャラリーの北迫正治の「花と詩」完成。

ここで、第一段階はひとまず、落ち着きました。

次に ●中国語ソフト「Wnn」の購入で中文のマスター

●イラストレーターとフォトショップのマスター

●容量の少ない動画の挿入

●スキャナーのマスター

●自分史の完成

●雲南の旅・紀行の完成と 釣り紀行。

などを、第二ステージの課題として考えています。乞うご期待。

早速は来月7日の八期会・クリスマス忘年会の紹介報告を作る予定です。

あなたの原風景って何ですか？

あなたはこんな瞬間ってありませんか？

今朝のこと 起床して 庭を眺めながら、 まだ習いたての気功（鶴翔練功）の型マネをしていました。

暖かい朝でした。 銀杏の葉と桃の葉が黄色く、 透明がかっていて 今にも落ちそうな気配です。

フト、木々を見上げていた時、瞬きのようなそのほんの一瞬、その時がよぎったのです。

「トバで表現できない瞬間。その風景の中に溶け込んで、とても小さくいる僕が、一枚の写真の中に収まっている・・・そんな感じとらったら、近いかもしれない。たまたまなくいい気持ちだが、「よめる」と言う表現がいいのか、「フッと現わゆめる」その速さは、「現われ」と「消える」の間」「もっとならぬぐいの速さですが。

僕が中国に郷愁を感じるとすれば、この「一瞬のよぎり」が僕の原風景なのかも知れません。

「自分の過去にあったことは決して忘れる事はないのです。なかなか思い出すことは出来ないにしても・・・」

今日、久し振りに、観て来た映画「千と千尋の神隠し」のなかで聞いたセリフです。

「忘れてしまった記憶が甦る」なんてフレーズをよく聞くことがありますが、これなども「フト思い出した」が正しいのかも知れません。

自分の記憶の中にはっきり思い出せる風景は僕の場合、大龍小学校の1年生（北京から引き揚げてきて1年か2年位）か、もう少し前の阿久根にいた半年くらいか、それは断片的ではあっても、はっきり僕自身であって、セリフは覚えてないけど、動画として、紛れもない自分がそこに居る。

ところが、それ以前つまり、大陸での自分は「・・・のような気がする」そんな暗示にかかった世界でしかない。

大陸で生まれ、幼少を北京で過ごしたことは事実なのだから、当時の北京がまだ残っている中国の何処かに僕の原風景、つまり瞬・まばたきの景色があるに違いない。そんな風景を見つけ、過去を思う存分思い出して見たい。・・・僕が中国に惹かれるとしたら、そんな気がしてならない。

2001年11月24日

人は生まれてきて成長を続ける。成長を続ける為には目標が必要となる。

目標は二つある。一つは生甲斐としての内部目標を達成するため、もう一つは今という外部状況に対して外部目標を瞬時に設定する事で今を生きる。

夢のような大きな生甲斐感を内部目標として設定した人は、夢の実現はなかなか到らないので、それだけ大きな困難や苦勞を背負って生きる。しかし、この夢の実

現に取り組んでいる事に意味を見出し、輝いて生きる事ができるかが問われるのである。孔子は「論語」の中でこのことを次のように述べている。

・・・「**之を知るは 之を好むに如かず。之を好むは 之を楽しむに如かず**」・・・

と 人の生甲斐感をどのように設定するかは、その人の歩んできた人生と、そこから将来の人生をどのように設計するかに依存する。

日常の平凡さを最も大切な生甲斐感として設定し、日々の状況の中で最善に生きることで至福感をつくる人もいる。

自分で自分の人生の舵取りをして、困難に立ち向かい輝いて生きることによって周囲の人を引き上げてしまうことも出来る。

(松本 元 脳神経科学/脳のこころ)より・・・

人は歴史を創るために生きる。

友人の美容師・ヨシ・トーヤ(サンフランシスコ在住)に勧められて読んだ本の切り抜き。

人は歴史を創るために生きる 大脳新皮質

あなたはストレス ありますか？ 有没有？

「ストレスの解消には美容室でのシャンプーが一番。」「そんなお客様は結構多い。

「僕、ストレスって、あまり感じた事ないんです。」「アラ、いいわね、先生は趣味も多いし・・・」

そんな会話は結構多い。

いろんなことが頭に詰まって、脳が混乱してしまうとストレスが発生する。とすれば、そのいろんなことを一つ一つ始末していけば解決するはずだけど、「解決出来ないからストレスになるの」となるから始末におえない。

僕が思うに、悩み、ストレスに目的を設定すればどうだろう、解決出来ないだろうか。

目的のある悩みはむしろ楽しみに変わることが多い。と思う。これは僕の経験。

たとえば、あるイメージを白い紙にデザイン化しようとする時、つまり目的を具象化しようとする時、頭の中は、あれこれ悩み苦しむ、しかしこのことは楽しみでこそあれ、ストレスでは決していない。といっても、これは僕の場合だが。しかしこれには約束があって、結果を必ず、出来るだけ早く出すことである。

そして次の悩みに集中して、それを解決する。

それと、僕がつとめて努力していることは、二人称、また三人称が「・・・がどう考えてるか、思っているか?」ということを考えていないことにしている。

このことは、とてもとてもむずかしい問題である。相手が、立场上、上位にある場合は特にむずかしい。こういう時は、まさに、相手にどう思われようが、無視する事である。

世の中には「上手にあしらわなければならない人」が一人や二人は必ずいるものです。まあ**天敵**ですね。そういう人は、・・・そういう人の為にあなたの人格はけっしてマイナス評価はされません。ご心配なく。そんなことを考えてるから、悩んでるから、ストレスが起きるのです」。

2001.11.26 My Birthday

コングレックスというコトバは余り好きではありません。

何故なら、うけるイメージが暗いというか、マイナスの感じがするからです。「人知れぬ悩み」と言えば、内容は同じでも、こちらの方は青春の甘酸っぱさを感じます。

多分、人は皆、今まで引きずってきた。そしてこれからも決して誰にも言わない「人知れぬ悩み」を複数こ、黄泉の国まで持っていくことですよ。

やはり、最愛の人は自分自身だからでしょうか？

『人知れぬ悩み』ってどんなのでしょうか？

僕は小く中学にかけて赤面症?でした。特に女の子が傍にくると顔がほてり、真っ赤になるのです。皆が付けてくれたあだ名(ニックネーム)なんてしゃれた言葉はなかったが**ユダカ**これはもう「人知れぬ悩み」の始まりでした

しかし、これは今に引きずってないし、こうして言えるので違うのでしょうか。確実に今、「人に言えない悩み」が二つあります。そして、もし、仮に誰かに打ち明けたとしたら

、「なーんだ、そんなこと、別に君だけじゃないよ。たいしたことないじゃない。」といわれるに違いありません。そんな悩みかもしれません。

でも、この二つは僕にとって解決できれば、これからの人生ガラリと変わるほど

「はくろ」という形容詞をひけて「はくろスネヤット」と云う風な使い方も流行っていた。

「はくろ」はその他の名詞に「美し」「カッコイイ」といったような使い方だったような気がする。

大平博美も小学校の5、6年から中・高・大人（東京で1年間）思い出すのはナンバばかり）までの「わが青春の軌跡」すべての期間無二の仲良しだった。

顔にタブるメロディはまず三橋美智世の『愛ちゃんはお嫁に』なのは何故なんだろうか。

唄っている場所は横浜の綱島のアパートである。（三橋美智世が売れる前に綱島温泉の火焚ぎの仕事をしていたとは聞いていたけど）もう一曲ぐらいあるだろうといえはあった。

アンソニーパーキンスの『月影のなきさ』だ。ほくも好きな曲だった。

やはりひろみの口から出てくる音楽はこれしかない。博美は故郷宮崎に帰ってお父様の仕事の跡を継いで鉄道郵便の職につき仲間とハワイアンバンドを作って楽しんでいたら聞いた。

小中高と彼は自慢の長髪を73に分け、ポケットにはいつもポマードの匂いのする鬘甲の櫛を持っていた。櫛の色まで浮かんてくる。大龍小5年のときには彼にはれつきとした彼女がいた。鹿児島駅前に住んでいたフクシマケイという女性だ。彼女もまた年よりずーっとませた娘だった。

中学生になってから大平に聞いた「はくいスケ」「フクシマケイ」との話はあまりにリアルで非現実的な話なのでいまでも「作り話」と思っている。ほくを羨ましがらせる為の……

浜崎隆へんにアタリクしてほくの脳裏にひっかかっている曲はと言えば何と書いてもロックンロールだろう。初期のエルヴィスナンバーが彼のボディアクションと共に甦ってくる。

「冷たくしないで」など。本当はその直前、映画『暴力教室』の主題歌として登場したビルヘリーと彼の「ロケットの『ロック・アラウンド。ザ・ロック』と『シエイクアラウンド』だった。

そのあとあの有名なエルヴィスのロック『ハートブレイクホテル』だったように思

う。すべてが隆の十八番だった。ふと思い出してスマホに保存してある「My favorite song collection」から『ハートブレイクホテル』を聴いてみた。この曲1956年にエルヴィスがサンレコードからRCAレコードに移籍して最初の曲だった。そしてほくが高校時代初めて自分で買ったSP盤でもあった。

本心に擦り切れるほど聴いたものだ。B面に入っていた『was the one』だひじりの人』も後年、もう一度聴きたい自分の曲第一位にあげるほどお気に入りの曲である。というのは大ヒットしたハートブレイクの方は以後も何度もリレコーディングでながれていたのだから懐かしさを感じなかったからだと思う。またハートブレイクホテルと言えば小坂一也を忘れるわけにはいかない。

アメリカで大ヒットしたその年に早くも小坂一也は自分のバンド「ワゴンマスターズ」を引き連れてこの曲で日本に和製ロック時代の扉を開いたといっても過言ではない。

彼の唄い方はもともとカントリーシンガーなのでとてもエルヴィスのような元気のいいロックのリズムには程遠い唄い方だったけどそれはそれなりに僕たちは大いに受け入れたものだった。

大学の頃の仲間が多いが兄の友達（名前は忘れた）が唄っていた裕ちゃんの「男の横丁」も懐かしい。相本の従姉妹のかっちゃん（カワイい共立高校1年生）は飯田久彦の「ルイジアナママ」そして名古屋のサー坊は「東京ナイトクラブ」「マヒナスターズ」と続いている。

美容師の先生時代に次々に代わる店のスタッフ（16才から23才ごろまで）の顔もその時代を共有した歌手やグループがくっついていて面白。沼田聖子とドリムスカムトゥルー。大重と「じおせい」の詩「ところで不思議なことに、60年代以降に数知れない中国人朋友たちと付合っただけど何故か名前とすべ浮かんてくる音楽はない。

最初に書いた車を運転している時の人で何故その場所であつても解けない人の名は……である。もう説明が長くなるので彼女の名前は忘れて下さい。車が左折するとすべ近くに隠れ家のようなホテルがあったようななかったような。

2016年に編集改訂した『ほくの最近思い』より。 大石けいこ

ほとんどの歳代は中国美女（万人が認める美人とは限らない）に取り巻かれていました。（これもただ単に関わっていた程度かも知れない）——といっても何名かは（シヤケンと云う名の長沙女はラブレターをうっかり見られて妻にばれたけど）彼女らとは、告白しますが、いわゆる「ゆめくじら」まではいきませんでした」

彼女らが一樣にぼくに言った言葉は「先生は若いデスネ。まだ充分恋人候補に値しますヨ」でした。

今、70歳台になり中国語での会話と中国自体がぼくからいろんな意味で遠くなくなってしまいました。

そんな訳で回帰本能のようなものに引きずられ高校、大学時代の過去美女（ときに両性）に関心が移ってきました。

さすがに肉体的には接触したとしても一切のときめきは感じませんが「ゆめまほろしのむかし」に戻って（正面は現在、背面は過去）の顔を交互に使い分けて付合っています。

記念誌の発行以来、ぼくからの電話をとつぜん受ける彼女等の電話口での表情は歓喜に震えているように覚えます。

とつぜん、あこがれのタフガイ・裕次郎が甦ってきて「わたしに電話をしてきた。

しかも、旧姓を呼び捨てだったり、むかしの愛称を言ってくれたワ……そんなリアクションです。

もう、しゃべるは、しゃべるは、学生時代にほとんど話したこともない（僕らの時代は共学は登下校のときだけ）なのに喋りすぎて、ぼくの用件も聞かぬまま切ってしまう人もいます。

そのあとしばらくすると丁寧で驚くほど綺麗な文字で書かれた手紙が届きます。

「貴方のことは高校時代から（その後のいろんな会合の時にも）物静かで、どこか他の同級生とは違っていました。……」「みたいな、一見せてあげたいくらいです——学生時代を思い出させる、ときめき心いっぱいのレターです。

もしかしたら誰でもいいのかも知れませんが、しかも、彼女等の多くは高校時代にはクラスのマドンナとして数多くの同期男子の片思いの傾城たちです。

……とまあ、書いていくと限りが無く、且つ貴兄にとって無関係のことばかりなので止めますが……つまずきたいことは、何歳になっても扁頭体をびくびく

くさせる気持ちだけは（いやらしい意味ではなく）忘れないことだと思います。

親として、夫として、身近の親族の代表者として、あるいはしがらみの取りつかれた身近の社会のリーダー格としての「自分」。それなりに立派なことだし、勲章者かも知れませんが「それはそれで壊さないまでも」それが自分のこれから先の人生のnon（処世訓）ではないと言つことを自覚することです。

自分のこと言えば、これから先は1日をより長くする努力をしたい、いかに睡眠時間を少なくするか、3時間長く起きていると1週間が8日になる。1年が13カ月になります。その為には睡眠時間を5、6時間に縮めよう。

今までは、8時間寝ていたなら2時間を読書か、好いテレビ観賞に使えばいいでしょう。

謙遜ではなくこの記念誌の作品群は——自分のものも含めて恥ずかしく読み返したくもない——たいした内容——ではありませんが、これを手にした同期人たちは過去を懐かしみながら、同期としての誇りのようなものを感じてくれているように思いました私たちにはもう具体的なスケジュール表はあてにならないのだな、と感じた昨年末から今年初めの出来事でした。

今からは現在・過去・未来で済むのではと思います。もちろん明日を含む未来です。そうそう、過去といえは記憶のことですが人間の記憶は時系列に、つまり年代順に並んで記憶されていないのではないかと思います。他人と話をしている自分だけがその同じ過去の出来事を全く憶えていない「えっ認知症」とあせることはありませんか。

人それぞれ自分の整理タンスを脳内に持っていて、その時の受信程度によって整理されるケースが違うんだと思っんです。

ポーっとしていたり、聞いてても感銘を受けなかったり、また時にはすごいショックを受けたり、そくそくと胸がときめいたり……と、その程度ごとに個人の整理ダンスの場所が違うのじゃないかと思えます。

胸キュンの入るケースは「その人の扁頭体を通りますから」とても、クリアで昨日の事のように思い出す。

本人は目の前に浮かんで現れるのではないか、と思っんです。

何を言いたいかと言つと全く記憶にない時はその時記憶の箱に入れなかったか、つ

まり、もう取り出すことはならぬ」箱に保存されたというわけ。
なので認知が来た心配はなしというわけ。

つい先日妻の伯母が「へんなりました」が周りの兄弟姉妹が一緒に回顧する言葉が「頑張ったから、急ぎ過ぎたのだよ」「無理していたからね」と言いつづけているわけ。
まあ、必ずしも言葉通りではないうえに、わいわい、これからは、元気なうち
はどうか、肉体の頑張りは程ほどにしたいと思いつつです。

間違っても若いものに負けるものかはずりませぬ。
他人が重い荷物を持ってくるときは、あるいは、「わだしがとって来るから」などの
場面が来たら「悪いはねえ」がいちばんの正解です。

これからは他人が代われない自分の足腰の鍛錬などは欠かさずマイペースで鍛えて、
仲間内の旅などへの参加の為の準備を、自信付けを心がけましょう。
写真のことで思いますが、何かあって、その人の写真が欲しい時、本当に写っ
ている目当ての写真がないことです。1000枚ある中で4、5枚あったらいい方
です。

一枚もいいのがない方が多いです。いや、写っているんですよ集合写真にはいっ
ぱい。

さて、私ごとですが、新年会が終わったころ、75歳以後の生き方についてふっと考
えて見ました。思うことは自分の宿題についてでした

。もう今から手足を動かすものはパスしようと思います。体力維持のジョギングや
水中歩行などはいいといて、今更テニスやサッカーなどはごめんです。

それにしても（少しは知っているけど他人に語れるほど）知らないことがこの世の
中にはいっぱいあることに驚かされます。眼から得る知識はテレビや読書で得られ
ますが目ほど能動的に耳を使っていないのに気付きました。そうだからからは耳が
遠くなる可能性が強いです、そう思うと急に音楽を聴きたくなりました。

昔の音楽は脳内の音楽ケースにも、スマホやiPadにも2000曲以上の音楽
がストックされてあるけど好きなのに未開拓な音楽の分野があることに気がつきま
した。まずは耳慣れたジャズは横に置いてクラシックに挑戦しようと思いついた
のです。

今まではシンフォニー、コンチェルト、ソナタ、重奏団など演奏形式にジャンル

分けて聴いていました。それを演奏家ごとで聴いてみようと思いついたのです。
ベートーベンとモーツァルトそれにチャイコフスキーは（とらうよりほとんども
らが中心の）交響曲と協奏曲は何度も聴いてくる（BGM風にすけどね）ので今度
はブラームスとマーラーを解説書を見ながら聴き学びつつうかと思いついた
です。

イヤホン感覚でも聴けるように考えました。
クラシックは高音域と低音域の幅が広いのでBluetoothを通してワイヤレスでそれ
なりのスピーカーで聞こうと奮発してBOSE（ボーズ）の小さいけれど驚くほど高
性能つまり大型スピーカーに負けないいい音が出るのをアマゾンでネット買
しました。

ちなみに（Bose SoundLink Mobile speaker II）30,000円です。繋ぐコード
も電源コード不要なカバンに入れて持ち運べる超便利なスピーカーです。
こう見えても僕は昔はオーディオマニアでした。

音の入り口（カートリッジ）から出口はもちろん繋ぐケーブルにまでこだわった時
代（40年前）もあったのです。

無料のアプリMusicTubeeからプレイリストを作り、取り込んだ曲を寝る前に1曲
（30分程度）ずつ聴くことにしました。

何かを学ぶ、気持ちがあがきめく、脳細胞を刺激するつまり、若さを保つためにいち
ばん苦もなく得られるものが耳からの刺激だったと思いついたのです。

寝ていても、雨も嵐も関係なく、手足を使うこともなく刺激を受けるものは聴覚に
しかずと思いついたのです。まあかなりこじつけですがね。

寝る前には猫を膝の上に乗せハイボールを片手にブラームスのピアノコンチェル
ト第一番に浸り、朝の目覚めとともに、ベッドの中で猫の足をもみながらマーラー
の『巨人』を聴く・・・そんなイメージは抱いて戴ければ幸いです。

あなたはこんな瞬間ってありませんか？

今朝のこと起床して庭を眺めながら、まだ習いたての気功（鶴翔練功）の型マネ
をしていました。

暖かい朝でした。 銀杏の葉と桃の葉が黄色く、透明がかっていて 今にも落

ちそうな気配です。

フ、フ、木々を見上げていた時、瞬きのようなそのほんの一瞬、その時がよぎったのです。

「トバで表現できない瞬間。その風景の中に溶け込んで、とても小さいころの僕が、

一枚の写真の中に収まっている・・・そんな感じとらいつたり、近いかもしれない。たまたまいい気持ちで、「よぎる」と言う表現がいいのか、「フッと現わ消え」その速さは、「現われ」と「消える」の間に、「もつかないへうらいの速さ」ですが。

僕が中国に郷愁を感じるとすれば、「この一瞬の」よぎる」が僕の原風景なのかも知れません。

「自分の過去にあったことは決して忘れる事はないのです。なかなか思い出す」とは出来ないにしても・・・」

今日、久しぶりに、観て来た映画「千と千尋の神隠し」のなかで聞いたセリフです。「忘れてしまった記憶が甦る」なんてフレーズをよく聞くことがありますが、これなども「フト思い出した」が正しいのかもしれない。

自分の記憶の中にはっきり思い出せる風景は僕の場合、大龍小学校の一年生（北京から引き揚げてきて1年か2年位）か、もう少し前の阿久根にいた半年ぐらいか、それは断片的ではあっても、はっきり僕自身であって、セリフは覚えてないけど、動画として、紛れもない自分がそこに居る。

ところが、それ以前つまり、大陸での自分は「・・・のような気がする」そんな暗示にかかった世界でしかない。大陸で生まれ、幼少を北京で過ごしたことは事実なのだから、当時の北京がまだ残っている中国の何処かに僕の原風景、つまり瞬・まばたきの景色があるに違いない。そんな風景を見つけ、過去を思う存分思い出して見たい。・・・僕が中国に着かれるとしたら、そんな気がしてならない。

人は生まれてきて成長を続ける。成長を続ける為には目標が必要となる。目標は二つある。一つは生甲斐としての内部目標を達成するため、もう一つは今という外部状況に対して外部目標を瞬時に設定する事で今を生かせる。

夢のような大きな生甲斐感を内部目標として設定した人は、夢の実現はなかなか到らないので、それだけ大きな困難や苦勞を背負って生きる。しかし、この夢の実現に取り組んでいる事に意味を見出し、輝いて生きる事ができるかが問われるのである。孔子は「論語」の中でこのことを次のように述べている。

・・・「之を知るは 之を好むに如かず。之を好むは 之を楽しむに如かず」と

人の生甲斐感をどのように設定するかは、その人の歩んできた人生と、そこから将来の人生をどのように設計すに依存する。

日常の平凡さを最も大切な生甲斐感として設定し、日々の状況の中で最善に生きることで至福感をつる人もいる。自分で自分の人生の舵取りをして、困難に立ち向かい輝いて生きることで周囲の人を引き上げようとも出来る。

あなたはストレス ありますか？ 有る有る？

「ストレスの解消には美容室でのシャンプーが一番。」そんなお客様は結構多い。

「僕、ストレスって、あまり感じた事ないんです。」「アラ、いいわね、先生は趣味も多いし・・・」

そんな会話は結構多い。

いろんなことが頭に詰まっっていて、脳が混乱してしまうとストレスが発生する。とすれば、そのいろんなことを一つ一つ始末していけば解決するはずだけど、「解決出来ないからストレスになるの」となるから始末におえない。

僕が思うに、悩み、ストレスに目的を設定すればどうだろう、解決出来ないだろうか。

目的のある悩みはむしろ楽しみに変わることが多い。と思う。

これは僕の経験。

たとえば、あるイメージを白い紙にデザイン化しようとする時、つまり目的を具象化しようとする時、頭の中は、あれこれ悩み苦しむ、しかしこのことは楽しみでこそあれ、ストレスでは決していない。といっても、これは僕の場合だが。しかしこれには約束があって、結果を必ず、出来るだけ早く出すことである。そして次の悩みに集中して、それを解決する。

それと、僕がつとめて努力していることは、二人称、また三人称が「・・・がど

う考えてるか、思っているか・？」とこういふことを考えないことについて。

このことは、とてもとてもむずかしい問題である。相手が、立場上、上位にある場合は特にむずかしい。こういふ時は、まさに、相手にどう思われようが、無視する事である。

世の中には「上手にあしらわなければならない人」が一人や二人は必ずいるものです。まあ**天敵**ですね。そういう人は、・・・そういう人の為にあなたの人格はけっしてマイナス評価はされません。ご心配なく。そんなことを考えてるから、悩んでるから、ストレスが起きるのです」。

「コンプレックスというトトバは余り好きではありません。」

何故なら、うけるイメージが暗いというか、マイナスの感じがするからです。

「人知れぬ悩み」と言えば、内容は同じでも、こちらの方は青春の甘酸っぱさを感じます。

多分、人は皆、今まで引きずってきた。そしてこれからも決して誰にも言わない「人知れぬ悩み」を複数個、黄泉の国まで持っていくことでしょう。

やはり、最愛の人は自分自身だからでしょうか？

『人知れぬ悩み』ってどんなのでしょうか？

僕は小く中学にかけて赤面症？でした。特に女の子が傍にくると顔がほてり、真っ赤になるのです。皆が付けてくれたあだ名（ニックネームなんてしゃれた言葉はなかった）が**ユダコ**これはもう「人知れぬ悩み」の始まりでした

しかし、これは今に引きずってないし、こうして言えるので違うのでしょうか。

確実に今、「人に言えない悩み」が二つあります。そして、もし、仮に誰かに打ち明けたとしたら、「なーんだ、そんなこと、別に君だけじゃないよ。たいしたことないじゃない。」といわれるに違いありません。そんな悩みかもしれません。

でも、この二つは僕にとって解決できれば、これからの人生ガラリと変わるほどの大きな悩みなのです。

知られたくない、触れられたくない『人知れぬ悩み』を、もし持たない人がいたとしたらその人は感性の乏しい人間だと思います。・・・

2013年の想い出

早いもので花の都から薩摩の国に戻って20日が過ぎようとしています。最近なぜか「**過ぎる**」ということが気がなります。

昔、小椋佳が書いて、井上陽水が曲を作り、唄ったフォークソングがありました。ほくは作詞した小椋佳本人が唄う『白い一日』の方が好きでしたが、3番目の歌詞の『通り過ぎる汽車を待つ君が遮断機が上がって振り向いた君はもう大人の顔をしていた』を聞いてから1番目の歌詞を聞くと眺めていた陶磁器は君自身だと確信していました。

「真っ白な陶磁器をながめては飽きもせず、かといって触れもせず、そんなふうに君のまわりで僕の一日が過ぎて行く」は若い頃の想像をたくましくしたものでした。でもこの当時はあまり関心がなかった4番目の歌詞が最近主役に躍り出てきました。

ちなみに4番目の歌詞は「ありふれた幸せを 持ち込めればいいのだけれど 今 日も一日が過ぎてゆく」と、けだるさだけが残る歌ですけど、ほーっと過ごしてしまっただの終りに、つい口ずさんでしまいたくなるのはなぜでしょうか。それもこんなふうに間違えて唄が聞こえてくることがあります。

「ほくのまわりで今日も一日が過ぎて行く」と。

過ぎゆく一日一日を今、自分はどこ捉えているのだろうか。

こころの奥底ではこれはまきれもなく「焦り」と「諦感」にちがいないと。さて、後先になりましたが、2013年5月16日と言った日は今回の東京旅行で思い出深い1日になりました。15日〜22日まで1週間どの日も充実してはいたけど、16日は本当はいちばん予定のない移動日のつもりでした。

大相撲も、プロ野球も時間が合わないしな、と思案しながら。

前日、急に東京タワーに行きたくなりアクセスをあれこれ考えていました。ネックは重い旅行カバンの処置でした。そんなとき、東京の友人から「渋谷おはら祭で玉龍が踊るから見に行ったら」と電話がはいり、ほくの脳内無線が「渋谷おはら〜木村幸枝」とつながり、すっかり今回は忘れていた貴女の顔が浮かびました。

瞬間、あの日のふたりの行動は過去形として浮かんでいました。ので、あのときの電話の貴女の返事は僕にとってシナリオ通りのストーリーだったのです。(ごめんね)

ほんとうにいい日でした。とりわけ渋谷までふたりで乗った路線バスの記憶はぼくの宝ものになるようにしよう。

あんなにしてふたりで2泊3日ぐらいの国内旅行をしたいね。ツアーには熟年夫婦の想い出旅行と違って。

元気でいたらある日とつげんぼくからこんな唐突なでんわがないとは限りませんよ。何年先なのか、夢でおわるのか、神頼みですけどね。

東京

に行く時はまた二人でデートしましょう。

—あるものを見るという人の顔がすべしかなんていふようにある。

あるものといってもいろいろで歌名(メロディ)の場合もあれば食べ物の場合もある。

ある場面—たとえば、風呂に入る、道路を車で走っていてある曲がり角にさしかかると一瞬、ある人の顔が浮かんでくるとか、脳の何処かの部位がフラッシュバックする。

先日、高校3年のクラスメートだったホットマンさんから上のようなメールが届いた。

ぼくとクリスマスローズが重なった(といっても直接にはなくお父様と介してだが)そうでこの場合「光栄です」と喜んでいいものかよくわからない。

とりわけ僕の場合はメロディとある人が重なることが多い。

自前のカーステレオから流れてくる曲に乗って懐かしい友との想い出の光景を次々に想い浮かべるのはたのしいことである。

思いつくままに何名か実名をあげてみようと思う。

「ならばシャマイカーハリーベラフォンテ」は市来龍作と鹿児島駅前の音楽喫茶「エデン」そしてダブるようにあの当時登場したばかりの33センチLPが脳裏に浮かんでくる。

「ブルースを唄おう」と「雨に歩けば」は中学時代からのぼくの悪友(とても親しかったという意味で)有村文之の口ずかすおも顔があらわされる。

しかも決まって文之が結核を患って入院していた照国神社の下の高岡病院の病室で

ある。

交わした会話まで浮かんでくる。

大平博美は小学校の5、6年から中・高・大人まで仲良かったけど顔にダブるメロディは「三橋美智世の愛ちゃんはお嫁に」なのは何故なんだろっか。

唄っている場所は横浜綱島のアパートである。

もう1曲ぐらいあるだろうといえばあった。「アンソニーパーキンスの月影のなきさ」博美は故郷宮崎に帰ってお父様の仕事の跡を継いで鉄道郵便の職につき仲間とハワイアンバンドを作って楽しんだと聞いた。

浜崎隆くんはペアリングしているぼくの脳裏の曲はと言えば何と言ってもロッキングロール、初期のエルヴィスナンバーが彼のボディアクションと共に甦ってくる。「冷たくしないで」などだ。

大学の頃の仲間は多いが兄の友達(名前は忘れた)が唄っていた裕ちゃんの「男の横丁」も懐かしい。

相本の従姉妹のかっちゃん(カワいい共立高校1年生)は飯田久彦の「ルイジアナママ」そして名古屋のサー坊は「東京ナイトクラブ」「マヒナスターズ」と続いている。

美容師の先生時代に次々に代わる店のスタッフ(16才から23才ごろまで)の顔もその時代を共有した歌手やグループがくっついているから面白い。沼田聖子とドリームスクラムトゥール。大重?と「しおさいの詩」

ところで不思議なことに、60代以降に数知れない中国人朋友たちと付合っただけで何故か名前とすく浮かんでくる音楽はない。

最初に書いた車を運転している時の人で何故その場所かと、どうしても解けない人の名は川越睦子である。もう説明が長くなるので彼女のことは忘れて下さい。車が左折するとすく近くに隠れ家のようなホテルがあったようななかったような。

○ 美しい花色、探して見ます。??夫人もショックから??花談義たのしいでした。ホットマン37

○ 2014年 八期の皆様へ

八期記念誌の編集をしていて、得た?収穫のひとつは・・・同期の皆様のだとった足

跡を少しなりとも、なぞることが出来たのかも知れません。

多くの友人たちが学校を卒業後それぞれの職業を得て、ある者は教職の道に進み、
又ある者は企業戦士として日本の高度成長の担い手になった。

なかには世界を舞台に活躍した仲間も多く、その赴任手記を読むと、かねてテレビやその他の情報から得られるものより何倍もその土地に対して親しみが感じられます。

「イタリヤの小さな村」「研修の為に滞在したパリでの経験」「アフリカ・マリの物語」「ドイツの街を汽車での長期旅」「スイスの山を踏破」したり・・・関連したテレビ番組を新聞の番組表で見つけると、友人たちの顔を思い浮かべながらつい録画予約をしてみます。

これもたのしい収穫のひとつでした。

テレビ観賞で影響されたことのひとつに昨年からはまった「八期夢紀行」があります。いままであまり気にしなかった『旅番組』に目がいくようになりました。

これから八期で行く予定の、あるいは行って来た旅番組を見つけるとつい「わくわく予習」や「思い出復習」などに夢中になってしまいます。

それまで一はまっていた「サスペンスドラマがすっかり遠のいてしまいました。

さて私たち八期生にとって今年は、あまり嬉しくない後期高齢者の烙印を押され分水嶺（人生の最後の関所）の年になりました。

とうとう人生レースのアンカー（最終走者）になってしまいました。「もうへとへとよ」なんて言わないでくださいね。愉しみはこれからです。

「ゴールをめざして、高校時代の運動会を思い出しましょう。

これからの1年1年が人生のピークを迎えようとしている年なのかも知れません。

ここでのんびり時空をたのしんでいるといつのまに身近な人達に「心配と云う名の自由を」剥ぎとられることになるかもしれません。そんな親切な人達が私を気にし

始める前に大いに「今なら出来る自由を」謳歌したいものです。そんなこんなで、精神

さえしっかりとしていれば身体の方はもうあまり頑張るのはよしませんか。決して無理！特にパワーは出さないことです。

重すぎる荷物を持たないことです。注意したいのは瞬発力、これは私たちには死語

にしたい言葉です。と言ってじっとしては筋肉も骨も衰えるだけです。からほどほどの運動だけは続けましょう。

いつまで続くかわからない八期遠足に参加しようと思うなら、体力。気力の鍛練だけは欠かせません。がんばり過ぎない程度のエクササイズをお続け下さい。

八期記念誌が「八期通信」の最後なら、20年の八期会の集大成を画像（動画も含め）で迎える「映像の八期会」を作ってみましょう。

記念誌の写真ではあまりに小さすぎた「学生時代の思い出の写真」なども、このDVDだと、観たい所で「一時停止」ボタンを押してゆっくりご覧になると思います。もう一度押すと元に戻るはご存知ですね。

又、長すぎるので後半黒幕に音楽だけが流れる箇所があります。少し休憩の時間を設けてあります。しばらくすると動画（後半）がはじまります。

どうぞ来年が草原を駆けまわる可愛い**×リー**さんの羊のような明るい年であることを お祈りいたします。

おおいしけいじ 上村篤義先生 大石慶二

2014.12.4

●お便り有難うございます。

2, 3日前、年末に長田の同級達と男女ら、6名で会おうと言う事になり市来龍作くんと「先生元気かな」と言ったら「元気そうやっど、みなみの応援で達筆なガキがきた」と言う返事でした。

今度、ふたりで川内に会いに行こうか、と語り合うことでした。

さて、記念誌を早速、送ります。

本づくりも結構楽しいものです。仲間の励ましに乗って完成しました。

皆からのお礼のメールや手紙がうれしいものです。10月に完成しました。

1と月後に20名の元気な仲間と奈良・大和路を歩きまわって来ました。

毎年みんな元気なものです。でも、ビデオで見ると悲惨なものです。もう少し颯爽といっている積りですがね。どうぞ、送ったDVDをお楽しみください。

重複したかも知れませんが長田時代の写真も再度作りなおしておくりします。

あの頃のことは先生は失礼かもしれませんが時代がピンポイントで思い出さないかも、と思い、僕の記録物語りを同封しました。小学校から高校までをダイジェス

トで書いています。

大親友だった有村パチンコ君や、内くん、福くんなどが音信不通で寂しいです。生きているやら分かりません。

それでも名簿を見るとおわかりでしょうが旅行などで集まると、話題は高校時代を飛び越えて長田のわんぱく代にタイムスリップします。

勉強もほとんどせず、毎日学校で何していたのでしょうか。

体育部の仲間が忙しかったのかも知れませんが。

僕など中学3年のころは有村のパチンコ屋で「お富さん」や「真室川音頭」を聞きながらパチンコのじゃらじゃら音の中で遊んだり、山形屋や西本願寺かいわいが遊びの縄張りでした。

時折、図書館に勉強の真似をしに行つて、帰りは副島さんの家を覗いてみたり、そんなことしか憶えていません。

この前、律子さんにあつた時「大石くんは右で追っかけられて恐かつたのよ」と言われたけど「哲二と間違つてるんじゃない」と言いました。

ほくなど大人しいものだったと記憶していますけど。

・・・とまあ、皆と会うとまだこの歳になつてそんな話に花が咲くんです。もう他の話には花も咲かなくなりました。

実は僕も（いい風呂の日、11月26日誕生日）に後期高齢者の烙印を押されました。今まで使っていたプラスチックの健康保険カードがペラペラの紙に変わりました。治療費が安くなったので我慢しますが車の免許更新も「認知症検査」が加わり落ち込んでいます。

話は変わりますがもしよかつたらほくたちが先生の川内を訪問して（新幹線で行きます。少し飲むかも知れませんが）クラス会をしてもいいと思います。

場所と、日時を指定してもらえれば幸いですよ。四元政明くんが川内在住ですので、彼に段取りさせても良いかなと思つています。（平成30年6月20日に改

ほくの60歳代は中国美女（万人が認める美人とは限らない）に取り巻かれていました。（これもただ単に関わつていた程度かも知れない）といつても何名かは（シヤケンと云う名の長沙女はラブライターをうっかり見られて妻にばれたけど）彼女らとは、告白しますが、いわゆる「ゆへく」ころまではいきませんでした

彼女らが一様にほくに言った言葉は「先生は若いデスネ。まだ充分恋人候補に値しますヨ」でした。

今、70歳台になり中国語での会話と中国自体がほくからいろんな意味で遠くつてしまいました。

そんな訳で回帰本能のようなものに引きずられ高校、大学時代の過去美女（ときに両性）に関心が移ってきました。

さすがに肉体的には接触したとしても一切のときめきは感じませんが「ゆめまほろしのむかし」に戻つて（正面は現在、背面は過去）の顔を交互に使い分けて付合つています。

記念誌の発行以来、ほくからの電話をこつぜん受ける彼女等の電話口での表情は歓喜に震えているように覚えます。

こつぜん、あこがれのタフガイ・裕次郎が甦つてきて「わたしに電話をしてきた。

しかも、旧姓を呼び捨てだったり、むかしの愛称を言ってくれたワ・・・」そんなリアクションです。

もう、しゃべるは、しゃべるは、学生時代にほとんど話したこともない（僕らの時代は共学は登下校のときだけ）なのに喋りすぎて、ほくの用件も聞かないまま切つてしまう人もいます。

そのあとしばらくすると丁寧で驚くほど綺麗な文字で書かれた手紙が届きます。

「貴方のことは高校時代から（その後のいろんな会合の時にも）物静かで、ほかの同級生とは違つていました。・・・」「みたいな、一見せてあげたいくらいですー学生時代を思い出させる、ときめき心いっぱいのレターです。

もしかしら誰でもいいのかも知れませんが、しかも、彼女等の多くは高校時代にはクラスのマドンナとして数多くの同期男子の片思いの傾城たちです。

・・・とまあ、書いていくと限りが無く、且つ貴兄にとって無関係のことばかりなので止めますが・・・つまり言いたいことは、何歳になっても扁頭体をびくびくさせる気持ちだけは(いやりしい意味ではな)(な)忘れないことだと思います。

親として、夫として、身近の親族の代表者として、あるいはしがらみの取りつかれた身近の社会のリーダー格としての「自分」。それなりに立派なことだし、勲章者かも知れませんが「それはそれで壊さないまでも」それが自分のこれから先の人生のno1(処世訓)ではな(い)言(い)ひ(ひ)を自覚する(じ)よ(よ)ね。

自分のことでは、これから先は1日をより長くする努力をしたい、いかに睡眠時間を少なくするか、3時間長く起きていて1週間が8日になる。1年が13カ月になります。その為には睡眠時間を5、6時間にすることを。今までは、8時間寝ていたから2時間を読書か、好いテレビ観賞に使えばいいでしょう。

謙遜ではなくこの記念誌の作品群は—自分のものも含めて恥ずかしく読み返したくもない—たいした内容—ではありませんが、これを手にした同期人たちは過去を懐かしみながら、同期としての誇りのようなものを感じてくれているように思いました。

私たちにはもう具体的なスケジュール表はあてにならないのだな、と感じた昨年未から今年初めの出来事でした。

今からは現在・過去・未来(き)づ(づ)み(み)の(の)では(は)と(と)思(思)います。もちろん明日(あ)す(す)を(を)含(含)む(む)未(未)来(来)です。そうそう、過去といえは記憶のことですが人間の記憶は時系列に、つまり年代順に並んで記憶されていないのではないかと思います。他人と話をしている自分だけがその同じ過去の出来事を全く憶えていない「えっ認知症」とあせることはありませんか。

人それぞれ自分の整理タンスを脳内に持っていて、その時の受信程度によって整理されるケースが違つんだと思つんです。ポーンとしていたり、聞いてても感銘を受けなかったり、また時にはすごいショックを受けたり、そくそくと胸がときめいたり・・・と、その程度ごとに個人の整理

タンスの場所が違つたのじゃないかと思つます。

胸キュンの入るケースは「その人の扁頭体を通りますから」とても、クリアで昨日の事のように思い出す。

本人は目の前に浮かんで現れるのではないかと思つんです。

何を言いたいかと言うと全く記憶にない時はその時記憶の箱に入れなかったか、つまり、もう取り出すことはない「ミ箱」に保存されたということ(こと)です。なので認知が来た(き)と(と)心(心)配(配)し(し)な(な)い(い)言(言)ひ(ひ)ね(ね)。

つい先日妻の伯母が「くくなりま(ま)した(た)が(が)周(周)りの(の)兄(兄)弟(弟)姉(姉)妹(妹)が(が)一(一)様(様)に(に)回(回)顧(顧)す(す)る(る)言(言)葉(葉)が(が)「頑(頑)張(張)つ(つ)た(た)か(か)ら(ら)、急(急)ぎ(ぎ)過(過)ぎ(ぎ)だ(だ)の(の)ぢ(ぢ)」「無(無)理(理)し(し)て(て)い(い)た(た)か(か)ら(ら)ね(ね)」「言(言)つ(つ)勞(勞)い(い)こ(こ)は(は)で(で)した(た)。

まあ、必ずしも言葉通りではないでしょうが、わ(わ)わ(わ)わ(わ)わ(わ)、これからは、元(元)氣(氣)な(な)う(う)ち(ち)は(は)と(と)い(い)う(う)か(か)、肉(肉)体(体)の(の)頑(頑)張(張)り(り)は(は)程(程)ほ(ほ)ど(ど)に(に)し(し)た(た)い(い)と(と)思(思)つ(つ)こ(こ)と(と)です(す)。

間違つても若いものに負けるものか(か)は(は)も(も)う(う)あ(あ)り(り)ま(ま)せ(せ)ん(ん)。

他人が重い荷物を持ってくれる時は、あるいは、「わ(わ)た(た)し(し)が(が)と(と)つ(つ)て(て)く(く)る(る)か(か)ら(ら)」「な(な)ど(ど)の(の)場(場)面(面)が(が)来(来)たら(ら)」「悪(悪)い(い)は(は)ね(ね)え(え)」「が(が)い(い)ち(ち)ば(ば)ん(ん)の(の)正(正)解(解)です(す)。

これからは他人が代われない自分の足腰の鍛錬などは欠かさずマイペースで鍛えて仲間内の旅などへの参加の(の)為(為)の(の)準(準)備(備)を(を)、自(自)信(信)付(付)け(け)を(を)心(心)が(が)け(け)ま(ま)し(し)よ(よ)う(う)。

写真の(の)こ(こ)と(と)思(思)い(い)ま(ま)す(す)こ(こ)と(と)は(は)、何(何)か(か)あ(あ)つ(つ)て(て)、そ(そ)の(の)人(人)の(の)写(写)真(真)が(が)欲(欲)しい(い)時(時)、本(本)当(当)に(に)写(写)つ(つ)て(て)い(い)る(る)自(自)当(当)て(て)の(の)写(写)真(真)が(が)な(な)い(い)こ(こ)と(と)です(す)。100枚ある中で4、5枚あつたらいい方(かた)で(で)す(す)。

1枚もいない方が多いです。いや、写(写)つ(つ)て(て)い(い)る(る)ん(ん)です(す)よ(よ)集(集)合(合)写(写)真(真)に(に)は(は)、い(い)っ(っ)ぱ(ぱ)い(い)。

さて、私(わたし)の(の)こ(こ)と(と)で(で)す(す)が(が)、新(新)年(年)会(会)が(が)終(終)わ(わ)つ(つ)つ(つ)た(た)こ(こ)ろ(ろ)、75歳(さい)以(も)ち(も)の(の)生(な)き(き)方(かた)に(に)つ(つ)いて(いて)は(は)と(と)考(考)えて(て)見(み)ま(ま)した(た)。思(思)う(う)こ(こ)と(と)は(は)自(自)分(ぶん)の(の)宿(しゆく)題(だい)に(に)つ(つ)いて(いて)で(で)した(た)。

もう今(いま)か(か)ら(ら)手(て)足(あし)を(を)動(うご)か(か)す(す)も(も)の(の)は(は)パ(パ)ス(ス)し(し)よ(よ)う(う)と(と)思(思)い(い)ま(ま)す(す)。体(てい)力(りき)維(い)持(ぢ)の(の)ジ(ジ)ョ(ョ)ギ(ギ)ン(ン)グ(グ)や(や)水(みづ)中(ちゆう)歩(ぽ)行(ぎやう)な(な)ど(ど)は(は)い(い)い(い)と(と)して(して)、今(いま)更(さら)テ(テ)ニ(ニ)ス(ス)や(や)サ(サ)ッカ(カ)ー(ー)な(な)ど(ど)は(は)こ(こ)め(め)ん(ん)です(す)。

それにしても(も)少(せう)し(し)は(は)知(ち)っ(っ)て(て)い(い)る(る)け(け)ど(ど)他(た)人(にん)に(に)語(かた)る(る)ほ(ほ)ど(ど)知(し)ら(ら)な(な)い(い)こ(こ)が(が)こ(こ)の(の)世(よ)の中(ちゆう)に(に)い(い)っ(っ)ぱ(ぱ)い(い)あ(あ)る(る)こ(こ)と(と)に(に)驚(おど)か(か)さ(さ)れ(れ)ま(ま)す(す)。眼(まな)か(か)ら(ら)得(え)る(る)知(ち)識(しき)は(は)テ(テ)レ(レ)ビ(ビ)や(や)読(よみ)書(しょ)で(で)得(え)ら(ら)れ(れ)ま(ま)す(す)が(が)目(め)ほ(ほ)ど(ど)能(のう)動(どう)的(てき)に(に)耳(みみ)を(を)使(つか)っ(っ)て(て)い(い)ない(い)の(の)に(に)気(き)付(づ)き(き)ま(ま)した(た)。そ(そ)う(う)だ(だ)こ(こ)れ(れ)か(か)ら(ら)は(は)耳(みみ)が(が)

遠くなる可能性が強いぞ、そう思うと急に音楽を聴きたくなりました。

昔の音楽は脳内の音楽ケースにも、スマホやiPadにも2000曲以上の音楽がストックされてあるけど好きなのに未開拓な音楽の分野があることに気がつきました。まずは耳慣れたジャズは横に置いてクラシックに挑戦しようと思いつたのです。

今まではシンフォニー、コンチェルト、ソナタ、重奏団など演奏形式にジャンル分けして聴いていました。それを演奏家ごと聴いてみようと思いついたのです。ベートーベンとモーツァルトそれにチャイコフスキーは（というよりほとんどこれらが中心の）交響曲と協奏曲は何度も聴いている（BGM風ですけどね）ので今度からはブラームスとマーラーを解説書を見ながら聴き学びようかと意気込んでいます。

イヤフォン感覚でもどこでも聴けるようにと考えました。

クラシックは高音域と低音域の幅が広いのでBluetoothを通してワイヤレスでそれなりのスピーカーで聞こうと奮発してBOSE（ボーズ）の小さいけれど驚くほど高性能つまり大型スピーカーに負けないいい音が出るのをアマゾンでネット買いました。

ちなみに（Bose SoundLink Mobile speaker II）30,000円です。繋ぐコードも電源コード不要なカバンに入れて持ち運べる超便利なスピーカーです。こう見えても僕は昔はオーディオマニアでした。

音の入り口（カートリッジ）から出口はもちろん繋ぐケーブルにまでこだわった時代（40年前）もあったのです。

無料のアプリ Music Tube からプレイリストを作り、取り込んだ曲を寝る前に一曲（30分程度）じっくり聴くことにしました。

何かを学ぶ、気持ちごとくきめく、脳細胞を刺激するつまり、若さを保つためにちばん苦もなく得られるものが耳からの刺激だったと思いついたのでした。

寝ていても、雨も嵐も関係なく、手足を使うこともなく刺激を受けるものは聴覚にしかずと思いついたので。・・・まあかなりのじつけですがね。

寝る前には猫を膝の上に乗せハイボールを片手にブラームスのピアノコンチェルト

ト第1番に浸り、朝の目覚めとともに、ベッドの中で猫の足をもみながらマーラーの『巨人』を聴く・・・そんなイメージは抱いて戴ければ幸いです。

あなたはこんな瞬間ってありませんか？

今朝のこと起床して庭を眺めながら、まだ習いたての気功（鶴翔練功）の型マネをしていました。

暖かい朝でした。 銀杏の葉と桃の葉が黄色く、 透明がかっていて 今にも落ちそうな気配です。

フト、木々を見上げていた時、瞬きのようなそのほんの一瞬、その時がよぎったのです。

「トバで表現できない瞬間。 その風景の中に溶け込んで、とても小さいころの僕が、

一枚の写真の中に収まっている・・・そんな感じだったら、近いかもしれない。 たまらなくいい気持ちだ、 「よわい」と言う表現がいいのか、 「フッと現れ溢る

ぬ」 その速さは、 「現われ」と「消える」の間に、 「もつかないくらい速いのですが。

僕が中国に郷愁を感じるとすれば、この「瞬の「ゆきり」」が僕の原風景なのかも知れませぬ。

「自分の過去にあったことは決して忘れる事はないのです。 なかなか思い出すことは出来ないにしても・・・」

今日、久し振りに、観て来た映画「千と千尋の神隠し」のなかで聞いたセリフです。 「忘れてしまった記憶が甦る」なんてフレーズをよく聞くことがあります、これなども「フト思い出した」が正しいのかもしれない。

自分の記憶の中にはっきり思い出せる風景は僕の場合、大龍小学校の1年生（北京から引き揚げてきて1年か2年位）か、もう少し前の阿久根にいた半年くらいか、それは断片的ではあっても、はっきり僕自身であって、セリフは覚えてないけれど、

動画として、紛れもない自分がそこに居る。

ところが、それ以前つまり、大陸での自分は「・・・のような気がする」そんな暗示

にかかった世界でしかない。大陸で生まれ、幼少を北京で過ごしたことは事実なの

だから、当時の北京がまだ残っている中国の何処かに僕の原風景、つまり**瞬・まばた**きの景色があるに違いない。そんな風景を見つけ、過去を思う存分思い出して見たい。……僕が中国に惹かれるとしたら、そんな気がしてならない。

人は生まれてきて成長を続ける。成長を続けるためには目標が必要となる。

目標は二つある。一つは生甲斐としての**内部目標**を達成するため、もう一つは今という**外部状況**に対して外部目標を瞬時に設定する事で今を生かす。

夢のような大きな生甲斐感を内部目標として設定した人は、夢の実現はなかなか到らないので、それだけ大きな困難や苦勞を背負って生きる。しかし、この夢の実現に取り組んでいる事に意味を見出し、輝いて生きる事ができるかが問われるのである。孔子は「論語」の中でこのことを次のように述べている。

「……之を知るは 之を好むに如かず。之を好むは 之を楽しむに如かず。……と」

人の生甲斐感をどのように設定するかは、その人の歩んできた人生と、そこから将来の人生をどのように設計すに依存する。

日常の平凡さを最も大切な生甲斐感として設定し、日々の状況の中で最善に生きることで至福感をつる人もいる。自分で自分の人生の舵取りをして、困難に立ち向かい輝いて生きることで周囲の人を引き上げてしまうことも出来る。

あなたはストレス ありますか？ 有没有？

「ストレスの解消には美容室でのシャンプーが一番。」「そんなお客様は結構多い。

「僕、ストレスって、あまり感じた事ないんです。」「アラ、いいわね、先生は趣味も多いし……」

そんな会話は結構多い。

いろんなことが頭に詰まっっていて、脳が混乱してしまうとストレスが発生する。とすれば、そのいろんなことを一つ一つ始末していけば解決するはずだけど、「解決出来ないからストレスになるの」となるから始末におえない。

僕が思うに、悩み、ストレスに目的を設定すればどうだろう、解決出来ないだろうか。

目的のある悩みはむしろ楽しみに変わることが多い。と思う。これは僕の経験。たとえば、あるイメージを白い紙にデザイン化しようとする時、つまり目的を具象化しようとする時、頭の中は、あれこれ悩み苦しむ、しかしこのことは楽しみでこそあれ、ストレスでは決してない。といっても、これは僕の場合だが。しかしこれには約束があって、結果を必ず、出来るだけ早く出すことである。そして次の悩みに集中して、それを解決する。

それと、僕がつとめて努力していることは、二人称、また三人称が「……がどう考えてるか、思っているか……？」ということを考えないことにしている。

このことは、とてもとてもむずかしい問題である。相手が、立场上、上位にある場合は特にむずかしい。こういう時は、まさに、相手にどう思われようが、無視する事である。世の中には「上手にあしらわなければならない人」が一人や二人は必ずいるものです。まあ**天敵**ですね。そういう人は、……そういう人の為にあなたの人格はけっしてマイナス評価はされません。ご心配なく。そんなことを考えてるから、悩んでるから、ストレスが起きるのです」。

コンプレックスというコトバは余り好きではありません。

何故なら、うけるイメージが暗いというか、マイナスの感じがするからです。

「人知れぬ悩み」と言えば、内容は同じでも、こちらの方は青春の甘酸っぱさを感じます。

多分、人は皆、今まで引きずってきた。そしてこれからも決して誰にも言わない「人知れぬ悩み」を複数個、黄泉の国まで持っていくことでしょう。

やはり、最愛の人は自分自身だからでしょうか？

『人知れぬ悩み』ってどんなのでしょうか？

僕は小く中学にかけて赤面症？でした。特に女の子が傍にくると顔がほてり、真っ赤になるのです。皆が付けてくれたあだ名(ニックネームなんてしゃれた言葉はなかった)が**ユデダコ**これはもう「人知れぬ悩み」の始まりでした

しかし、これは今に引きずってないし、こうして言えるので違うのでしょうか。

確実に今、「人に言えない悩み」が二つあります。そして、もし、仮に誰かに打ち明けたとしたら、「なーんだ、そんなこと、別に君だけじゃないよ。たいしたこと

ないじゃない。」といわれるに違いありません。そんな悩みかもしれません。

でも、この二つは僕にとって解決できれば、これからの人生ガラリと変わるほどの大きな悩みなのです。

知られたくない、触れられたくない『人知れぬ悩み』を、もし持たない人がいたとしたらその人は感性の乏しい人間だと思えます。……

2013年の想い出

早いもので花の都から薩摩の国に戻って20日が過ぎようとしています。

最近なぜか「過ぎる」ということはが気になります。

昔、小椋佳が書いて、井上陽水が曲を作り、唄ったフォークソングがありました。

ぼくは作詞した小椋佳本人が唄う『白い一日』の方が好きでしたが、3番目の歌詞の『通り過ぎる汽車を待つ君が遮断機が上がって振り向いた君はもう大人の顔をしていた』を聞いてから1番目の歌詞を聞くと眺めていた陶磁器は君自身だと確信していました。

「真っ白な陶磁器をながめては飽きもせず、かといって触れもせず、そんなふうに君のまわりで僕の一日が過ぎて行く」は若い頃の想像をたくましくしたものでした。でもこの当時はあまり関心がなかった4番目の歌詞が最近はず役に躍り出てきました。

ちなみに4番目の歌詞は「ありふれた幸せを 持ち込めればいいのだけれど 今 日も一日が過ぎてゆく」と、けたるだけが残る歌ですけど、ぼーっと過ごしてしまっただの終りに、「つい口ずさんでしまいたくなるのはなぜでしょうか。それもこんなふうに間違えて唄が聞こえてくることがあります。

「ぼくのまわりで今日も一日が過ぎて行く」と。

過ぎゆく一日一日を今、自分はどう捉えているのだろうか。

この奥底ではこれはまきれもなく「焦り」と「諦感」にちがいないと。さて、後先になりましたが、2013年5月19日と言いつ日は今回の東京旅行で想い出深い1日になりました。15日～22日まで1週間どの日も充実してはいたけど、19日は本当はいちばん予定のない移動日のつもりでした。

大相撲も、プロ野球も時間が合わないしな、と思案しながら。

前日、急に東京タワーに行きたくなりアクセスをあれこれ考えていました。

ネックは重い旅行カバンの処置でした。そんなとき、東京の友人から「渋谷おはら祭で玉龍が踊るから見に行ったら」と電話がはいり、ぼくの脳内無線が「渋谷おはら〜木村幸枝」とつながり、すっかり今回は忘れていた貴女の顔が浮かびました。

瞬間、あの日のふたりの行動は過去形として浮かんでいました。ので、あのとぎの電話の貴女の返事は僕にとってシナリオ通りのストーリーだったのです。(ごめんね)ほんとうにいい日でした。とりわけ渋谷までふたりで乗った路線バスの記憶はぼくの宝物になることでしょう。

あんなにしてふたりで2泊3日ぐらいの国内旅行をしたいね。ツアーには熟年夫婦の想い出旅行と偽って。

元気でいたらある日とつぜんぼくからこんな唐突なでんわがないとは限りませんよ。何年先なのか、夢でおわるのか、神頼みですけどね。

東京 に行く時はまた二人でデートしましょう。

「**あるものを見る**と**ある人の顔**が**すく**に**浮かんでくる**という**瞬間**。

あるものといってもいろいろで歌名(メロディ)の場合もあれば食べ物の場合もある。ある場面(たとえば、風呂に入る、道路を車で走っていてある曲がり角にさしかかると一瞬、ある人の顔が浮かんでくるとか、脳の何処かの部位がフラッシュバックする。

先日、高校3年のクラスメートだったホットマンさんから上のようなメールが届いた。

ぼくとクリスマスローズが重なった(といっても直接にはなくお父様と介してだが)そうでこの場合「光栄です」と喜んでいいものかよくわからない。

とりわけ僕の場合はメロディとある人が重なることが多い。

自前のカーステレオから流れてくる曲に乗って懐かしい友との想い出の光景を次々に想い浮かべるのはたのしいことである。

思い出すままに何名か実名をあげてみようと思っ。

「ならびにジャマイカーハリール・ベラフオンテ」は市来龍作と鹿児島駅前の音楽喫茶「エデン」そしてタブラユウにあの当時登場したばかりの33センチLPが脳裏に浮かんでゐる。

「ブルースを唄おう」と「雨に歩けば」は中学時代からのほくの悪友（とても親しかったという意味で）有村文之の口ずさむ顔があらわれぬ。

しかも決まって文之が結核を患って入院していた照国神社の下の高岡病院の病室である。

交わした会話まで浮かんでくる。

大平博美は小学校の5・6年から中・高・大人まで仲良しだったけど顔にタブラ・メロディは「三橋美智也の愛ちゃんはお嫁に」なのは何故なんだだろうか。

唄っている場所は横浜綱島のアパートである。

もう一曲ぐらいあるだろうといえはあった。「アンソニー・パーキンスの月影のなごさ」博美は故郷宮崎に帰ってお父様の仕事を継いで鉄道郵便の職につき仲間とハワイアンバンドを作って楽しんだと聞いた。

浜崎隆くにペアリングしているほくの脳裏の曲はと言えは何と言ってもロックンロール、初期のエルヴィス・プレスリーが彼のボディアクションと共に甦ってくる。「冷たくしないで」などだ。

大学の頃の仲間が多いが兄の友達(名前は忘れた)が唄っていた裕ちゃんの「男の横丁」も懐かしい。

相本の従姉妹のかっちゃん(カワいい共立高校1年生)は飯田久彦の「ルイジアナママ」そして名古屋のサー坊は「東京ナイトクラブ」「マヒナスターズ」と続いている。

美容師の先生時代に次々に代わる店のスタッフ(16才から23才まで)の顔もその時代を共有した歌手やグループがくっついてくるから面白い。沼田聖子とドリームズカムトゥルー。大重?と「しおさいの詩」

ところで不思議なことに、60代以降に数知れない中国人朋友たちと付合ったけど何故か名前とすゝ浮かんでくる音楽はない。

最初に書いた車を運転している時の人で何故その場所と、どうしても解けない人の名は川越睦子である。もう説明が長くなるので彼女のごことは忘れて下さい。車が左折するとすゝ近くに隠れ家のようなホテルがあったようななかったような。

○ 美しい花色。探して見ます。??夫人もショックから??花談義たのしいでした。 ホットマン3.7

○ 2014年 八期の皆様へ

八期記念誌の編集をしていて、得た?収穫のひとつは・同期の皆様のだとった足跡を少しなりとも、なぞることが出来たことかも知れません。

多くの友人たちが学校を卒業後それぞれの職業を得て、ある者は教職の道に進み、又ある者は企業戦士として日本の高度成長の担い手になった。

なかには世界を舞台に活躍した仲間も多く、その赴任手記を読むと、かねてテレビやその他の情報から得られるものより何倍もその土地に対して親しみが感じられます。

「イタリヤの小さな村」「研修の為に滞在したパリでの経験」「アフリカ・マリの物語」「ドイツの街を汽車での長期旅」「スイスの山を踏破」したり・・・関連したテレビ番組を新聞の番組表で見つけると、友人たちの顔を思い浮かべながらつい録画予約をしまいます。

これもたのしい収穫のひとつでした。テレビ観賞で影響されたことのひとつに昨年からはまった「八期夢紀行」があります。いままであまり気にしなかった『旅番組』に目がいくようになりました。これから八期で行く予定の、あるいは行って来た旅番組を見つけてほしい「わくわく予習」や「思い出復習」などに夢中になってしまいます。

それまで一はまっていた「サスペンスドラマがすっかり遠のいてしまいました。さて私たち八期生にとって今年は、あまり嬉しくない後期高齢者の烙印を押され分水嶺(人生の最後の関所)の年になりました。

とうとう人生シースのアンカー(最終走者)になってしまいました。「もうへと

へとよ」なんて言わないでくださいな。愉しみはこれからです。

「ールをめざして、高校時代の運動会を思い出しましょう。」

これからの1年1年が人生の「ピークを迎えよう」としている年なのかも知れません。

「このんびり時空をたのしんでいるというのまさに身近な人達に」心配と云う名の自由を「剥ぎとられることになるかも知れません。そんな親切な人達が私を気にし始める前に大いに「今なら出来る自由を」謳歌したいものです。

そんなこんなで、^{or}精神さえしっかりしていれば身体の方はもうあまり頑張るのはよしませんか。決して無理一特にパワーは出さないことです。

重すぎる荷物は持たないことです。注意したいのは瞬発力、これは私たちには死語にしたい言葉です。と言っつじっつとしていては筋肉も骨も衰えるだけです。からほどほどの運動だけは続けましょう。

いつまで続くか分からない八期遠足に参加しようと思うなら、体力。気力の鍛練だけは欠かせません。がんばり過ぎない程度のエクササイズを続け下さい。

八期記念誌が「八期通信」の最後なら、20年の八期会の集大成を画像(動画も含め)で迎える「映像の八期会」を作ってみました。

記念誌の写真ではあまりに小さすぎた「学生時代の思い出の写真」なども、このDVDだと、観たい所で「一時停止」ボタンを押してゆっくりご覧戴けると思います。もう一度押すと元に戻るのにはご存知ですね。又、長すぎるので後半黒幕に音楽だけが流れる箇所があります。少し休憩の時間を設けてあります。しばらくすると動画(後半)がはじまります。

どうぞ来年が草原を駆けまわる可愛い**メリーちゃん**の羊のような明るい年であることをお祈りいたします。

おおいつけごじ

上村篤義先生

2014.12.4

お便りの有難うございました。

2, 3日前、年末に長田の同級達と男女5, 6名で会おうと言っ事になり市来龍作くんと「先生元気かな」と言ったら「元気そつやっど、みなみの応援で達筆なハガキがきた」と言う返事でした。

今度、ふたりに川内に会いに行こうか、と語り合っつていました。

さて、記念誌を早速、送ります。

本づくりも結構楽しいものです。仲間の励ましに乗って完成しました。

皆からのお礼のメールや手紙がうれしいものです。10月に完成しました。

1ヶ月後に20名の元気な仲間と奈良・大和路を歩きまわって来ました。

毎年みんな元気なものです。でも、ビデオで見ると悲惨なものです。もう少し颯爽と歩いている積りなのですがね。どうぞ、送ったやり取りをお楽しみください。

重複したかも知れませんが長田時代の写真も再度作りなおしております。

あの頃のことは先生は失礼かも知れませんが時代がピンポイントで思い出さない

かも、と思い、僕の記録物語りを同封しました。小学校から高校までをダイシエス

トで書いています。大親友だった有村パチンコ君や、内くん、福くんなどが音信不

通で寂しいです。生きているやら分かりません。

それでも名簿を見るとおわかりでしょうが旅行などで集まると、話題は高校時代を

飛び越えて長田のわんぱく代にタイムスリップします。

勉強もほとんどせず、毎日学校で何してたのでしょつか。

体育部の仲間は忙しかったのかも知れませんが。

僕など中学3年のころは有村のパチンコ屋で「お寛さん」や「真室川音頭」を聞き

ながらパチンコのじゃらじゃら音の中で遊んだり、山形屋や西本願寺かいわいが遊

びの縄張りでした。

時折、図書館に勉強の真似をしに行っ、帰りは副島さんの家を覗いてみたり、そ

んなことしか憶えています。

この前、律子さんにあった時「大石くん石で追っかけられて恐かったのよ」と言

われたけど「哲二と間違ってるんじゃない」と言いました。

ほくなど大人しいものだったと記憶していますけど。

……とまあ、皆と会うとまだこの歳になってそんな話に花が咲くんです。も

う他の話には花も咲かなくなりました。

実は僕も（いい風呂の日、11月26日誕生日）に後期高齢者の烙印を押されました。

今まで使っていたプラスチックの健康保険カードがぺらぺらの紙に変わりました。治療費が安くなったので我慢しますが車の免許更新も「認知症検査」が加わり落ち込んでいます。

話は変わりますがもしよかったですらばくたちが先生の川内を訪問して（新幹線で行きます。少し飲むかも知れませんが）クラス会をしてもいいと思います。

場所と、日時を指定してもらえれば幸いですよ。四元政明くんが川内在住ですので、彼に段取りさせても良いかなと思っています。

9の記念誌が届きました。（2014.10.17）

●大石さん

ほか 編集部 作成協力者 隈元さん 森さんこんばんは。

表記 記念誌 本日 拝受しました。いやー大変 お疲れ様でした。大変な力作 たいへんな 作業だったことでしょう！

ざあっと めくりましたが、読むのにも ひと苦労といった感じがします。この文字サイズ 最近 長い時間見ると 目に疲れ？が出るようです。しょしょしてきます。寄稿者のみなさん なかなかの原稿を作っておられます。関心しました。恥ずかしいです。

今度の旅行までに 読み終えるように 努力します。記念誌をバラバラとめくり自分のもの 大石さん よく構成していただきありがとうございます。

浜崎隆さんの文の中で 屋久島旅行での屋久杉館での説明嬢が 平敷（旧姓牧）由紀子さんに似ていたとの話が出ていたが 私は 全然気づかなかったが この平敷さんは 関西の枚方市東香里に住んでおられたようですが関西八期会には 多分一度も出席されていないと思います。連絡してくれるな・・・といわれていたようです。牧さんに 好意をもっていた人がおりました。私の親友で 有村純也さん（4組） 鹿児島大農学部農芸化学科在学中に 尿毒症を患い亡くなった。彼が

好意を抱いていた。（いいなあ・・・）聞かされていました。有村純也さんは 下田町で 一学年下で英語弁論で賞をもらった 女性の有村恵子？とは 従妹？親戚 隣の屋敷に住んでいて、私も 下田の三文字を東へ入ったところ、純也の家に遊びにいったことあり。（お互いに 父親が いなかったこともあり 戦死）牧さんは長い髪の清纯な感じのする女性であったかな？記憶している。

木場祥雄

●電話でのお礼

永留弘之川口洋子、西野紀代子、平澤希代子、

拝見了解です。昨夜かなり読みました。貴方の扁桃体から始まる作品？笑いました。まだ心身共にお若いですが。暫く頑張ってくださいね 携帯メールでのお礼：吉松典子

●大石様

八期会5周年記念誌 受領しました。

素晴らしい記念誌 皆様

のお力です。 八期 同期の皆様 多士済々ですね。 投稿されていない方も またドラマを持っておられることでしょう。 この冊子を最終とするには なんとなく寂しいですね。 有難うございました。 長崎

諫早 森永

●西山和宏です。イヤハヤ 本当に凄いものが届きました。内容・装丁 同期

会誌としては空前絶後のものです。かなり読みでもありそつで読むのを楽しみにしています。「西山文庫」などというものを開設され、イケンカ セント イカン と思っています。私にできることは、スーパーマーケットなどの流通業界、食品メーカーなどに関する米国情報です。とは言っても どのようになりますか。子どもや孫にも誇れる記念誌本当にありがとうございます。 西山

● 隆くん：記念誌如何でしたか？堀田さんから昨日は「メールはしないとメールしましたが、また来ないのですが、ヤマトなら風ころ、郵便局なら風からの配達も2時あります。佐川急便ですか？朝から楽しみに待っているのですけどね」

4通目のメールが届きました。こんなに楽しみに待っていてくれる仲間がいるのは作り甲斐があるというものです。さて、15日から出来あがった作品はばらばら目を通したばかりでしたが、木場くんから貴方の『メモリーズ オフ・ユー』の内容についてコメントが来たので、今日、思い出してページをめくって

みました。よく出来た文章でした。手前味噌で言えば挿入画像と位置バランスが絶妙(他の作品に比べても)です。最初の出だしの、貴方が「この部分は全部、カットしてくれ」と言っつのを残してよかったです。作品の格を高めていると思います。それと、最後のエピソードも決まっています。一除夜の鐘の数、百八は煩惱を表すと言いますーが良いです。四苦八苦の解釈から、それへの想いと繋げ終り。途中の黒木為義くんの鹿の写真と・・・砂浜に寝そべって満天の星空のもと、将来の夢を訥々と語った彼の夢を今、私は想い出せない・・・これもなかなかですよ。でも、最高は牧由紀子のくだりでしょう。何度も読み返す男性が多いのでは。見れば見るほど写真もはまっています。

●大石さん先日はお忙しい中、本当にありがとうございました。素晴らしい、表紙に見入ってしまいました。

故郷のシンボル、桜島と八期会、久しぶりに、満喫いたしました。

孫たちと玉龍高校を訪れ、あの桜の木の下で写真を撮ってきたばかりでした。

一気に読んでしまいました。入佐くんのアーカイブス、改めて御礼申し上げます。

伊地知さんの記事の中で、エッセイターが閉まる直前、彼の目から涙があふれていたと、書いてありましたが

奥様の話では、後にも先にも彼が号泣したのはあの時だけだったとか。

浜崎会長をはじめ、八期会の皆さんの、深情けが、伝わって続いているのですね。

取り敢えず、御礼方々、ご挨拶まで。

伊藤 工子 〒253-0053

茅ヶ崎市東海岸北5-10-13

有り難うございました

●昨夜遅くまで読んで寝たからでしょうか？記念誌が書店に陳列されてる夢を見ました

本当にご苦勞様でした 記念誌を手にした時、言葉が見つからないくらい感動しました 完成までの道のり難儀された事と思います。記念誌のすっきりとした重みを感じて居ります 宝ものになりました 日々の楽しみとして読み続けて行きたいと思います。

木村美子

●大石さんへ

本日のメール便で2冊も送付していただき、有難く受領しました。事務局のお蔭で、見事に仕上がって、ここまでの編集、校正に頭がさがります。懐かしい諸兄諸姉が登場されて、青春時代の思い出集も満載で、写真も程よく挿入さ見こたえある出来映えが素晴らしく感謝します。また、拙者寄稿がトリにびっくり、恐縮しております。 有難うございました。 中間一巻

●今晚は🌕マークです。 恵美子さんも届きました！お騒がせしました!!

懐かしい方 満載で 特に 岩井君 大田君 平島君 中学の三年で 同級生でした まだ 走り読みですが

●大石慶二様 10/20日記念誌を受け取り、その日のうちに一気に全部を楽しく懐かしく読んだ。またにページを挿入された個人分のPDFも受領した。感謝とありがとうの一言だ。

玉竜八期会記念誌を受領しました。99年前の高校生活が目の前によみがえり、実に懐かしく楽しく一気に読みました。集まりにくい、しかも限られた数の原稿をもとに、古写真、アーカイブをうまく利用して、全体の構成がよく、細部まで気のくばられた無駄のない、内容たっぷり作品に驚きました。このような立派な記念号をつくられた浜崎

◎ありがとうございます。じっかが届いています。古くから浜崎くんにお礼の電話があったそうです。

●大石慶二様

お早うございます。雄大な桜島が美しいこの頃と思います。

このたびは八期記念誌の制作と送付お世話様でした。皆様のユニークな記述と冴えた編集に敬意を表します。楽しく拝読しています。ただ、私の手もとの記念誌は75ページ〜84ページ迄10ページが欠落しています。

ちゃんとしたものが欲しいのでお手間かけますがちゃんとしたものを再送付して頂ければありがたいです。

必要経費は振込み用紙を同封ください。以上宜しくお願いします。

木

場義孝

大石です。

●メールをみてびっくりです。そんなことがあるんですね。出版社に見せたので本だけ送り返して下さい。

欠落ページはこの記念誌の目玉とも言つべきアルバム帳のページです。新しいのをすぐ送りますから、費用の心配は一切ありません。出版社のミスとはいえ大変申し訳ありませんでした。送られた写真集をお楽しみください。返送は郵便でなく、クローネコなどのメール便だと1200円ほどで送れます。大石宛に送ってください。

森くん： 出版社のミスが発見されました。

●戻った記念誌は僕が確認して、リープに言います。別にひとこと言うだけで済ませようと思います。ただ、他になければいいですけどね。森くんは木場義孝くんに1冊、送ってください。種子島さん： 以下のようなメールが友人から届きました。一応確認しますが、写真なしの記念誌は1冊だけのミスで大丈夫でしょうか。

大石様、浜崎様 他に1冊様

●めっきの秋めくつてもう来ました。

お変わりなくお過ごしでしょうか。さて、本日、八期会卒55周年記念誌。手元に届きました。まっしりと心に響く冊子の出来栄えに感激したのは私ひとりではなかったと思います。

二十年近くの長きにわたって原稿依頼から編集、印刷、配布に至るまでこなしてこられた御苦労に、ただただ頭の下がる思いです。最後の通信と思うと感慨深く、うやうやしく頁をめくることでした。中でも大石さんの御苦労はいかほどばかりだったかと今更ながら感じることでした。本誌の中で浜崎会長さんが

“大石の苦労、活躍なくして会報の存在はなかった”と書いていらっしゃるが、つくづく私共もそう思います。

のんきなもので私など手元にお送りいただく度に大変だろうなと思いつつお会いする機会は幾度もあったにもかかわらず一度としてお礼さえも申し上げていなかったことに気づき今更ながら恥じ入るばかりです。

この場をかりて厚く厚く御礼申し上げます。本日は、とにかく一刻も早くお礼と感謝の気持ちを伝えたくペンをとりました。

(追伸 大石さん他この仕事に携わって戴きました方々に、感謝の気持ちを表したくほんの僅かばかりではございますが同封させて頂きました。皆様でお茶でも飲んで戴けたら嬉しいです。原田 十月二十日

●原田さん、こんにちは。

早速ご丁寧な記念誌に対するお礼のお便りをいただきありがとうございます。やはり封書でのお手紙はいいものですね。3度、読み返しました。

そして、何より「追伸」にびっくりしました。まっ更の「聖徳太子」に頭を垂れることでした。遠慮なく頂戴いたします。編集幹事で年末にでも打上会でもしてその時の貴重な財源として使わせて戴きます。何とか人生のラストステージに向けて貴重な八期会を細々でも繋げていきたい思いがあります。今、ネット上で『八期文庫』というのを作っています。知合いにパソコン、iPad、スマホなど持っている人がいたらこのURLで見ることが出来ますよ。

<http://www.nihao-kagoshina.jp/hatiki55.html>

未だ試作段階ですけど、原田さんとの交流なども掲載して行きたいと思っています。E

ッセイなど書いたらぜひ又送ってください。2年後は喜寿です。
又みんなで集まりたいと思っています。

大石

●おはようございます。大石さん、全部に挿絵と写真なんてすごいですね。一冊もいただきありがとうございます！ですが大石さんタイプジョンボなんです。私もです。冒頭からやられました。1980年月日の次にいきなり小田急ハルクがきているのです。「新宿の」が抜けてるのです。そんな筈はないと原稿を調べたら入ってました。貴方からの終りの三通には入ってませんでした。それに気付かなかった私もアホでした。新宿がないなんてホントにナンマでした。いろんな事がありましたから、そちらに気をとられたんでしょうね。立派に出来上がってからはどうにもならないでしようね。あの頃、小田急ハルクは新宿にしかなかったと皆さんが善意に解釈して貰えるよう祈ってます。どの時点で消えたのか知るよしもありますもの。大石さんには散々お世話になったのに気付くのが遅過ぎたごめんさいね。

曾根量幸

●曾根さんへ：

田舎者は小田急と言えば新宿です。大丈夫間違えませぬので。

大石

●返事です：そこののっそれなら通じるわけね。だけど大石さんは田舎の都会人だもんね。特別な才能に恵まれた！今回も企画から編集など全てに関わってるんですよ。半端じゃ出来ないこと、凄いですよ。ホントに貴方がいたからこんな素晴らしい本がこの年齢でできたのだと思います。感謝でいっぱい！です。一冊は大竜で一緒だった徳満佳子さんに差し上げます。(成して川井田外科の奥さんになったひと)六年生のときは三組だったかも。大石さんのことも手紙に書き添えようとします。いろいろありがとうございます！才能みちあふれた人へ。

曾根量幸

秋冷の夜長 人恋しくなるこの頃です。

●八期会五十五記念誌 ほんとうに ほんとうにありがとうございますございました。書くことは自分をみつめること どの作品も私をグッサー押しつけてくれました。活躍なりのながら 貴い時間のなかでの編集さぞ御苦労だったことばいよう。

いつも楽しみに八期通信を待っていた自分が申し訳なくて・・・編集後記、すてきでした。認めています。

編集にご協力くださった幹事の方々にもお礼を申し伝えて下さい。とり急ぎお礼まで

藤枝市 斯波

綾子

◎段々と秋めいてまいりました。

此の度は記念誌をお送り下さいますありがとうございますございました。セピア色の中の青々とした日々、その後の人生模様等等

感動しながら少しずつ読ませていただいております。

夫もさぞ生きて、手にしたかったことだらうと思ひ、裏表紙の写真をとって撫で摩ることでした。いろいろおせわになり感謝の言葉もありません。この想いをわすかですが同封させていただきました。心よりお礼申し上げます。

どうぞこれからも健勝でいらしゃいますようお願いいたします。十月二十五

日 有村尚代

◎お電話でお礼の言葉をさしあげておきました。

大石

拝啓 三組の益崎です。 八期会55周年記念誌と手紙を受け取り、私の

感想を書かせてもらいます。上山武郎君と若井英一君のところしか読んでいませんが昔のことをこれほど鮮明に憶えていて文章に書けると言うのは驚きです。

15年ぐらい前から日記を書いていますから4からの年前まではある日の日記を見ると、その時の情景や想いがすべに思い出され日記を書いていてよかったと思つたものですが、最近はある日のことを読んでもそんなことがあったと思う程度で、その時の情景や気持ち、感動など湧いて来ません。認知障害が少しづつおこっているものと思っています。

今から徐々に、皆さんの力作を読むつもりですが大石君の情熱には頭が下がります。長い文章をこれだけ集めて編集するのは大変な苦労があったと思います。

「ご苦勞様でした。

私の原稿については、君から「待ってるよ」と言われましたが書く内容が考えつきませんでした。申し訳なく思っています。皆さんの長文をよんで、同窓生それぞれの人生、生き方、考え方、なにより理解して50人〜100人の人生を私が生きてきたことと重ねれば現在75歳ですが75×50、自分も3750年生きたことになると思っっています。大石君その他55周年記念誌に關係して下さった方に本当にご苦勞様と申し上げたいと思っっていますと云います。

上はEメールに転載済み。

●記念誌の 7組の 東京き談の仮装行列の下に 7ページの真ん中の右側平澤さんが 着物着ている写真の左手にうつっている美人 誰かわかりますか!? 東京き談と同じような 格好だから 絶対7組の人と思っただけど どうしても解らず 今ちゃんに聞いたら 何と 9組の四元政明氏 なんですってよ! 存知でしたか? あんまりびっくりして 日曜日にめんまをPCで書き談のき という字ですが 糸へんに 崎の右側を書くのですが 電子辞書には載ってませんが 綺 電子辞書の虫が あやと見つけて ありました!

●東京へきていらしたのですね。お忙しそうですね。松前漬は遅くなった陣中見舞いですからどうぞ酒の肴でも食事でも食べてください。最初に記念誌を手にしたとき表紙の写真に驚きました。誰がどうやって撮ったのだろうと。やはり専門のプロだったんですね。桜島の煙りと湯飲みの組み合わせなんてすごいなあと。藤崎さんちの国際結婚式はほほ笑ましいでした。19年後のパパのスキンヘッドもその見事さに笑っちゃいました。武郎さんのフランス娘とのエッセーも洒落てましたけど、同期会での彼はほとんど喋らない人でしたからその落差に驚きました。崎元、西山さんは言うまでもなく、ドイツのことをまとめた中間さんもよく観察してましたね。数日したら典子(古松)さんと銀座で会います。いまサッカーが山場を迎えているし、フィギアダンスもシヨートをさっきまで見てましたし、病院通い、眼科と眼鏡やの往復一乱視が進んでるので厄介です。今宵も日付が変わりました。おやすみなさい!  曾根

●秋も深まってまいりました。

お元気で御活躍のよう嬉しく思っています。この度は「八期会卒55周年記念詩」をお送りいただきましてありがとうございます。大変な作業だったこととお察ししています。お役目の皆様の絆に感謝しています。

大石さんも自分のお仕事の傍ら長年に渡りお役目を引き受けて頂いたことに本当にご苦勞様でした。いつも同期の集いでお会いした時何となく違ふセンスの方だと感じていました。年数が経過してから伊藤さんが「大石さんは立教大よ」と聞いてなるほどと納得しました。私は兄弟二人が上京して池袋に住んでいました。高校三年間の夏休みは上京して、池袋から都電に乗り換えて数寄屋橋へ出て遊んでいました。懐かしい思い出を感じています。西口の立教大は行く度に 見 て い ま し た 。

HYさんより

●ご無沙汰しています。メール、また55周年記念誌送ってもらって有難うございました。

ちょっと留守にしまして昨日帰ってきましたら平澤さんの訃報が届きました。留守する前に記念誌ざっと見て、その心のもった紙面作りと八期会の皆さんとの交流の暖かさに、これはちょっと感動ものだと、帰ったらゆっくり読もうと平澤さんのもざっと見てあーがんばってるなーって思っていたことでした。同期会の皆様もさぞ驚かれたことでしょう。

そしてつくづく思いました。いつ何かあるか分からない年代だからこそ、このように言葉を残すことって大事なのだなって。その労を担ってくれる人がいて八期会の皆様は幸せですね。

クール・ストラッティーン』思わず読み込んでしまいました。ナルホド“扁頭体”か、…よし、鍛えるぞって、今こそ開眼。

それにしても、この記念誌すごいですね。それぞれの人生が詰まっていてどこかハジケている所が良いですね。

葉栢市秋山（旧姓副島）律子

●すばらしい卒記念誌が出来ましたね。実はわたしも書いていたのですが原稿が充分集まった由で、途中でやめています。大昔のおさないころの思い出です。ので、……。皆さんの文章をみて「やっぱり出さなくてよかった」と思いました。

東 佐津子

●M R Keiji

記念誌の前に、ここまでに至る 八期会の色々なことを思い起こしています。表紙の「玉八」の湯飲みが又何ともいえずほほえましく見入ってしまう。あれを作ると聞いた時は、湯呑みなんて捨てるほどあると思っただが、貴兄が「老人ホーム」に入居するとき「玉八」を持っていくと、よか思い出が忘れられずに次々と思いつけるし、知らん人には「これは玉龍八期の『シンボル』がんさあと自慢できるよ」との言葉に即 納得したものだ。ここに至るまでの貴兄の苦勞を思うと、頭が下がる。貴兄の記念誌に対する情熱は その細い身体からは想像もつかない。もう、八期の皆さんの手許に届いた事でしょう。

この難事業を成し遂げた貴兄に「おめでとう」の言葉と、総ての人を代表して感謝の念をお伝えします。 結婚45周年の夜 H26.10.19

浜崎 隆

2020.2.22 文章の整理まとめつみた。